昭和36年12月1日発行（毎月1回1日発行・第13巻第12号）昭和24年2月3日第3種郵便物認可　昭和34年12月11日国鉄東局特別扱承認雑誌第692号

月刊キリスト

12

特集・クリスマス

グラビア　北欧のクリスマス

わたしの見た明治・大正・昭和の日本　オーガスト・K・ライシャワー博士

シュヴァイツアーとともに　野村実博士の場合

伝道は信徒の力で　五十嵐健治

ローマ書講解に現われし

ルッターの根本思想

佐藤繁彦著

わが国ルター研究の先駆者である博士の最大の遺産ルター研究者必読書

—中売発—

＜A 5 判上製 750 円＞

ルターのことば

宝珠山幸郎訳

改革者ルターの文章より抜萃彼の偉大な信仰を知り力づけられる名言集

—発売中—

＜新書判 70 円＞

ヘブル書講解における

ルターの神学思想

岸千年著

ルター研究の重鎮による本書は、ルター研究者に対し新しい興味と関心とを与えつつある

—発売中—

＜A 5 判上製 550 円＞

神戸市生田区三宮町 1—319
振替神戸 25146
熊本市水道町 60
振替熊本 4525

創立十周年

聖文舎

東京都新宿区新小川町 3—16
振替東京 180336
名古屋市東区杉ノ町 1—1
振替名古屋 14073

あなたの心にイエス・キリストを！

キリストへの道すじ

尾崎主一著　ラジオ説教の珠玉篇。「父なる神とキリスト」「知恵ある子は父を喜ばせ、愚かなる子は母の悲しみとなる」「忙しさと信仰」ほか。新書判一五〇円〒30

救いの教理

郡博之著　だれもが知らねばならぬキリスト教教理の入門書。「神の本性をさぐる」「とらえられた私」「十字架の必然性」「死は人生の終着駅か」ほか。新書判一五〇円〒30

みあしのあと

シェルダン原作　とくに中・高校生むきに訳編された感動の名作物語。「イエスに従って生きるとはどういうことか」をテーマとした一大ロマン！〈別府信男訳編〉二〇〇円〒50

ヨルダン社

東京都渋谷区神山町 11
振替 東京一九五九三四

編集　山本泰次郎

昭和三十六年十一月第一回配本
以後毎月一回配本
昭和三十八年十一月完結予定

〈内容見本贈呈〉

内村鑑三信仰著作全集　全二十五巻

著書編

第1巻　求安録　キリスト信徒のなぐさめ　伝道の精神　他
第2巻　余はいかにしてキリスト信徒となりしか　他
第3巻　宗教座談　基督教問答
第4巻　地人論　異国史談
第5巻　何故に大文学は出でざるか　宗教と文学
第6巻　代表的日本人　コロンブスと彼の功績　他
第7巻　所感（上）
第8巻　所感（下）

教理編

第9巻　神　聖霊　三位一体　他
第10巻　キリスト
第11巻　聖書
第12巻　罪　贖い　悔い改め　十字架　福音　他
第13巻　最後の審判　再臨　復活
第14巻　神学　教義　礼典　奇跡
第15巻　キリスト教
第16巻　信仰　希望　愛　祈り　他

実践・人生編

第17巻　伝道
第18巻　教会　無教会　独立　他
第19巻　信仰生涯　兄弟　幸福　他
第20巻　家庭　人生　青年　職業　恋愛　結婚　労働　他
第21巻　非戦論　戦争　平和　政治　社会主義
第22巻　真理　正義　理想　芸術　禁酒　文学　他
第23巻　義人　友誼　師弟　武士道　文明　他
第24巻　日本　愛国　東洋　国家
第25巻　総索引　年譜

すいせん

「内村鑑三聖書注解全集」が予期以上に広い読者を得て完結に近づいていることを、私は悦ばしくまた当然の事のように思う。今度は引き続いて「内村鑑三信仰著作全集」全二十五巻の刊行に着手するという。そこに含まれる諸文章は、現在、たとい著者の名を削っても、なお生命力をもって立派にわれわれの胸にひびく日本の古典である。この新しい企画が一そう多方面に歓迎され、今日の魂の飢餓に応えうるように願ってやまない。

熊野義孝

東京・中央・銀座4－2　教文館　振替　東京　11357

信仰に生きる
シュヴァイツァーとともに
―野村実博士とそのサナトリウム―……41

キリスト教のいろは
これまでの総まとめ……島村亀鶴……58

聖句をめぐる座談会（司会）
悪いことばを語るな……石島三郎……62

恋愛論
欲情と恋愛……高木幹太……68

社会を見る目
株価の暴落……寺尾誠……66

本を読みましょう
クリスマスを中心に……49

わが信仰の生涯
伝道は信徒の力で……五十嵐健治……50
―クリーニングは生活の手段・目的は伝道―

連載小説
夜警番の日記……椎名麟三……72
―12 白い壁の中で―

読者の声……79

表紙・藤城清治　カット・山中春雄

12月号・目次

巻頭　世界を救うキリスト……小崎道雄…9
随想　静かなる細き声……篠田一人…10
　　あおい湖……関屋綾子…11
思いと祈り　新郎とともに・安息日……シュラッター　井上良雄訳…16
わたしの見た明治・大正・昭和の日本……オーガスト・カール・ライシャワー…18
特集・クリスマス
グラビア　北欧のクリスマス……1
——デンマーク・フインランド・スエーデン・ノルウェー——
伝道説教　人間苦のなかで出会う神……岸千年…12
詩　ああ小さき巷ベッレヘムよ……尾崎安訳…30
　　イエスの聖誕によせて……田口義弘訳…30
クリスマスを家庭に……新見宏…24
クリスマス子供の遊び……高橋四郎…26
ヘンデル「救世主（メサイヤ）」物語……原恵…28
童話　雪は消えるけど……北畠八穂…35

北欧のクリスマス

クリスマス特価提供

期　間　本年11月20日～12月31日
ご注文はお近くの書店にお願いいたします
直接ご注文の場合は前金で送料実費をいただきます

口語
旧約聖書略解　定価1000円 特価 900円

口語
新約聖書略解　定価 800円 特価 720円

有賀鉄太郎
歩みは光のうちに　定価 300円 特価 270円

隅谷三喜男
ともしびをかかげて　定価 120円 特価 100円

比屋根安定
教界三十五人像　定価 160円 特価 140円

佐伯俊
新版キリスト教ABC　定価 120円 特価 100円

石島三郎
山上の教え　講解と座談会　定価 200円 特価 180円

島村亀鶴
講話イエス・キリスト　定価 350円 特価 310円

宮内俊三
五番目の雀　キリスト教入門講座　定価 130円 特価 110円

由木康
キリスト教の基本線　定価 100円 特価 80円

H.E.フォスディック・林香武井素男
人間完成の道　定価 280円 特価 250円

黒田平治
キリストの足音　定価 200円 特価 180円

J.ベイリー・新見宏
朝の祈り夜の祈り　定価 160円 特価 140円

J.H.ジョエット　日野原善輔
日々の祈り　定価 120円 特価 100円

田中忠雄・中森義宗・柳宗玄
美術作品に見る　**キリスト**　定価 600円 特価 540円

岩村信二
キリスト教の結婚観　定価 250円 特価 220円

―― 女性と生活シリーズ ――

鈴木正久・奈良林祥・佐藤光子
結婚読本　定価 160円 特価 140円

渡辺道子
わが家の法律相談　定価 120円 特価 100円

白井常
幼児のしつけ　定価 100円 特価 90円

渡辺栄
自然の中で　たのしい自然観察　定価 160円 特価 140円

大塚野百合
真実を追って　一女教師のノート　定価 160円 特価 140円

関屋綾子
道はるかに　若き友との往復書簡　定価 120円 特価 100円

浅野順一・船水衛司 外
病む友へ　定価 140円 特価 120円

小野村林蔵・大塚甫 外
その人は慰められん　愛する者の死　定価 100円 特価 90円

久布白オチミ 外
五人の先生たち　定価 140円 特価 120円

鈴木正久・土居真俊・国谷純一郎
信仰希望愛　定価 140円 特価 120円

長谷川初音
キリスト教案内　定価 140円 特価 120円

高見沢潤子
うるおう園のように　私の花ことば　定価 120円 特価 100円

武田清子・椎名麟三 外
随想集　**生活と信仰**　上下　定価各120円 特価各100円

浅野順一・石島三郎・佐古純一郎
死と生をめぐって　定価 140円 特価 120円

―― クリスチャン・ブックス ――

E.ローゼ・青山四郎
マルコの見たキリスト　定価 120円 特価 100円

G.アプルトン　山岡喜久男
ヨハネの見たイエス　定価 140円 特価 120円

C.E.レイヴン　大和久泰太郎
キリスト教と科学　定価 120円 特価 100円

J.C.ベネット・後藤真
社会人としてのクリスチャン　定価 120円 特価 100円

D.T.ナイルズ・新見宏
現代人と聖書　定価 120円 特価 100円

J.フォスター・芦名直道
エルサレムから始まって　定価 120円 特価 100円

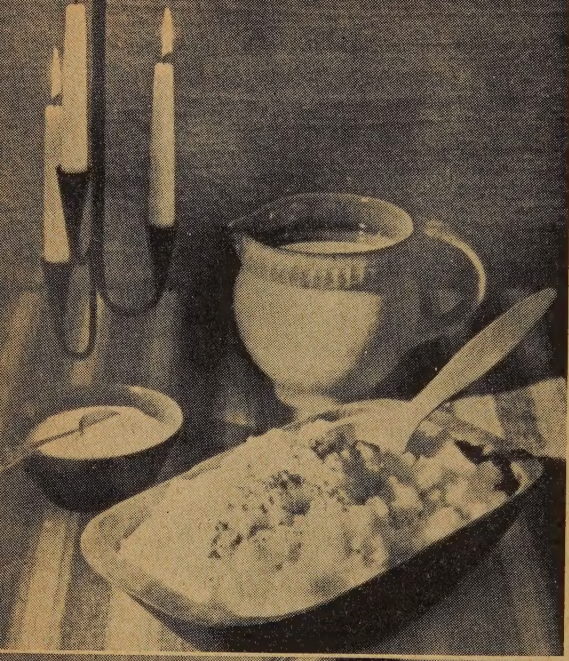
P.マイネア・滝沢陽一
イエスとその民　定価 120円 特価 100円

J.ティラク・太田俊雄
ある回心者の手記　定価 120円 特価 100円

V.S.アザライア・阿部志郎
クリスチャンのささげもの　定価 120円 特価 100円

S.ニール・海老沢宣道
クリスチャンの神　定価 120円 特価 100円

日本基督教団出版部
東京都中央区銀座4の2
振替　東京 188329



の木、雪ぞり、そしてサンタ・クロース、それが雪に埋もれたあたたかい家庭のなかで、数百年もむかしからの習慣とともに美しく色どられ、夢のように静かなファンタジーをうつし出している。そのうえ、それは長い信仰の伝統にささえられて、敬けんに思いも深く祝われる。ここには、たしかに本モノのクリスマスが存在する——

クリスマス・シーズン——それは北欧の人たちにとって、年一度最高にたのしいときだ。それは、クリスマスに先立つ四週間前の日曜からのアドヴェント（待降節）をもってはじまる。人々はいそいそとクリスマスを迎える支度にとりかかる。クリスマス料理の品物も豊富に買いこまれる。スエーデンでは、このシーズンはもっとはなやかに幕を開く。一二月一三日の聖ルシア祭がそれだ。子供たちがサンタ・ルシアを歌いながら、この朝ローソクを持って家族・親類を訪問する。町ではルシア〈光の女王〉にちなんで、美人コンテストが行なわれる。こうして一月一三日までの一ヵ月にわたるクリスマスシーズンが開幕となる。

イブは雪のなかを

深まりゆく雪、長い夜、遠出をしていた人たちがそれぞれの家庭にもどり、一家団らんのうちに静かなクリスマス・イブがくる……

この夜、はじめて公開となったツリーのまわりで、子供たちの歌が続く。フィンランドでは、みんな赤い帽子をかぶって、〈小人のおどり〉というたのしくにぎやかな遊びをする。

ノルウェーでは、はや暗くなった四時、家族そろって教会に集まり、心

胸はずむアドベント

北欧――それは、ヨーロッパ大陸とロシアの果てに横たわっている。背中合わせに大きく半島を形づくるノルウェーとスエーデン、そしてバルチック海を囲んで、それに向かい合うフィンランド、そしてスエーデンとノルウェーの西南端と海峡をはさんで相対する小国デンマーク。

北欧の冬は暗く長い。太陽は遅く顔を出し午後になるとはやばやと姿を没してしまう。あとは深い雪に包まれた長い長い夜――

だが、北欧は、それだけにクリスマスの本場だ。モミ

2. クリスマスを待つ商店の飾りつけは、気品があって美しい
3. モミの木を切り出して用意万全
4. 雪ダルマも待降節の点景

られた料理の数々だ。

フィンランドでは、この食事のあとで一同がツリーをかこみ、聖書を開いて、敬けんな家庭礼拝をすることになっている。どこもそうだが、ことにフィンランドでは、屋内のローソクの数がおびただしい。それは、どんな隅をも明るく照らし出す。ちょうど、暗黒の人間世界に、光明そのものとしてイエス・キリストが降誕されたように……

こうして、家庭礼拝や、年一度のデラックスな食事がすんだあと、ツリーを中心としたたのしい団らんのひとときだ。天井にとどくばかりの高いツリー、枝先にぶら下げられたキャンデーの色どりの美しさ、外では雪が音もなく降りつもり、暖炉の火はあたたかく燃えつづける……まさに北欧ならではのしみじみとしてたのしい夜である。

だが、クリスマス・カロルをうたっても、輪になって踊っても、子供たちの目はツリーの根元にピタリと吸い寄せられて離れない。そこには、アドヴェントのはじまるころから秘密のうちに用意されたクリスマスプレゼントが、きれいな色

写真説明

（フィンランドのイブのひととき、家族で墓参り、ローソクをかざる）

清まるクリスマス説教に耳かたむけたのち、一同で家路をたどり、そしてツリーのまわりでの団らんとなる。スエーデンでは、五時に教会の鐘が鳴り出し、人々はツリーをかこんで牧師さんの来訪を待つ。

「この家にはよい子がいますかな?」

「もちろんおります」

牧師とその家の主人の間で、どこの家でもこんな会話がなごやかに交わされる。

フィンランドでは、イブの行事すべてに先立ち、サウナとよばれる別棟の浴室で入浴し身と魂を清めてからツリーをかざる。そのあと、家族そろって食卓につき、讃美歌がうたわれ、福音書が読まれ、祈禱がささげられるのはどこも同じだ。ツリーのまわりでのにぎやかな団らんは、そういう本来のことがきちんと行なわれてからである。

料理と団らん

北欧の人たちは、雪で屋内に閉じこめられているから、食べることは大好きだ。クリスマス料理は、四カ国ともほとんど同じ。たくさんの、腕によりをかけて焼かれたクッキーが出される。米のカユのなかに、ミルクやらアーモンドやら、その国にしたがっていろいろなものが入れられた料理に、鵞鳥の丸焼やハムやソーセージ、焼きブタ、……ローヌクが台とともに添えられて、みるからにおいしそう。この日のために念入りにととのえ

たちはサンタクロースに対すると同じ期待を抱きながら眠りにつく。小人にたべてもらうクリスマスのごちそうをお盆の上にのせて、それをまくらもとに置いてである。ごちそうがすばらしければ、小人の置いていってくれるプレゼントもすばらしいなどと、子供らしいくふうをそこにこらしながら……

静かなクリスマス当日

明けて二五日、雪景色のなかを、さわやかに教会の鐘が鳴りわたる。フィンランドなどは六時、陽がのぼるのは九時だから、まだ暗いそのころ、

もう人々は群をなして教会に向かう。ほかの国でも、一〇時ごろは人々が出そろう。前日夕方から夜にかけての礼拝がそうであったように、このクリスマス礼拝には、ふだん教会へ行かない人たちも顔を見せる。どちらかと言えば、イブを迎える喜びで、前日の礼拝のほうが盛んだが、クリスマス当日のこれには、ふだんの礼拝のような静かなおちつきと荘重さがある。それでも会堂はどこもいっぱいだ。

希望なく光なき世に、ついに救い主イエスはきたりたまい、われらに新しく生きる道を開きたもうた。すべて彼を信ずる者に、彼を通して天国の門は開かれている——そういった単純で力強いメッセージが、深い

11. デンマーク、町角のサンタおじさん
12. 13. 子供はキャロル、おとなはダンス

紙で包まれ、リボンをかけられて置かれているからだ。

ころはよし、と見た父親が、やっとのことで子供たちをすわらせる。

「さあ、これはクレーキーに、それから、これは、ピーターに……」

もらった子供が、期待にみちた顔で包みを開ける。家族一同は手をたたいて、いいものをもらったことを喜ぶ。これは、主としてノルウェー、デンマークの習慣。この兄弟、友人同志のプレゼント交換のほかに、子供たちにとって、忘れられない喜びがある。サンタのおじさんがくるということだ。ツリーをかこんでいる団らんの場に乗りこむサンタもいるし、イブがふけて、子供たちがぐっすり眠っている間に、プレゼントを置いていくのもいる。いずれにしても、本モノの雪ぞりに乗ってヒゲも豊かに袋をかついでやってくるのだ。フィンランドでは、いなかに行かないと、どこでも本モノのトナカイを使うわけにはいかないので、やってくるサンタのおじさんは、ワラで作った小さなトナカイを、申しわけなさそうに持っている。それでも子供たちは、それがサンタクロースであることに一点の疑いもなく、それはまことに日本の子供などの想像できないほどの純真さで、うれしそうにサンタのおじさんをとりかこむ。

デンマークでは、親や兄弟の、ほかのプレゼントは、サンタおじさんでなく、どこの家にも隠れて住んでいる一種の妖精、その愛らしい小人が、夜の間まくらもとにもってきてくれると信じられている。ここでも、子供

月刊 キリスト・12月号

巻頭随想

世界を救うキリスト

小崎 道雄

四五年も以前のことである。わたしが北米オベリン大学留学中のクリスマスの野外礼拝で、当時の同大学総長チャーチル・ヘンリー・キング博士が先生一流の雄弁で「キリスト誕生がなかったなら」と題して説教されたあのことばが今もわたしに大きい印象を残している。

博士の『合理的生活』の名著はわが国にも多くの愛読者を持っている。博士は理路整然と人類歴史を語り、人類がキリストを中心として征服主義より奉仕主義に一八〇度の転向をしたことを高調されました。

近代におけるキリスト教宣教は三つの明白な階段を登って来た。わたしは恵まれてこの階段をともに登って来たもののひとりのように感ずるのである。

一九二八年のエルサレムの世界宗教会議は世界宣教史における大なる第一歩であったと思う。当時日本のキリスト教協議会は日本より八名の代表を送った。その中に三人の有力な宣教師があった。アキスリング、アイグルハート、ライシャワーの三博士であった。これらの人々もわたしどもも体験しているように、初代の宣教師たちは「キリストなしに死んで行く人人を見るに耐えない」という信仰を持って、一刻もはやく、ひとりでも多くのいわゆる異教の人々に福音を伝えたいとの熱禱をもって海外に出て行ったのである。

しかるに先きのエルサレム会議を起点として、宣教の動機は「キリストなしに生活する人々を見るに忍びない」と変わった。信仰の実践、救主に対する証人ということが、福音宣教の中心問題となった。

しかるに二回の世界戦争を経験した人類、そうしていまや第三回の世界戦争、原子力による人類破滅の戦争の恐怖におののいている全世界は、最後の段階ともいうべき生か死かの深刻な問題に直面している。

このときに当たり、一九五四年のエバンストン世界大会の標語「キリスト、世界の希望」は、今年の印度ニューデリー第三回大会では「キリスト、世界の希望」となって、全世界に反省と祈禱を求めている。

このたびの大会には、ソビエトのギリシャ・オーソドックス教会が、新しく世界教会協議会に加盟を申込んでいること、ローマン・カトリック教会が正式の傍聴者五名を送っていることなど、実に教会歴史上の大事件が起こらんとしている。

今日の世界、今日の日本の最大の問題は、キリストを個々の人間の救主として受け入れるだけでなく、キリストによる国家、キリストによる世界として更生することである。このことなしには世界は存在の理由を失うのみならず、破滅そのものである。

今年のクリスマスは特別なクリスマスとなることを切望するものである。キリストに生きる人々により社会国家が運用され、キリストにより明示された、全能の愛の神を信じ、人々を兄弟姉妹として愛しあう社会、国家、世界が実現することを信じることが、クリスマスの意味である。

このためには、キリストを受け入れる徹底的な悔い改めと全能の力を与える聖霊の降臨を待ち望む幼児のような信仰が必要である。

近年、日本のクリスマスは、ただ外面的なお祭騒ぎに終始していて、キリストなしには人間も世界も暗黒であることが徹底しない状態にある。

お祭りも時々はよいことがあるが、その意味がわからない日本の社会においては、お祭りそのものだけがクリスマスであるかのような印象を一般に与えている。少なくとも主にある兄弟姉妹、また聖書を愛読する人々の間においては

感動とともに人々に伝わっていく。

北欧の冬は暗く長い。だから人々の服装は美しい色彩をもっている。写真ではそれが見えずに残念だが、雪一色の道を、家路をたどる人々の色とりどりの晴衣は、年一度だけもって、目をみはるほど美しい。

この日には、人々は家に帰るまで、もう外出はしない。子供たちが、隣近所の友だちと、前夜もらったプレゼントの見せ合いをするほかは、おとなたちは静かにクリスマス気分にひたる。国じゅうの工場という工場は、労働をやめすべての店という店が戸を閉ざして商売を休む。日常のあわただしさは完全に取りやめ、人々は清い感動と平和のうちにクリスマスをすごす。この日は、とくに特別な人をのぞいて、他人の訪問はない。クリスマスを利用したドンチャンさわぎなどあろうはずがない。人々は、一年じゅうでいちばんたいせつなこの日を家庭で、家族だけで静かにしみじみと祝い喜ぶ。

そして、二六日になって、はじめて人々は他人を訪問し合い、剣をしたりダンスをしたりして、早くて一月六日、遅くて一三日までつづくこのゴールデンシーズンを、おとなも子供も喜び合うのである。

このページのため、左記のかたがたにお世話になりました。

スエーデン大使館
Rev. Mrs. Salomonsen
Rev. K. E. Melchiorsen
Miss. V. Kataja

ろうか。

（同志社大学文学部教授）

あおい湖

関屋　綾子

丘と畑の起伏をこえて、背後から汽車の警笛が追って来る。白い雲が静かに流れる青空の下の、峠へ向かう細い一本道を、夏の陽をあびて歩く。むせかえるような草のにおいが、鼻をつく。黒い土のかおりが、肌をとじこめる。信濃路の一山村をぬけて、野尻湖へ出るこの道である。一つ先の柏原駅は、観光で有名になって、そこからはバスもハイヤーもあるから、一はしりに湖畔に出られる。夏の日には、その辺は大ぜいの観光客でにぎわっている。一つ手前のこの古間駅は、都会の人の知らない駅だ。ほんとうに湖を知っていていちばん奥の人のあまり来ない、あの岸辺に、その場所を愛して、そこを目ざして行く人だけが知っている。わたしたちはYWCAのキャンプをしに、もう三〇年も毎年ここへ来る。

白い雲が道しるべのように、先にたって飛んで行く。静かな山の道である。はじめてここを歩いた日、少女であったわたしは、この平凡な、むしろひかえ目な風景がいつか自分の心の中に、はかり知れない厚みをもって、こんなに深深と座をしめるようになろうとは考えてもいなかった。

駅の近くでは、それでもひなびた何軒かの店が、軒を連ねているが、少し行くと人家はたえて、山の道にさしかかる。歩きたくなければ、柏原から、バスとモーターボートでやすやすと行けるし、そうやって行くこともあるのだが、わたしの中のなにかが、この道を通じて、つながっているのだ。雨あがりには、車の輪だちがめり込んで、雑草の間にほそ長い水たまりを作り、青空をうつしている。なだらかな畑地をのぼりきると、道は右に迂廻して、丘陵地にさしかかる。道の両側の茂みには、あまり太くない水ぶなの木が密生して、その中に唐松や若い白樺もまじっている。根元は、さまざまな色合の緑のくさむらにおおわれて土の肌は見えない。奥のほうは、陽の光も通らないで、薄ぐらい。しんとして無音で、年月の重さが茂みの中にじっと沈んでいる。さらにのぼって行く道の両側は松の木が多くなってくる。行く手が明るくなって、そこから道が下っているらしい。右手は盆地のようになって下へひらけているが、左手はただ木々の向こうに、妙に広い空がひろがっている。もう少し登ると、道はやはりそこがいちばん高くて、下り道に移りはじめた。瞬間に景色が切りかわった。

湖が見える。わたしは、ここの転換が、こよなく好きだ。白みを帯びた、あおい湖がそこにあった。遠く対岸のかなたにそびえる妙高の姿をうつして、湖はわたしを黙って迎えた。

かつて、はじめての日、その湖の左右の静けさに驚いてから、幾年の日々わたしはここに立って、湖にあいさつをおくったろうか。夏が来ればここへ帰って来る、自分の生活の周期のひびのあい間にわたしの生涯の数々のピークが、ことごとくたたみ込まれてきた。人間であるよろこびと、悲しみとそして運命ということばが、わたし自身の生活の中にはいり込んできたのも、湖の畔に行っては帰るいくたびかの夏の日々の間でのことであった。あるとき、わたしはもうひとり身ではなくなってここへ帰って来た。また、あるときは最愛のむすこを天へ送ってそしてここへ帰って来た。あるときはわたしをいつくしんだ母をなくして、また、ただひとりの兄をヨーロッパへ送って……。わたしはまた、さまざまな友に出会った。人間の愛と、誠実と、なつかしさと、また悲しさと、弱さとを、ゆきつもどりつする日々の間に、しみじみと知った。それらは、「永遠」ということばの中に定着する想いである。

峠の小道に足をとめて、わたしは白く光る、あおい湖を見つめる。やさしさが心にみちてくる。ここに年々来る若い人たちも、いつかはわたしと同じような想いでこの湖をみつめることであろう。湖畔での自分の仕事を、わたしはほんとうに幸せな仕事だと思っている。

（東京YWCAキャンプ教育委員長）

この危機に立つ世界の根本原因がキリストなしの世界であることが強く認識されることを祈ってやまない。

「時は満ちた、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」との主イエスの第一声は、今日の世界によびかけられている神の声である。

世界を救う者はキリストであり、キリスト以外に救いはない。これこそクリスマスの真のメッセージである。

（霊南坂教会牧師）

静かなる細き声

篠田　一人

近ごろは若いひとたちのあいだにハイキングがたいそう盛んだ。休日ともなれば近郊の山野の小道には、若ものの歌声がいっぱい、といったら大げさだが、じっさいたるところで大小のグループのハイカーに出会う。わたしもおなじように歩くのが好きだ。わたしはからだがあまり強いほうではないが、ただ両足だけはひとに負けないとおもっている。五体のうちでいちばん強いのが足で、上のほうにゆくほどだんだん弱くなる。だからわたしは頭がいちばん弱いのです、というのは、一つおぼえのぼくのしゃれである。ともかくたいしたためあてもなく郊外に出かけて半日か一日を歩きまわることの楽しさはかくべつだ。だが、このごろのようにいなかの小道にさえ三輪トラックや単車がはんらんするようになってくると、郊外の道もうっかりしてはおられない。そこで、しぜん、こうした車のゼッタイに前からも後からもやってくる心配のない山路を歩くことになる。呼吸をととのえながら、あせらず急がず、ただひとり自分の足音だけを聞きながら山路をのぼる。天地とわれと、われと天地とたがいにあい対し、さらに自分の命が草木天地の生命のなかにとけこむとき、こういった静寂な山林のひとり歩きにこそ、山歩きのだいご味があるのである。

高等学校のころ、友人にすすめられて座禅会に参加したことがある。初心のわたしに老師は息を数えることを命じた。数息観というものだろう。やってみると百五十か二百ぐらいまでは数えつづけられるが、それからさきは、ともすればほかに気が移って数がわからなくなり、いくら努力しても五六百がせいぜいで、とても千まで数えられなかったことを覚えている。また歩くとき自分の足音を聞けとすすめてくれた先生があった。これも禅の修行のうちのひとつだということだ。努力してやってみても、自分の足音だけに心を集中して、ほかのいっさいの音を無視することは容易でない。歩数を数えることすら、とかくいつのまにか中断してしまう。呼吸とか足音とかいうような身体的なものを媒介にしないで、直接内面の心の状態に注意を向けてみる。できるだけなにも考えないでおこうとする。むりになにかの問題に集中しようとはしないで、ただぼんやりしているように心がける。そういった心的態度で、わたしは山路を歩く。はじめのあいだはありとあらゆる邪念妄想が、あの男がどういった、どうしたとか、あのやり方はしゃくにさわるとか、期限におくれそうな原稿のこととかがつぎからつぎに湧いて出る。しかし、いつのまにかそのゴタゴタした想念は出尽くしてしまい、心のなかのわだかまりのようなものがほぐれて、なんとなく荷物が軽くなったような気分になってくる。静寂な山林のひとり歩きのさいに味わう法悦とは、こういうものであろう。このようなときに、悟らざる天地の声、心のうちにささやくなにものか見えざるものの息吹きのごときものを、ひそかに感ずるのである。

内村鑑三は『代表的日本人』のなかで次のようにいっている「我等の主人公が彼の愛する山谷を幾日幾夜しばしば引続き跋渉しつつありし時、『天』の輝ける処より直接ひとつの声が彼に臨んだことのあったことを、否むべきであろうか。『静かなる細き声』はしばしば杉林の静寂のなかにて彼に語り、彼はこの地上に一つの使命をもって遣されたることを、……彼に告げなかったであろうか」（岩波文庫『代表的日本人』二五ページ）。わたしはいくたびこの個所を思い出しながら歩いたことであ

せられる。宗教改革者、マルティン・ルターは、このような意味のことを言って、三にして一つである神のおどろくばかりのみわざの前に手をあげたのである。

人間のもとめている神はどんな神なのか。それは、もちろん人間の注文通りに動く神にきまっている。人間にとっていちばん都合のよい神だからである。どの時代にも、このような神がもとめられるから、次ぎ次ぎに新顔の神があとをたたない。神のニューフェース。神信心にも流行があるという変態現象が、変態と考えられないほど一般化しているのが、現状なのである。しかし、イザヤによれば、このような神のニューフェースは、中味の空なものにすぎない。不思議の国のアリスは、空中にニヤッと笑ったねこの笑顔を見たということだが、ねこそのものはいなかった。中味のない神は、神のシンキ楼である。

神が、人となってわれわれのまっただ中に住むというベツレヘムの馬小屋からのおとずれは、神のシンキ楼の空手形ではない。正真正銘に人となった神、受肉した神の到来のおとずれである。これは、自然界の法則を越え、人間の知恵をむなしくさせ、悪魔の計略を破壊するものである。

ティリッヒの説教の一つのなかに、ナチの毒ガス部屋からのがれて墓のなかに隠れていたユダヤ人の話を紹介している。墓場で若い婦人がお産をした。それは男の子だった。産婆役をしたのが八〇歳の墓掘りの老人。この老人、男の子の出産を見て感動し、大いなる神が、ついに救い主を与えてくださったものと考えて喜んだ。ところが、三日ののち、母親の胸にいだかれたそのおさなごが、母乳が出ないので、母親のまなこからにじみ出る涙を吸っているのを見たというのである。

生き地獄というものがあるとすれば、それは、まさに、ここに描かれた光景である。人生の底辺である。人間苦は、まさにここで底をついているのである。死におっかけられている人の姿ほど悲劇的なものはない。ここでは、ニューフェースの神は、力をあらわしえないのである。

「わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救主なる神をたたえます。
この卑しい女をさえ、心にかけてくださいました」。

このマリヤの歌は、墓場の歌とくらべてなんと大きなちがいがあることであろう。もちろん、マリヤとユダヤの女とに共通した点はある。ユダヤ人であること、男の子を産んだこと、人間生活の底辺にあったことなどがそれである。ルターのクリスマスの説教を見ると、マリヤという名の説明をしている個所がある。「この名のヘブル語の形は、ミリアムであって、『にがい没薬』という意味だ。ユダヤ人には、誕生の状況にちなんで子供を命名する慢習があること以外、なぜこの名が与えられたのか、わたしは、知らない。キリストがおいでになったあの当時は、今日のわれわれのようにユダヤ人にとっておはなしにならない苦汁のとき、貧困のドン底の時代であった。だから、みながみな、はげしく泣くのも、もっともだった」。

神は、われわれが、神から最も遠いと考えているとき、最も

伝道説教

人間苦のなかで出会う神

岸　千年

「わたしの魂は主をあがめ、
わたしの霊は救主なる神をたたえます。
この卑しい女をさえ、心にかけてくだ
さいました。」

―ルカ一・四六～四八―

聖書は、父なる神と御子なる神と聖霊なる神が、三にして一つなる神であると告げる。この神は、生ける神であり、人間の救い、ひいては、全宇宙の救いに全責任をおもちになる神である。具体的には、神のみわざは、キリストにおける活動となってあらわれるが、それは、人間が考えたことも、計画したことも、見たこともないような驚異のみわざである。

神のみわざは、人間の予想やはかりごとのなかで、おこなわれるのでなくて、人間のあやまちや、考えちがいのなかで実現

だ。神のみことばを、きくことのできたマリヤの耳。マリヤの全生涯は、一変した。見る目も変わった。考え方も変わった。大きな革命が、身中におこった。それが、ことばとなってうたい出されたのである。

マリヤの讃歌は、神による一大革命の進軍マーチである。宿命は吹きとばされている。神をおそれない権力者の権力行使は長くつづかない。神のない生活を享楽するものに永遠の幸福は約束されていない。主権は、神にある。神のみこころにそわない者は、投げうたれる。

これに反して、低い者、貧しい者、どれいの境涯にある者。すなわち、人生の墓場、人生のはきだめにある者でも、神をおそれ、神に信頼する者は、高くせられ、富める者とせられ王とせられる。行動の神は、理論だおれにおわることはない。キリストにおける神の実行力は、人間の最大の実行力でも、とうていこれにおよぶものではない。

イエスの降誕は、神のかえりみ、また、人の世訪問である。このおとずれは、下僕の姿をもってのおとずれであったが、いやしい姿のなかに、貴いものが、弱さのうちに、強さが、愚かさのうちに神の知恵が、隠されているのである。

ギリシャの昔、マイダスという王さまがあった。彼は、黄金狂であって、自分の手のふれるものが、みな黄金になるようにと神に祈った。なるほど、そのねがいはきかれて、彼の手のふれるものすべてが、黄金にかえられた。黄金を手にすることだけを知っている王だった。しかし、ある日、最愛の娘が、彼の部屋にはいってきたとき悲劇がおこった。王の手が娘にふれた瞬間、娘は、黄金に変わってしまったからである。人間の欲望とその結末のシンボルである。

イエスの降誕は、人の世に神の手の接触をあらわす、いわば神のゴールドゥン・タッチである。マイダス王は、最愛の娘、生ける人間を、死にいたらせたが、イエスは、死せる者を生ける者とするのである。これが、神のゴールドゥン・タッチの特徴である。神の手に接触して、生かされる人々は、人間革命の進軍マーチに合わせて行進する。

シメオンに注目しよう。彼は、救い主を待望した人物であった。聖霊にみちびかれて日々をおくっていたが、イエスが母の胸にいだかれて、エルサレムの宮にはいってきたとき、一尺にも足らぬ幼児のうちに神の独子（ひとりご）の姿を見たのであった。

「主よ、今こそ、あなたはみことばのとおりに
このしもべを安らかに去らせてくださいます。
わたしの目が今あなたの救いを見たのですから」。

シメオンにまた、進軍に加わったのである。

激変する社会に住む兄弟姉妹よ、いまこそイエスの降誕、神のおとずれの意味を知らねばならない時である。マリヤの耳をもとう。シメオンの目を与えられよう。そして神の大進軍に加わろう。

（日本ルーテル神学校校長）

近くにいまし、われわれが神にわすれられたと思うとき、神に最も記憶せられている。これは、ルター的な言い方であるが、霊的にも物質的にも底をついたとき、つまり、人間の力が、つきはてたとき、神の活動があらわれるのである。時がみちたのである。神のおとずれの時が、来たのである。

「マリヤよ、あなたは神から恵みをいただいているのです。見よ、あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい」。神のおとずれは、このような形であらわれたのである。

「どうして、そんなことがありえましょうか。わたしにはまだ夫がありませんのに」とは、自然界の法則に支配されている人のもっともな抗議である。

「聖霊があなたに臨み、いと高き者の力が、あなたをおおうでしょう。それゆえに、生まれ出る子は聖なるものであり神の子と、となえられるでしょう。……神には、なんでもできないことはありません」。み使の説得は、神の説得である。

「わたしは主のはしためです。おことばどおりこの身に成りますように」。マリヤは、みことばによって自然界の法則をも乗り越える力を信じたのであった。

卑しい身分の自覚。神は、低いものを高くしたもう。マリヤ「にがき没薬」は、聖霊をうけることによって、神の救いのみわざの現実に、まなこをひらかれた。そして、彼女は、その心にもっていた貧富、高低、権力者、隷属者の標準がくずれさるのを知った。

「主はみ腕をもって力をふるい、
心の思いのおごり高ぶる者を追い散らし、
権力ある者を王座から引きおろし、
卑しい者を引き上げ、
飢えている者を良いもので飽かせ、
富んでいる者を空腹のまま帰らせなさいます。
主はあわれみをお忘れにならず、
その僕イスラエルを助けてくださいました」。

自然界の法則だけが、人生を支配していると思っていたマリヤは、その法則が、破られるばかりでなく、それとともに、マリヤ自身さえも、破られて、全く新しい世界に移されるのを悟ったにちがいない。

それは、自然のワクにとじこめられないものであった。律法を乗り越える神の限りもない愛であった。マリヤの目を開かせ「おことばどおりこの身に成りますように」と信仰の決断に、彼女をみちびいたものこそ、この愛にほかならなかったのである。

律法には、対話がない。

愛には対話がある。説得がある。納得がある。

低い身分、貧困、ふみにじられた境涯、人間的苦汁。これは自然のなりゆきと考えていた、マリヤは、この秩序をひっくりかえしてしまうおとずれを聞かされた。彼女は、それを信じるにいたって、別人になってしまった。神に創造せられた女といわれるであろう。この奇跡は、マリヤの耳を通しておこったの

キリストを知る者は祝う者たちだということは、いつも正しいのである。

どうか、今も、あなたの喜びから、わたしの魂の中に、一つの光を投げかけてください。他のものは、灰色の日々について語ります。どうか、そのような日をわたしの祝祭の日としてください。あなたは活きて、父の恵みと力によって支配したもうのですから。アーメン。

安息日

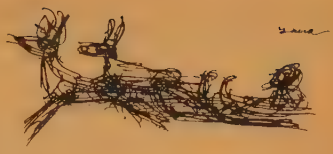
安息日に善をなすはよし。　（マタイ伝一二・一二）

イエスの時代のパレスティナでは、安息日というものは、すばらしい日であった。どの村、どの家にも、安息が訪れた。旅人の群も、車の列も、国の中を走りすぎることはなく、旅籠の客がひどい扱いを受けることもなく、商店に働く者たちがひそかにあるいは公然と勤労を強いられることもなかった。すべてのうえに、安息が支配した。しかし、この安息は、単に人間の共同生活にとって有益な価値を持っているというだけではなかった。それは、すべての者が聞きもらすことのできない神の国の力強い証しであった。人間は神のものであるから、その時間の一部を割いて聖なる時と定めたのである。この聖日がすべての人々に告げたことは、汝は聖なる民の一員だということであった。そして、彼らは、安息日を守ることによって、主を自分の神として告白したのである。

しかし、それにもかかわらず、イエスは、ご自身を、安息日の命令よりも上に置きたもうた。それは、安息日よりもさらに偉大なものがあり、さらに聖なるものがあるからである。そして、安息日がそのようなより以上のもの、より聖なるもののさまたげとなる場合、安息日は、イエスが忍びえたまわない桎梏となる。しかし、そのような「より以上のもの」とはなんであろうか。それに対するイエスの答えは、「善をなす」ことである。なにごとかをなすことは安息より以上のことであり、善をなすことは、自分の身を守ることよりも以上のことであり、人間に対して善をなすことは安逸な神奉仕よりも以上のことである。ユダヤ人が安息日に愛のわざを行なってはならないとしたために、イエスは、それを犯したもうたのである。そのように力強い仕方で、彼は、愛の不可欠であることと聖であることを証ししたもうたのである。

そのような安息日を犯したもうたために、イエスにとっては、きわめて困難な事態が引続き起こった。すなわち、敵のはげしい憎しみや残酷な攻撃や十字架が、襲って来た。しかし、イエスはたじろぎたまわなかった。神の名において愛を禁じ、聖くあるために善をしないということ――そのようなことを、彼は、神奉仕とよばず、神の聖化、神崇敬とはよびたまわなかった。むしろ、それを、神に対しての抗争とよびたもうた。

主よ。善をなすことは、あなたのみこころです。あなたがご自身を十字架につけたまいましたのは、善をなすためでした。そして、そのことによって、あなたは、十字架を大いなる善のわざとし、それゆえに、わたしどもは、あなたに感謝いたします。決して休息することのない愛。いつも進んで助ける愛。神の恵みと同様に完全であるゆえに、自分自身のものを求めぬ愛。そのような愛を、あなたは示したまいました。どうか、わたしどもすべての者を、あなたの道に導いてください。アーメン。



〈思いと祈り〉

シュラッター

井上良雄訳

新郎とともに

イエス言いたもう。「新郎の友だち、新郎とともにおる間は、悲しむことを得んや。」（マタイ伝九・一五）

新郎は、自分といっしょに祝ってくれる仲間を必要とする。そのために、イエスは、その弟子たちを定めたもうた。イエスにとっては、ご自身の働きは一つの祝祭であり、結婚の日であった。いまやシオンの娘のもとにその王が来たのであり、苦しめられ、散らされた羊の群のもとに羊飼が来たのであり、神を失った民のもとに神の子が来て、この神の子において民はついに父なる神を見るのである。しかし、彼はひとりで祝うことはできない。彼は与える者として来たったのであるから、受ける者を必要とする。彼は祝福を与えることばをもって来たったのであるから、それを聞く者たちを必要とする。彼は罪の赦しをもって来たったのであるから、それを受ける罪人を求めたもう。彼は神の国に仕えるために来たったのであるから、彼に支配されてその群となる者たちを必要とする。そして、彼がそのような者たちを必要としたもうゆえに、父なる神は、そのような者たちを彼のもとにともないたもうのである。それゆえに、この新郎の友だちは存在し、その結婚式の客たちは存在するのである。

彼らのなすべきことは、なんだろうか。それは、彼とともに祝い新郎の祝祭が初まったことを喜び、与えられた友情の命ずるままに彼と同じ食卓につくことである。それが彼らの義務である。それゆえ、悲しみの種が彼らにないではないけれども、彼らは悲しんでいることができないのである。この世は暗く、イスラエルには多くの悪が起こり、弟子たちもこの世が生み出すものに関与し、この世の民の苦しみが示すものに関与するけれども、しかも彼らは、悲しむ者たちがするように断食することはできない。もしそのようなことをするならば、それは、彼らがただ自分自身のことだけを考え、自分を悲しませるもののことだけを考え、自分が必要とするもののことだけを考えていることになるであろう。しかし、彼らの時は新郎の時である。新郎が祝っているのであるから、彼らも彼とともに祝うのである。

これこそ、いつの時代にも変わらないキリスト者の原理である。人間の間におけるイエスのみわざは、喜びに充ちた奉仕であり、祝福のみわざである。それは、イエスご自身に栄光を与え、彼において神に栄光を与える。彼はわれわれにおいてご自身に栄光を帰し、われわれにおいて神の恵みを大いならしめたもう。このことが、キリスト者の生活を祝祭とし、キリスト者に沈黙することのない讃美の歌を与える。われわれが、自分自身や、自分の状態に目を注ぐとき、われわれには、暗い悲しみをいだく十分な理由がある。そこには、涙に価する多くのことが存在している。しかし、イエスを知っている者は、自分にだけ目を注いで自分だけを見ていることはできない。それゆえに、われわれがどのように深く身をかがめていても

た。

また女性の生活にも大きな変化が見られます。女性の着るものですね。わたしが日本を去ったころ、大学生はほとんど洋服を着ていましたが、一般の人たち、とくに中年以上の人たちは、キモノを着ていました。しかし、今では、よほど注意していないと、キモノを着ている人は目にとまりませんね。ただ、女性は、今でもまだ正装する場合には、やはりキモノを着るようですね。ずっとそうし続けてほしいと思います。

また若い人たちの生活にもいちじるしい変化があります。つまり、若い人たちの行動の自由なこと、若い男女の交際の自由なことです。この間、夜、息子と銀座へ出て見たのですが、若い男女が手をとりあい、腕をかかえあって歩いている。ほんとうに驚きました。この点では、アメリカ人はだしと言ってもいいでしょう。外側から見て気がついた大きな違いは、こんなところです。

しかし、これよりももっと深いところで違ってきている。それは、現在この国全体にいきわたっている精神―活気でしょう。以前にはなかった自由な雰囲気があるようです。行き過ぎの点もあるでしょう。しかし、わたしには、概してたいへんすばらしい発展だと思われます。

学校教育―キリスト教学校の合同を

ハフ　日本で見られる解放感は、まだまだひろがっていくようですね。ところで、先生の長年の滞日期間中、最初から一九四一年に帰国なさるまで、ずっとキリスト教教育にご関係がおありでしたね。

ライシャワー　そうです。

ハフ　では、先生のキリスト教教育についてのご関心と、滞日中におこったことなどについてお話いただけませんか。

ライシャワー　わたしが日本にまいりましたのは、明治学院のいわゆる「高等部（専門部）」にできた教授陣の空席をうめるためでした。しかし、日ならずして、わたしは、当時の男子のキリスト教学校のありかたについて、いささか失望しました。当時、東京帝国大学（現在の東京大学）がいちばん高く評価され、その下に慶応とか早稲田とかいう私立

わたしの見た明治・大正・昭和の日本

（語る人）
オーガスト・カール・ライシャワー
（神学博士・元宣教師）
（聞く人）
ハワード・ハフ
（日本聖書神学校教授）

五〇年間に変わったこと

ハフ　先生が日本をご覧になったのは、たしかいちばん最初に来日された一九〇五年から、日本を去られた太平洋戦争前の一九四一年までの三六年間と、今回の一九六一年。明治・大正・昭和と三つの時代にわたりますね。ですから、先生は明治三八年から現在の昭和三六年までの日本をごぞんじというわけです。そこで、まず「過去の日本に対して、現在の日本がどう変化してきたか」について、お話しくださいませんか。

ライシャワー　わたしが一九〇五年（明治三八年）日本へまいりましたとき、わたしの乗っていた船には、アメリカで開かれた（日露戦争後の）平和会議から帰る駐日ロシヤ大使が乗っていました。そして日本に上陸すると、この平和条約に反対する日本人が、ずいぶんいることがわかりました。わたしは、明治学院にいたのですが、しばらくの間、わたしたちを兵隊が守ってくれました。しかし、それは長く続きませんでした。二、三ヵ月ですね。日本の人たちに平和条約の意味がのみこめたからではないでしょうか。

わたしが来日したころは、もちろん東京は、現在の一千万人に比べて、たった二百万人の町で、わたしのいた明治学院から、ちょっと歩くと、山手線の中側でさえたんぼがありました。今では、車で一時間以上も行かなければ、たんぼのあるところまで行かれませんね。過去一〇年間におこった大きな変化のなかでも、このことが最も強い印象を与えます。

しかし、最も明らかな変化は、通りという通りが、車の洪水になってしまっているということですね。当時は、こんなではありませんでした。

次に明らかなことは、非常ないきおいで建築が行なわれているということです。大きなビルがたくさん建てられていますね。アメリカでは、この事実が十分に知られていないようです。たしかに、日本が繁栄の途上にあるとはいわれていますが、こんど実際に東京の町を自動車で通り、とてもたくさんりっぱな新しいビルがあるのを見て、びっくりしまし

は、まさにこの進歩発展を証していると思います。ほんとうに力を与えられました。

ハフ　若い女性たちは、活発に自己を表現し、自由に交際をしていますが、これなどは戦前の日本では決してできなかったことです。先生のお考えでは、このありさまは、日本が将来民主的な自由を求める国として、さらに発展をとげるための政治的・社会的な力になるとお思いですか？

ライシャワー　そうですね。戦後の女性が、国民生活に、より積極的な役割を果たしていくであろうということについては、疑問はありませんね。むろん、家庭においては、日本の婦人は、前から一般に考えられているより権限をもっていたんですよ。事実家庭では、年長の婦人は十分意見を言っていました。しかし、外に出ると、たとえば往来では、奥さんはいつもご主人のうしろから歩かなくてはならなかった。その意味で、国民生活にほんとうにたずさわっているとは思われませんでした。しかし、その面については、現代の日本には、非常に大きな変化があり、女性が今まで見られなかったような役割を演ずるようになると思いますね。

日本の宗教への無知

ハフ　次に先生のご関心の対象であると思われるもう一つの分野、キリスト教以外の諸宗教ですね。先生が個人的にごぞんじの一九〇〇年代の初期から一九六一年までを通じまして、日本の、キリスト教以外の宗教におこった変化をどう思われますか？

ライシャワー　最初に来日して、二、三年滞在し、いろいろ事情に通ずるようになりますと、宣教師の、また日本のキリスト者のキリスト教以外の宗教に対する態度に驚かされました。みんな、これらの宗教に対して、それが真にどんなものであるか、ぜんぜん関心を寄せず、また理解していないようなのです。そこで、わたしは、すぐに日本の宗教についての研究にとりかかりました。というのは、伝道しようとする国の人々の宗教的、文化的背景を理解しないで、キリスト教の救いを語ることは、むずかしいと感じたからです。実際、クリスチャンが使うことばのなかには、もし日本に前からある宗教を知っていたら、そうは訳さなかっただろうと思われるものがあります。たとえば、「神」ということば自体をとってみましても、ふつうでないもの、すぐれているものはなんでも「神」とよぶ、ひどい多神教の神道からとられたこのことばが、キリスト教の一神教の概念であるGODを表わすのには、適当ではなかったと思います。カトリックのほうが、たぶんこのことばの使い方では賢明だったかもしれません。（註「天主」という）外国人であるわたしが、この国の神学研究上、キリスト教以外の宗教を研究しなくてはならぬと言い出さなくてはならなかったという事実から、いかにこの問題に対する関心が薄かったかということがおわかりになるでしょう。

宗教の分裂と合同

ハフ　これらキリスト教以外の宗教は、今非常な勢いで活動しています。そこで、日本の現在の宗教事情におこった変化から、先生がおうけになる印象はどんなものですか？

ライシャワー　政府が宗教を管理し、制限をした結果、いろいろの教派に分かれるようになったらしい。キリスト教においては、数限りない新教派が生まれてきたことによっても、このことは明らかですね。アメリカでは聞いたこともない教派があります。わたしが日本を去ったときは、たった三十ぐらいしかなかった教派が――それでも、絶対に多すぎると思っておりましたが――今では百以上ですからね。同じことが神道、そしてまた仏教にさえおこったようです。キリスト教以外の宗教に最近見られる再分化、発展の数はまったく信じられないほどです。これがほんとうに宗教の生命力をあらわしているかどうかはわかりません。おそらく、ほかの理由があるんでしょう。しかし、とくにキリスト教のなかに、そんなに多くの派があるということに

大学があり、かなり高いレベルをもち、さらにその下に、男子のキリスト教学校があったわけです。キリスト教学校は、主として中学校、高校で、高等部、いわゆる専門部がついていましたが、それだけのものでしかなく、本来の単科大学また総合大学としての規模をもっていませんでした。そこで一九〇九年から一〇年にかけて、わたしと二、三の若い宣教師は、京浜地区の男子大学、たとえば青山学院、明治学院、立教、横浜の関東学院などに対し、合同するよう働きかけました。この問題は、あの一九一〇年のエジンバラの会議でくわしく討議されました。この会議は、ごぞんじのとおり、今では世界教会運動―世界のさまざまのプロテスタント各派ができるかぎり協力しあうことを目標にしている―の端緒とみなされています。さて、この運動は、わたしたちの目的にとって、きわめて好都合な空気をつくってくれ、数年間に、非常に進展し、ついにアメリカのミッション・ボードさえが、できれば現存のキリスト教学校を合同させたらいいのではないかと思うようになったのです。

ところが、そのとき第一次世界大戦が勃発しました。しかし、わたしたちは合同の教育機関を設立する計画をあきらめませんでした。多くの人たちは平和になるまで、この運動を延期したほうがいいと考えたのです。しかし、これは大きなまちがいでした。というのは、日本はアメリカの敵国ではなく同盟国の一つだった。だから、やはり計画は進めるべきでした。この計画を進めなかったのがまちがいだったということは、女子のための総合大学を設立することに関心をもっていた女性が、その運動を続けていったという事実からもうかがえます。わたしも、その運動に一枚加わり、一九一八年の春には、The Tokyo Woomn's Christian College（東京女子大学）を、実際に設立したのです。この学校は、ほとんどその発足当時から、めざましい発展をとげ、設立後まもなく、程度の高い女子高等教育の代表的な学校（大学程度の）として認められるようになりました。しかし、男子側の運動は第一次大戦後になっても再燃しませんでした。事実、各学校は、前よりいっそうただ自分の学校の発展のみを考えるにいたり、いっしょにやる努力は、ほとんどされませんでした。したがって、この運動が再び動き出したのは、第二次世界大戦後のことです。東京に国際キリスト教大学が生まれるにいたったのが、ある意味で、この努力が実を結んだものの最初の現われであるといってよいと思います。

女性の地位の向上

ハフ　日本では、終戦後、二つのものが強くなったといわれています。一つは靴下（ストッキング）で、もう一つは女性です。女性が新たな地位と尊厳とを与えられるよう先生が努力なさったことが、この戦後になって実を結んだと言っていいかと思いますが……。

ライシャワー　ええ、いま申しあげたように、わたしは女性の高等教育に関心をもつようになり、第一次世界大戦の終る前ごろから、女性の地位を向上するためには、男性の態度から改めていかなければならない、と強く思っておりました。口には出しませんでしたが、わたしの心の奥では、男性の女性に対する態度を改めさせるために、次の世代の母親を教育しなければならないと考えていました。そうすれば、ほんとうの意味で変わるだろうと思いました。それが事実になったのです。

思うに、大きな変化の一つに、戦後の日本における女性の地位の向上がある。息子が昨年日本へ来て、アメリカにもどったとき、わたしが「戦後の日本でおこった最も顕著な変化は、なんだと思うね？」ときますと、「むろんそれだけじゃないが、非常に変わったもののひとつに、戦後の日本女性の地位がありますね」と答えました。わたしも、今回東京女子大学へ行き、その驚くべき発展を目のあたりに見て、とてもうれしく感じました。講堂をいっぱいにうずめた千五百人の女生徒

ら、できるだけ協力しあうことですね。しかし、国家が、宗教のあるべき姿を指令したりしてはいけないんです。

ハフ　また逆に、宗教が国家に指令してもいけないんですね。

ライシャワー　一八八〇年代に、信教の自由を許し、国家神道を真の宗教ではないと解釈し、国家神道と神社神道とを分けようとした。そのときでも、日本政府は国家神道の最も重要な要素を天孫(天照大神の子孫)である天皇に対する忠義にあると公言しています。これは当然いつも問題をおこす原因になりました。国家の利益に反する場合にも、宗教的な内的確信に忠実でありうるかどうかという問題です。

ハフ　日本の宗教が国家政策の一つの武器として、長い間考えられてきたということですが……。

ライシャワー　ご承知のように、日本は幾度となく、宗教を国家の道具にしましたからね。たとえば、日本と中国が接触しはじめたときから、宗教は、日本にない高い文化、教育といったものを輸入する手段となっています。当初日本に来た仏教徒たちは、この地に高い中国文化をもたらしました。このため仏教は、教義の本質が理解されるずっと前に、多くの人に受け入れられていたのです。

日本が、西欧圏と接触しはじめたときも、やはりそうでした。明治初期、キリスト教は、西欧文化を輸入する道具であるがゆえに非常に流行したのです。しかしながら、一八九〇年になって、西欧の影響力が強すぎると思ったとき、こんどは、その影響力をおさえようとし、それと同じ理由で、キリスト教を敵視したのです。これによって、明治時代の真の関心がなんであったかがわかります。

ハフ　日本にいるアメリカ人は、「キリスト教は、アメリカの国家政策の道具ではない」と考えています。たとえば、先生のご子息は、駐日アメリカ大使になられ、クリスチャンとして、力の限りその任務の遂行にあたっておられます。しかし、ご自分のキリスト教の信仰を、アメリカの政策の一つの局面だと考えてはおられないと思いますが……。

ライシャワー　そうですね。しかし、わたしの息子は、アメリカのクリスチャンたちが、日本のために働くことを喜んでいます。彼は教育面でのキリスト教運動のすべてに熱意を表しています。彼は、クリスチャンとして育てられましたし、現在は、駐日大使として任務に全力を尽くすことに強い責任感をもっています。しかし、することが多すぎ期待されすぎてもいるようです。

★クリスマス・プレゼントに★

☆夜光の十字架	8×4センチ　120円	〒10円
☆木の十字架	7×14センチ　130円	〒10円
☆十字架ネックレス	(金メッキ純銀台)　特価800円	〒10円
☆〃〃	(純銀製)　〃 450円	〒10円
☆十字架ネクタイどめ	150円	〒10円
☆十字架バッジ	50円・100円	〒10円
☆クリスマス・カード	豊富取揃	

図書出版・取次販売・キリスト教洋書
千代田区富士見町1の16
東京ルーテル・センター
コンコーディア社
電(331)5266
振替東京15978

は、いささかがっかりさせられます。ですから、いわゆる「教団」として、おもな教派が合同すると聞いたときは、非常に大きな喜びを感じました。たしかに、政府の圧迫もあったことは認めますが、たとえそうであったにせよ、わたしが願っていた方向に一歩前進したことになります。

ハフ　新興宗教で、おもしろいのは、日本人はたいてい折衷主義的（シンクレイスティック）であるのに、この新興宗教の多くが排他的だということです。

ライシャワー　ええ、およそ折衷主義とは縁の遠いものですね。

ハフ　そして先生は、どうお感じですか。こういう宗教は非日本的ですか？

ライシャワー　何世紀にもわたって日本の宗教が折衷主義的であったことは事実です。つまり、名まえだけ仏教徒である多くの日本人が、ある面では忠実な神道信者であった。また、その逆も言えると思います。これは、日本の大きな特徴ですね。はっきりとしたけじめがない。これには、よい面もあります。しかし、宗教本来の姿を十分発揮していないと思いましたね。

そこで、こうたくさん分派があると、この折衷主義の精神をもう少しとり入れる必要があるんじゃないでしょうか。つまり、意見の違う人の側にも真実があれば、それを認めるという意味でですがね。とくにキリスト教においてですね。分派を作りだすような、小さなことばかり気にしないで、もっとたいせつなキリスト教の本質に、どうして目を向けないのでしょう？　わかりませんね。もっとそうしていたら、またもっとそうしたら、キリスト教以外の宗教により大きな影響を与えることはまちがいないと思いますね。

ハフ　排他主義の問題に話題をもどしますが、創価学会は非常に排他的な新興宗教の一つです。折衷主義的ではありません。先生はこの態度が日本人らしくないとお感じになりますか？

ライシャワー　いいえ、日本の宗教の中には、とくに日蓮からはじまる宗派には、異質なものに対して敵意をいだく要素がずっと流れています。日蓮は、種々な仏教の宗派が、国を分裂させていることを責めました。そして、重大な本質において一つとなることを念願したのですが、不幸にも、日蓮は自分自身、仏教本来の姿を知らず、彼の教えは、一致ではなく、分裂をもたらす結果となったんです。

国家が宗教を利用する伝統

ハフ　もう一つ、しょっちゅうでてくる問題に国家と宗教の問題があります。先生が日本においでのころ、国家神道は、宗教とはよばれていなかったようですが、実際には、宗教的な拘束力をもっていた現在も、なお日本では、宗教と国家との関係がどうあるべきかについて、混乱しています。新憲法には両者は分離されるべきであるとありますが、人さまざまに解釈されていますが……。

ライシャワー　何世紀にもわたって、日本政府は常に宗教を国家の道具とみなしてきました。すなわち宗教を、独自な至高の理念をもつものとしてでなく、国家がその目的のために利用できるものとして考えてきたのです。これは何世紀にもわたる特徴です。比較的自由があった時代、また日本の諸宗教が衰微した時代においても、政府は、つねに国家の要望に寄与しない宗教は、日本人の生活の中に存在意義がないと考えてきたのです。

その意味で、明治憲法の中の、信教の自由に関する条文は興味があります。「日本臣民は、安寧と秩序を害さず、臣民としての忠節にもとらざるかぎり、信教の自由を享受する」と、まあ、こういうわけです。ある意味ではわかりますよ。西欧でも同じことを言いますからね。宗教が、市民としての義務に、いちじるしく干渉をするということは、どこかまちがいだとね。しかし、この解釈の仕方は、ずいぶん違います。宗教が何を意味し、どういう高い理念をもっているかを正しく理解しているかどうか、同様に国家の利益を心がけているかどうかによって違います。宗教も国家もともに、その究極の目的を認めあいなが

れも食卓を中心とした礼拝にあります。初代のキリスト教徒も、家の礼拝を重んじました。現代のヨーロッパで「家の教会」運動が盛んになっているというのも、このような伝統の正しい再確認にもとづいていると考えられます。

そこで、家庭のクリスマスをどう守るかということになりますが、まず全体の考え方とプランを立ててみましょう。主としてクリスマス・イヴ礼拝に重点をおいて、わたしの考えをのべてみます。

礼拝について考えるべき要素は、それをつかさどる人と、そこで用いる資料、そして具体的なプログラムです。

第一に礼拝をつかさどる人ですが、いうまでもなく最ものぞましいのは家長（父親）です。日本では戦後、封建的な家父長制が排撃されて、戦前の父親の座はいちじるしく変わりました。しかし、どうかすると家長の持つ責任までがどこかにいってしまって、秩序のない家庭になってしまった例もたくさんあります。封建的な権威主義ではなく、どこまでも民主的家庭でありながら、精神的な中心として家長の責任を果たすことは、容易ではありません。家庭礼拝は、このことを成りたたせるただ一つのかぎともいえましょう。家長が、絶対者になるのではなく、妻や子と同等の立場で、神の権威に従いつつ、家庭をととのえるならば、真の祝福が与えられるでしょう。

第二の資料というのは、具体的には聖書日課や、祈禱や、歌などです。これはきわめてたいせつでありながら、比較的考えつくされていません。教会の公同の礼拝用のさんびかがそのまますぐに家庭の礼拝で用いられるかどうか。あるいは、家庭礼拝に適切な祈禱の手びきや、聖書の日課が用意されているかどうか、という点を考えると、まだまだ不十分です。また、楽器や、礼拝の中心におくものなども考えてよいことでしょう。ユダヤ教徒の家庭で、すぎこしの食事に特別な食事をつくり、父親が小さい帽子をかぶり、祈禱のためのストールをつけて、ハガダーという一種のテキスト・ブックを家族に持たせて、すぎこしの物語を読みきかせ、定められた祈禱をする、というようなことは、簡素な中にも特別な祝日らしい厳粛さをもった、よい礼拝の例として参考になります。

最後に、こうしたプランを実際の家庭に合わせて十分に立てたあとで、プログラムを作ることが必要になります。一例として、わたしがかつて招かれたある家庭での、短かいクリスマス礼拝のプログラムの骨組みをのべてみます。

クリスマス・イヴの五時ごろから、家族全部と、ちょうど上京していた親戚の中学生がそろいました。食卓にはクリスマスに因んだごちそうが並んでいます。

まず食卓の四隅に立てたローソクに灯がともされます。灯をともすのはおかあさんの役目です。おかあさんは、灯をともしながらいいました。「これはおとうさんのため、これは家族のみんなのため、これは世界中の人々のため、そしておしまいの一本はイエスさまのため」。

ローソクがあかあかとともると、おとうさんが立って、大きな聖書を読みました。旧約聖書のイザヤ書から、九・一―七、六〇・一―三の二ヵ所です。そのつぎは、長男の中学生が新約聖書のルカによる福音書、二・一―二〇を読みました。

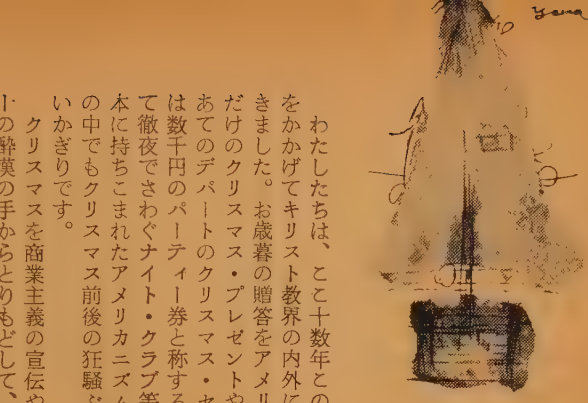
聖書を読みおわると、みんなでさんびかをうたい、おとうさんのおいのりがあって、たのしい食事になりました。

ちょっと変わっていたのは、食後の感謝のお祈りがあったことです。食事がおわり、テーブルがかたづけられると、小さいツリーをかこんで、だんらんのときになりました。テレビもラジオもこの晩は休みにして、子どもたちの歌や、笛の演奏、中学生の甥の詩の朗読やら、おとうさんのクリスマス童話（自作の）などにいつまでも楽しいときがすぎました。

固苦しい形式はありませんが、ふざけた調子ではなく、のびやかな、そして心から楽しい夕であったのです。

みなさんの家庭でも、今年はこういった礼拝を守りたいとお考えになりませんか？

（青山学院大学宗教主任）



クリスマスを家庭に！

新見宏

わたしたちは、ここ十数年このスローガンをかかげてキリスト教界の内外によびかけてきました。お歳暮の贈答をアメリカ風にしただけのクリスマス・プレゼントや、それをめあてのデパートのクリスマス・セール、はては数千円のパーティー券と称するものを売って徹夜でさわぐナイト・クラブ等々。戦後日本に持ちこまれたアメリカニズムのあらわれの中でもクリスマス前後の狂騒ぶりは苦々しいかぎりです。

クリスマスを商業主義の宣伝や、キャバレーの酔漢の手からとりもどして、家庭に、つまり、本来の場に返そう、これがわたしたちの年来の主張です。

ところで、昨年のクリスマス・イヴに、わたしはちょっと奇妙な体験をしました。いちばん小さい子どもに贈るプレゼントを買いそびれたので渋谷のおもちゃ屋に立ちよると、その店のオヤジさんが、おもちゃを包みながらしみじみというのです。

「だんな、今年はお子さんに贈物を買って早目にお帰りになるお客さんがめだって多いですな。いいこってす。」

そこで、わたしはきいてみました。

「なるほど、そうかねえ。だけど、早く帰って家で何をするのかね。」

するとオヤジさんは意外にもこう言ったのです。

「そうさねえ。ホラ、テレビなんかでやるでしょう。あの、ローソクかなんかつけてさ。ありゃあいいもんですねえ。心持ちがすがすがしくなりますよ。あっしあクリスチャンでもなんでもねえんですがね。」

わたしは、つり銭をうけとって店を出ました。そういえば盛り場は思ったより人が出ていないし、大きな包みをかかえて家路に急ぐ人も、心なしか目立つようです。

おもちゃ屋のオヤジさんのいうのは、必ずしもみんなの意見ではないかもしれません。けれども、最近の商品の宣伝などを見ていても、家庭生活の楽しさ、くらしの豊かさをうたったものが多いのは、時代の傾向と考えてもよいのではないでしょうか？　そしてそれは悪いことではないと思います。

ただ問題は、家庭生活の楽しさ、豊かさが生活の合理化・近代化、あるいは物質的豊富さにすりかえられそうな危険が見られることです。クリスマスを家庭に！　というスローガンも、ただそれだけではなしに、家庭の霊的・精神的な形成の機会とするための具体性をもったプランとプログラムを考える段階にきたようです。

従来、教会や、教会学校、キリスト者団体などでは、クリスマス近くなると、いろいろな形でクリスマスの集会が開かれ、同一の人が多い場合には十いくつというクリスマス祝会に出る、などという現象がありました。クリスチャン・ホームといわれるものが少ない現実からいって、こうしたグループの会合や、教会の祝会も無意味だとは思いませんが、教会は、いわゆる会堂に人を集めて祝会をすることだけでなく、家庭の祝会をどうするかという指導に力をそそぐべきだと考えます。

クリスチャン・ホームの少ない現状では、長老の家庭などを利用して、数家庭をまとめて祝会をすることもよいと思います。また、家庭内で奥さんだけがクリスチャンというケースもまだまだ多いことですが、クリスマス・イヴの夕食ぐらいは、ご主人に早く帰宅してもらって、子供と食事をともにしながらクリスマスの話題をくりひろげたいものです。

ユダヤ教のいちばんの強味は、家庭の、そ

みえたお友だちで、おかあさんがだれがだれやらわからないときなど、あるいは教会学校のクラスではじめて来た子供たちの名まえを覚えたいときなど、たいへんよい遊びです。まず、一番が、きょうの出席者は、山田ですと自分の名まえを言います。それから次の人はそれに続いて、「きょうの出席者は、山田さんとぼく鈴木です」と自分の名まえをつけ加えます。三番目の人は、「きょうの出席者は、山田さんと鈴木さんとわたし木村です」と、こんなふうに次々と前の人の名まえを言っては自分の名まえを加えていくわけです。終りのほうの人は覚えるのにたいへんですがつかえたらみんなで応援していきますと、けっきょくみんながみんなを覚えてしまうのとで、とても有効です。三〇人ぐらいまでは十分です。最後におかあさんも全員の名まえをよんで覚えてください。

クリスマスプレゼント　みんなで、サンタクロースにたのむプレゼントを言うわけですが、一番の人が、「ぼくはサンタクロースが来たらプレゼントに「マリ」をたのみます」と言います。次の人は「ぼくはサンタクロースがきたら、プレゼントに「マリと万年筆」をたのみます」と言います。こういうふうに、次々と前の人の言ったものと自分のものとを加えて言うわけです。これも終りのほうの人ほどたいへんだということになります。子供さんが小さいときは、自分のものだけを言えばいいことにします。ただ、前にだれかが言ったものを、また言ってはいけないということにします。

連想　はじめに何か、たとえば「自動車」ときめて、いちばん端の人に小さい声で耳うちして自動車と言います。それをきいた一番の人は、自動車から連想されること、たとえば「走る」というぐあいに、次の人に耳うちします。二番はまた三番に走るんだから「兎」かな、とばかり次に耳が長いなどと伝えるわけです。こうして次々と連想されることが伝えられ、いちばん最後の人の連想を発表してもらいます。自動車がいったいなんに変わってしまうでしょう。そこで、今度はその連想を逆に順々に発表してもらいますと、だれがとんでもない連想をしたかがわかって大笑いになります。

サンタクロースが来ました　こんどは紅白二組に分かれます。大ぜいのときは六、七名ぐらいずつ組になります。さて、各組とも同じにやりますが、まず一番の人が二番に、「サンタクロースが来ました」と告げます。そこで二番の人は「どこから来ました？」ときき返します。そこで一番は「ソリに乗って北の国から来ました」と告げます。それをきいたら二番は三番に向かって、同じように「サンタクロースが来ました」と告げます。三番は「どこから来ました？」ときき返します。そこで二番は、すぐ答えてはいけないので、前と同様、一番にまた同じことばできます。答えは同じ、そこで二番は同じ答を三番に言います。それをきいた三番は四番に、「サンタクロースが……」と告げ、四番が、「どこから……」ときき返し、それがまた一番まで、どこから、どこからときき返し、また同じ答がひとりずつ通って四番にとどくというわけです。それで早く最後の人にサンタクロースが北国からソリにのって来たことを告げた組が勝ちというわけです。

お茶を召上がれ　だれか鬼になった人は目隠しをしてお盆を持ち、中央に立ちます。他の人たちはそれぞれいる場所を変えておきます。鬼はだれかの前に行ってお盆を差出し「お茶をどうぞ」とすすめます。その前にいる人は、そのお盆を持って、「ありがとうございます」とか「けっこうです」とかなんとか返事をします。その声で鬼は相手がだれなのかあてるわけです。そこで相手はまともな声ではすぐ当たってしまいますから、いろいろのこわいろを使って答えるわけです。それでも当たったら、次の鬼にならなければなりません。

（横浜ＹＭＣＡ同盟副総主事）

クリスマス子供のあそび

高橋四郎

このごろは教会学校のクリスマスのほかに子供たちのクリスマスが催されることがしばしばあります。たとえば教会学校のクラスの子供だけを集めてする小さな集まり、家庭にお友だちを招いてする家庭クリスマスなど。そこで、ここではそのどれにでも役立つと思われるものを、家庭クリスマスにちなんでお話することにしましょう。

準備　まず案内ですが、よく知っている同志でも、きれいな招待状を出すことが会をもり立てていく第一歩です。

へやの飾りも親しいお友だちといっしょにすれば楽しく、他の人の手をあまりわずらわさず、しかも自分たちのクリスマスという気持ちになれてよいと思います。

開会　いよいよ皆さんが集まってはじめることにしましょう。それまではジングルベルのような楽しいメロディーのレコードをかけたりして、全体の雰囲気をつくっておきますが、いよいよはじめるときには、「きよしこの夜」のレコードをかけ、同時に電灯を一時消します。レコードの代わりに、みんなでうたってもけっこうです。そして、うたいながら、テーブルの上に立てておいたローソクに、一つずつ灯をつけていきます。へやがだいぶ明るくなってきましたら、みんなでクリスマスのさんびかか、キャロルをうたい、そのテーブルの囲りを回り、歌が終ったら席につくことにします。

そこで教会学校の先生か、そこのお宅のおとうさまでも短かくあいさつをしましょう。そしてみんなでメリークリスマス・トゥーユーをうたってあいさつにかえます。そして、電灯をつけ、みなニコニコお祝いがはじまるわけです。

あそび　お茶かお菓子が出ましたら、そろそろあそびをはじめますが、席をいきなり変えたりせず、そのまま自然にあそびにはいれるようにしたいと思いますので、はじめは円形に坐ったままで遊べるものから、だんだん進んで組み分けをしたり代表が出たりする遊びをします。

次に紹介　ちょっと字が変ですね。その通り、自己紹介でなく。おもしろいことを言いながら、お隣の人を紹介していきます。全体によく知らない人同志のときは、あらかじめ入場のときに、紙片を渡し1、姓名　2、生まれた所　3、好きなもの　4、きらいなもの　5、将来なんになりたい　など五項目を書いておいてもらい、その紙片を歌をうたいながら次々と隣りへ回して、歌の止ったとき、持っていた紙片を、そのまま自分のことのように読み上げていきます。言われる人も立っていてもらいます。紹介も書いてあることだけでなく、いくぶん尾ひれをつけて、おもしろい紹介をしますと、みんな大笑いになります。ただ、注意しなければならないことは、一人があまり長く話さないことです。そうでないとこれだけで時間を取り過ぎてしまいますから。

きょうの出席者は　家庭などではじめて

でも人のこころを打つ音楽となったのでしょう。

「メサイヤ」は、全曲演奏するのに二時間あまりかかります。といっても、ずっと続いているのではなく、独唱・合唱など五三曲にわかれていて、それが、第一部から第三部までの三つの部分にわけてあります。

第一部は、管弦楽の荘重な序曲にはじまりイスラエル民族が待ち望んでいたメシヤはやがて生まれるであろうという予言が独唱やコーラスでうたわれます。ここは、もちろん旧約聖書から歌詞がとられています。

やがて、ベツレヘムにみどり子イエスがお生まれになるところは、新約聖書の「ルカによる福音書」から歌詞をとり、印象的な美しい音楽をおりなしています。

第二部は、このようにしてお生まれになったキリストが、決して世の王侯貴族のような豪華な宮殿に住まず、大衆の中に生活し、その苦しみを知り、ついにはその罪を負う神の小羊として十字架についたことが、うたわれていきます。

ヘンデルが「メサイヤ」を作曲していたころ、ある日ボーイが朝のココアを持ってゆくと、徹夜の仕事をしていたヘンデルが、涙を流しながら五線紙の上にペンを走らせていました。かれはそのとき、「彼（キリスト）はあなどられて人に捨てられ、悲しみの人で、病を知っていた」という、あのイザヤ書五十三章を歌詞として、この第二部の美しくも悲しいアルト独唱曲を書いていたのでした。

そして第二部は、キリストの救いの完成をたたえる力強い「ハレルヤ・コーラス」で結ばれています。「メサイヤ」の他の曲を知らない人でも、「ハレルヤ・コーラス」を知らない人はないでしょう。それほど、この合唱曲は、簡潔な中にも力強さと讃美にあふれた名曲なのです。

さて、第三部は、キリストを信ずるものの永遠の生命をうたい、力強い「アーメン・コーラス」で全曲のしめくくりとしています。

「メサイヤ」は、一七四一年にわずか二四日間で作曲されました。そして、初演は翌一七四二年四月一二日、アイルランドのダブリンで、孤児院のための慈善音楽会としておこなわれて大成功をおさめ、さらにその翌年には、ロンドンでも演奏されましたが、その時にはイギリス国王ジョージ二世もおいでになり、「ハレルヤ・コーラス」のところでは感激のあまり立ち上がって聞かれたということから、今日でも英米では「ハレルヤ・コーラス」は聴衆が起立して聞く習慣があります。

また、その当時、ある貴族がヘンデルに向かって、「ヘンデルさん、きょうの音楽はたいへんおもしろかった」と、お世辞のつもりで言ったところ、ヘンデルは憤然として、「それは残念だった。わたしは、人をおもしろがらせるためにこの音楽を作ったのではなく、人の心をたかめるために作曲したつもりだが……」と言ったというのは、有名なエピソードです。

ヘンデルは、生きている間、この「メサイア」の演奏から得た収益を、すべて社会事業のため寄付したと伝えられております。かれは、キリストをうたった不朽の名曲を残したばかりでなく、自分自身も、キリストの足跡にしたがって、「いと小さきものの一人」に食べものを与えようと願ったのではなかったでしょうか。

今日でも、「メサイヤ」の演奏会が、しばしば慈善音楽会として催されるのは、ヘンデルのこの気持ちをうけているのです。そしてまた、元来レント（四旬節。復活日の前四〇日間、主の受難をしのんで快楽をしりぞけ、克己の生活をする時期）の間に、娯楽的なオペラにかわって上演されたオラトリオであった「メサイヤ」が、クリスマスの時期にも喜んで演奏されるようになったのは、このこともひとつの理由ではなかったでしょうか。

（基督教視聴覚センター主事）

ヘンデル「救世主（メサイヤ）」物語

原　恵

ことしも、クリスマスが近づいて、〝メサイヤ〟全曲演奏〟のポスターが目につくようになりました。最近は、東京はじめ各地で、キリスト教関係の合唱団をはじめ、一般の合唱団まで、年中行事のように、ヘンデル作曲の「メサイヤ」を演奏曲目にとりあげます。

メサイヤというのは、日本の聖書ではメシヤと読んでいますが、ご承知のように救世主（キリスト）を意味するヘブル語で、それを英語よみにしたものです。

この事実が示すように、「メサイヤ」という音楽は、いまから二〇〇年あまり前、イギリスで作曲されました。しかし、作曲者は英国人でなく、ドイツ生まれの音楽家ヘンデルなのです。このヘンデルは、大作曲家バッハと同じ年、つまり一六八五年に、ドイツのハルレという町で生まれましたが、バッハが一生ドイツ国内に止まって、教会音楽の作曲に生涯をかけたのとちょうど正反対に、ヘンデルは若い時からイタリヤに留学し、そのころ流行していたイタリヤふうオペラの作曲によって、社交界の花形となりました。やがてヘンデルはイギリスの都ロンドンに移り、英国国王のための作曲もしたり、ここでもオペラの作曲家として、名声をあげ、やがては英国に帰化したのでした。

ところが、当時のオペラの作曲家は、自作のオペラの興行にも責任をもつのが常でしたから、決して楽な仕事ではなかったのです。そのうえ、当時のロンドンには、ボノンチーニという、イタリヤ人のオペラ作曲家がいてヘンデルはこの人のオペラ一座とはげしくせり合ったあげく、とうとう破産し、自分も病気で倒れて、再起不能かと思われたのです。

ところが、この苦境から奇蹟的に立ち上がったヘンデルは、こんどはオラトリオの作曲をはじめました。オラトリオというのは、むかし教会の祈禱室（オラトリオ）で演奏された、聖書（おもに旧約聖書）から題材をとった、しぐさのないオペラのようなもので、当時は、すでに教会からはなれて、音楽会場で演奏される音楽上の一形式になっていたのです。

ヘンデルは、オペラでは失敗しましたが、そのころの英国人の間で、愛国的気運が高まっているのに目をつけ、旧約聖書に出てくるイスラエル民族の英雄たちの物語に取材したオラトリオをつぎつぎに発表して、大好評を博することができました。

ところが、そのヘンデルのオラトリオの中でも、「メサイヤ」は少しちがっています。これは、そうした英雄の物語ではなく、メシヤ、つまり救世主キリストについてうたっているのです。

この「メサイヤ」の歌詞は、ヘンデルの友人のジェネンズが編さんしたものですが、これは全部、聖書のことばをつぎ合わせて作ったものです。いいかえれば、「メサイヤ」は創作台本によらないで、聖書の中からキリストに関する記事の要点だけを集めて、それに音楽をつけたもの、ということができるでしょう。ですから、これはキリスト教のエッセンスだともいえるわけで、このことが、ヘンデルのりっぱな作曲とたすけ合って、いつま

柔和なるたましいにキリストを迎うる者
キリスト　かえりてそが戸口に入るなり

こころきよくたのしめる子等の
めでられしみどりごイエスに祈るところ
こころさかれし人の
やさしき母の子イエスに叫び求むるところ
愛の立ちて見守りつづくるところ
信仰のとびらひろくひらかれたるところ
そこにては　夜はいねず　栄光は輝きいで
クリスマスは　ふたたびめぐりくるなり

ああ　ベツレヘムのきよき御子よ
ねがわくは　われらに来りたまえ
われらが内に来り　罪とがをなげうちたまえ
きょうこの日　われらが内に生れたまえ
われらは聞く　御使いたちの告ぐる
クリスマスの大いなるよきおとずれを
ああ　来りてわれらが心を宿りとなしたまえ
われらが主　イマヌエルよ

永遠のキリスト

W・ラッセル・ボウイ

マリヤが聖子をいだき、
天使たちがそのご降誕を祝って慶びの歌をうたってから、
ベツレヘムは、とおいとおいところとなり、
星霜はふり、おぼろにかすむ町となりました。
しかしそれでも、
愛と信仰とがあって、キリストの住みたもう場所をその中に持っている人の心には、
神の御子キリストはふたたびお生れになり、
そこをベツレヘムとなさるのです。

海のかなた、ガリラヤには、
イエスがそのみあしで踏んでいかれた

ああ 小さき巷
―ベツレヘムよ

フィリップス・ブルックス

ああ 小さき巷ベツレヘムよ
ねむれるか いとしずかなり
そのすがた
汝がふかき夢をも知らぬ
ねむりを下に
星くずは
しずけくも音なくすぎゆきぬ
されど
汝が小暗きみちをてらすは
とこしえのひかり
長年月ののぞみとおそれとの
今宵逢うところ そは汝が巷にてこそあれ

ああ あかつきを告ぐる星よ もろともに
聖らなる生誕を告げ知らせよ
王なる神には 讃めうたをうたい
地に住む人には 平和を語れ
キリスト 天よりの賜物のこりなくあつめ
おとめマリアより生れたまいぬ
人みなねむれる よるの沈黙
御使いたち 世のものならぬ愛を見守りぬ

世のものならぬ賜物のくだされしとき
産上ベツレヘムは しずもりて声なし
かくて 神は人が心に
天なるめぐみを与えたもうをよしとせしや
耳は賜物のくだりしを聞かず
されど 罪にみちしこの世にありてなお

おお喜びにみちる夜、そのなかで悲嘆のさけびが、
そして暗黒が、また世のさまざまな悪の結託が、
そして恐怖が冥府の不安が戦慄が消え失せた夜！
天空は破れひらく。けれど降り落ちてくるもの—
　それはもはや雷鳴でない。
時間をそしてあまたの夜を創りたもうた、
　その方がこの夜には来りたもうた。
そして時のおきてと肉を身に受け取られ、われらの
肉と時間を永遠なるものにつなげたもうた。
悲哀に濁れる夜、罪に暗くかげる夜は
また墓場の暗黒は消え失せねばならぬ、
　このキリストの夜のなかで。
夜よ、真昼よりも明るき夜よ！
　ただ明るき夜というにまさる夜よ！

クリスマスの歌

ヨハネス・R・ベッヒャー

ようこそ　クリスマス・ツリー
常緑の平和の夢よ
希望にあふれて　お前の枝々は
暗がりにくっきりと伸びている
訪れよ平和よ　あらゆる家に
立寄れよ平和よ　憂える心にも

ようこそ　クリスマスの祭り
東でも西でも　ぼくらはお前を祝う
枝々はさらに幾多にわかれ
そして高く　ドイツの空に
世界の平和の樹のアーチがかかり
そして星々の円陣のなかで輝いている

ようこそ　クリスマスの時節
人々よ　きみたちみんなの思いは
たがいに手をにぎりあうことなのだ
そうすれば　平和がこのうえなく高められ
あらゆる国々の上方に　限りなく
平和の明るい星座がかがやこう

さまざまな道が見えます。また、
イエスが神とふかいまじわりをされた場所である
あの高い山々が、かくれています。
しかしそこから、平坦な生活という平野を越えて、
世人の俗界を突き切って、わたしたちの心にじかに、
かつて言われた、「われに従え」というみこえが、
ふたたび語りかけてくるのです。

ゲッセマネの園とカルバリの山、
死といたましい敗北、これらのものは、
忘れられた十字架から吹きよせられてくる
こだまにすぎないのでしょうか。
主よ、断じてそうではありません。
わたしたちすべてのものの中にはたらく罪のために、
あなたの十字架は建てられ、昔のように、わたしたちは、
「なんじらも、わが杯を飲み得るか」
というあなたのみことばを聞くのです。
すぎ去った昔のかたであるように見えながら、
今もなお常に新らしい生命でありたもう主よ、
あなたとの愛のまじわりは、
いくとせを経ても、真実であります。
死と時とに打ち克ちたもうた主よ、
ねがわくば、みかおを仰がせてください、
そうして、むかし信じる者の群の中に住みたもうたように、
きょう、わたしたちの中に住んでください。

（尾崎　安）

イエスの聖誕によせて

アンドレアス・グリフィウス

ただ明るき夜というにまさる夜、
真昼よりも明るき夜！
太陽にもまして輝かしき夜―この神秘の夜のなかに
あの光は生れいでたのだ、
光のなかの光に住まれる神が選びたもうたあの光は
おお夜よ、あらゆる夜や日々に拮抗し得る夜よ！

雪は消えるけど

文・北畠八穂
絵・岡林茂生

うなる吹雪でした。地につもった雪をシブキさせて、さらに、うずまく吹雪でした。

うずまく吹雪に、うずまる栗山の番小屋で

「来ンがのゥ、おじじ、ゆうびんやさんは」

鼻が鳴るのは、六つのトキでした。

「くる、くる、吹雪がやんだらな。雪雲の切れ間からボウッとさすお日さまについてくるさトキ」

祖父は、も一本モシ木を火へたしました。

小屋の中は、もちっと明るくなりました。茅がこいでできた、この小さい小屋の内側グルッと、トランクや行李や箱が屋根まで積まれています。それが厚いカベになって、スキマ風を防いでいます。そのこっちにワラブトンをのせた寝台があり、寝台の下に茶わんやなべがみえます。ここはこのふたりの住居でした。

トキが、村から半里も離れた栗山の番小屋に祖父と住んでいるのは、ワケがあるのです。

祖父は、もと東京近くの測候所の所長さんでした。測候所では、何月何日、風が、どっちから、どれくらいの早さで吹いてきたか、雨が、どれくらい降ったか、晴れた空がどれくらいつづいたか、はかりながら、それで、これから先の天気ぐあいを知らせるのです。

祖父には、四人子どもがありました。上二人が戦争へつれていかれました。長男は戦死し、次男はケガをしたのがモトで病気になり死にました。ガッカリした祖母は、体が弱くなり、流行カゼで亡くなりました。一人の女の子は九州へおよめにゆきました。残った末っ子が、トキの父でした。

トキの父は、病気のバイキンをつきとめる学者でした。まだ若いのに、これまで、とてもわからなかった病気のバイキンをケンキュウして、もう少しで、わかってしまいそうでした。そのケンキュウぶりが、新聞に出ると、その病気でこまってる大ぜいの人たちから、

——この病気を助けるカミサマと思います——

と、手紙がきたり、知合の人が祖父へ、

「あのかたおひとりで、亡くなられたかたがたの分も、お喜ばせなさいますね」

と、ほめました。そんなことといっさい、耳にはいらぬようすで、トキの父はケンキュウ熱心でした。

ぼくらのうたうクリスマスの歌
ぼくらにあたえよ　あらゆる国の
ひとびとに平和をもたらす力を
そして平和の仕事が完成すれば　そのときに
《きよしこの夜》がほんとうに歌われる
《いだきあえ　幾百万のひとびとよ》

（田口　義弘訳）

（作者紹介）

最初の詩「ああ　小さき巷ベツレヘムよ」（"O little town of Bethlehem"）の作者、フィリップス・ブルックス（Philips Brooks, 1835-1893）は、アメリカの生んだ不世出の説教家といわれ、その名声はヨーロッパにまで及んだが、この一篇の詩によっても十分記憶に価する。ボストンに生まれ、ハーバード大学に学んだのち、一八五九年エピスコパル教会の聖職者となり、一八六二―一八六九年、フィラデルフィアの三一教会の教区牧師となり、一八六九年、マサチュウセッツの司教にあげられた。この詩は、エドマンド・H・シーアズ（Edmund H. Sears, 1810-1876）の「天なる神にはみさかえあれ」（邦訳、現行讃美歌一一四番）とともに、アメリカの代表的なクリスマスの讃美歌である。邦訳讃美歌（一一五番）は、歌詞を曲に合わせなければならない関係上、他の翻訳讃美歌と同様、部分訳となっているが、ここではできるだけ原文に忠実に全訳したつもりである。讃美歌を詩として考察する場合、あるいはその讃美歌全体を理解しようとする場合、全訳はやはりそのための予備的段階として必要であろう。もとより拙訳ではあるが、この訳詩によっていくぶんでも、われわれがなじんでいる讃美歌の全体の意味が理解いただければさいわいである。ベツレヘムは、クリスマスの讃美歌や物語にとって欠くことのできないものであるが、つぎの詩においてもそれが詩的象徴によってたくみに美しくとえられている。同じくアメリカの有力な牧師で詩人でもある、W・ラッセル・ボウイ（W. Russell Bowie, 1882-　）の「永遠のキリスト」である。拙訳は、「イエス伝詩集」（新教出版社刊、昭三五改訂版）から取った。

いずれもクリスマスの精神を伝えて人の心にあたらしい力を加えてくれるにちがいない。ただ、拙訳がその労をとり得ているかいないか、はなはだ不安ではあるが。

（尾崎　安）

アンドレアス・グリフィウス（Andreas Gryphius 1614-1664）はシュレージン（現ポーランド領）の出身で、厳格な古典的形式による本格的な戯曲を最初にドイツで試みた劇作家として、また悲壮に高揚した格調高い表現で、魂の切実な叫びを感動的に歌いあげた詩人として、いわゆるバロック時代のドイツ文学のなかできわめて重要な位置を占めている。プロテスタントの深い信仰を持っていた、この詩人は、同じくプロテスタントでルターにつぐ偉大な讃美歌詩人として知られているパウル・ゲルハルトやカトリックの神秘主義詩人アンゲルス・シレジウスとともに、この時代の最もすぐれた信仰詩の作者でもあった。右に訳出した作品も、彼のそうした一連の信仰詩篇のうちの一篇である。

ヨハネス・R・ベッヒャーは一八九一年にミュンヘンで生まれた詩人。一九一八年にローザ・ルクセンブルクなどの指導するスパルタクス団の一員となってから、以後一貫して、社会主義の信念に生きる詩人として創造活動を続ける。一九二八年には毒ガス戦争に対する厳しい非難の力説『レヴィジーテ』を発表して反逆罪に問われ、またヒトラー政権獲得後はナチスの度重なる迫害のため、生命の危険にさらされ、一九三五年以後はソ連邦に亡命して、そこで反ファシズムの言論活動を行なう。

戦後は帰独してドイツ民主共和国（東独）に住み、一九五八年に死去するまでは、東独の文学界の中心であり、さまざまな文化運動の指導者であった。右に訳出した詩は、新詩集（一九五二）中の一篇であるが、クリスマスにことよせて、平和への希望が、世界の民衆への温かい愛からうたわれている。

カット・谷畑美雪

と、まねてみせたり、地面にさす栗の木のかげを、栗の絵と指したり、おどろくことばかりのうちに、木がらしが、いくども吹いて、栗の葉がすっかりおちつくしました。

「明るくなったね、おじじ、栗の葉のジュウタン」

タタタタンと、トキがとびまわって年月たつと、雪でした。

「根雪が、くる前に」

祖父は、いそがしくマキをつくり、町へ買い出しにゆき、村から

冬ごもりに入用のものを、ころ道にぬかりながら運びました。トキも、ついてまわって、一役ずつしたのです。

一二月の一四日から、ふった雪は、もう消えずに、つもりました。昨日、二二日からは、吹雪が今日で二日、つづきます。小屋の中にこもったキリなので、動きまわりたくってたまらないトキは、ぐずりたくなるのです。

「おじじ、クリスマスでしょ。ゆうびんやさんがサンタクロスになって、くるはずじゃないの。トキ、一年中待っちゃったんだもン」

祖父は、しまったと、こまっていたんです。町へ行くとき、村からはバスだから、その度にトキも連れてゆきました。一度ぐらいは村の本家へトキを待たせておいて、祖父だけが町へゆき、トキへのクリスマスプレゼントを、小包にして送り出せばよかった、しまったなァと、こまっていたんです。もう追っつきません。

「クリスマスには、おじじ、トキは、たァんと祝ってもらえるはずよ。今年は、トキ、いろいろ、いい子だったンだもン」

（おかあさまを、およめにしてあげたことだって）

と、言わないけど、それが第一なんです。

「ン」

祖父は、なお、こまりました。トキの母に、こちらの住所を知らせてあれば、プレゼントの小包はくるでしょう。が、知らせてないンです。知らせれば、おたがいに、つらいことが、できてくると、わるいと思ってです。

ずいぶんと、そのバイキンのあつかいには気をつけたでしょうに、急にウナルほどの熱が出て、気をうしない、四日目には、冷たくなってしまったのです。

四つだったトキは、父の死に方が、あまり急なので、ふざけているのではないかと、消毒薬くさい父の死ガイを、ゆすってみたくらいです。

トキが、五つの夏でした。海水浴に祖父と出かけて、浜で海をみている時でした。祖父が、

「な、トキ。おかあさまは、まだ二四だ。およめにいってもらったほうがよくはなかろうか」

と相談しました。およめ、およめと、トキは口の中で言ってみて、みたことのある、およめさんたちを、洋装のや、ウチカケのや、思いうかべてみました。わるくないのです。

「おかあさまが、も一度、しあわせになれるならば、トキ、少しは、おじじもトキも、うっすら、さびしいのを、がまんしようじゃないか」

(あ、そうだったのか、およめにいく母は、トキや、おじじのそばからいなくなるンだ)

こりゃたいへんだと、トキは、しぶっつらになりましたが、それくらい、たいへんを、がまんするから、母が、しあわせとかになるならば、トキは、がまんしてもいいと、くちびるをかんだのです。手は、祖父をつかんでいました。

「ン」

海をのみこんだ勢いでした。

「トキ、おかあさまへ、デンワかけような」

海の町のユウビン局で、トキは、母に、

「ね、トキはおじじといる。大きくなる。おかあさま、だから、よろこんでね、毎日」

海から帰った家に、母はいませんでした。

祖父とトキは、祖父の生まれた村へきたのです。祖父の生まれた村の本家に、一週間、お客さまになってから、祖父が、

「栗山の番小屋な、あすこがわたしァ好きだで」

と、トキをつれて、うつってきたのです。

きてみて、トキは、小屋の入口で、

「ほんに栗山の番小屋って、ステキね」

グラグラの扉につかまって、はねました。

なんて可愛いちっちゃい小屋でしょう。

祖父とトキを、この小屋が、舞台の人にしてしまいそうです。小屋ン中には、なァにもないんです。だから、なんだって、つくれるンです。祖父は、まず炉をつくりました。炉ぶちの丸太を切るときトキは、端をおさえました。つくった炉に火をもしたンです。

「スパラシイね、おじじ」

「ここはね、たのしいとこさ、トキ。トキが、どれくらい、カミさまから、チエをいただける力があるか、毎日、ハッキリわかるんだから」

もえた火で、栗をやく祖父は、栗のシブがついた手で、うまそうにタバコをすいました。

トキが、栗の木へあたる風の音、水汲場の谷川の流れを、おもしろがり、

「おじじ、こうでしょ、こう」

祖父は、非常なガッカリにおちこみました。トタンに、ガックリ底へ落ちこんだ心のはずみで、ドンと飛上がったみたいに、

（おゥ、エスさま）

祖父は、エスさまから、ふしぎな知らせを受けたのです。

（この雪。エスさま、そうです、ン、ン）

雪に照るお日さまに負けないツヤツヤした顔になった祖父を、トキは、どうしたのって目つきでみました。

「さ、トキ、エスさまがくだすったんだ。トキ、クリスマスプレゼントを、エスさまが」

どうしたんだろうと、トキは、びっくりして、しんぱいになったくらいです。

「なにからつくろうかな、トキ、うれしいぞ」

祖父はもう、雪をにぎって、それを雪の中において、ころがしはじめています。みるみる雪玉は大きくなってゆきます。

「あっ、あっ、トキもやる、やる」

赤いトキの手袋の手も雪玉を太らせました。

「いいかい、トキ、みといで」

むねの高さまで大きくした雪玉を、祖父は、マキ切りナタで切り出したのです。

「それ、尾っぽ？　あれ、ハト？　ウワ羽ね、あ、白鳥だ、おじじ、すンごい」

雪原の上に、真白な白鳥（スワン）が一羽、立ったのです。ほウウと、トキは、みとれてしまいました。

「どうだい、トキ、この白鳥は、エスさまからトキに、今年のクリスマスプレゼントだよ」

トキは、思わず、コックリおじぎをしました。ありがとうございます、なのでした。

「トキ、白鳥だけじゃないよ」

祖父は、トキが、ほしいものを、つくろうと、トキののぞみをききます。

「ゴジラ」

すっかりうれしくなったトキは、ふざけました。ゴジラは、トキが父とみたエイガです。しばらく家中に、ゴジラごっこがはやったのです。

「ン、ゴジラか、おウ」

さっそく雪玉をころがす祖父です。ゴジラつくりには、トキも、ああだ、こうだと、ず

「あさってよ、おじじ、クリスマスは」
「だいじょうぶだ。トキは、エスさまのいい子だもン」
丸太の炉ぶちに、キセルをはたく祖父は、こまりきって、エスさまに、祈っていました。
(エスさま、どうしたら、よろしゅうございましょう。トキに、クリスマスプレゼントを、送ってくれるアテの人は、ないのですが、この孫は、こんなに待っています。待つのは、とうぜんなのでございます。この子は、今年、母を、しあわせにしたつもりなのですから)
さんざ、ぐずったトキは、祖父が、わいた湯で、つくってくれた梅漬の汁をたらしたクズ湯を、フウフウのむと、ねむくなって、寝台のワラブトンの中の湯タンポを、
「あつすぎる、ジャマだ、よけろ」
と、ふんづけおとすむずかりぶりで、ねむってしまいました。
外は、まだ吹雪です。祖父は、ねむるトキを、そっとだくと、なおも祈りになりました。
(キリスト・イエス、あなたが、一匹の魚もとれなかった漁師のアミに、どっさり魚を、お入れになったように、クリスマスプレゼントのくるアテのないわたしのこの孫に、あなたのプレゼントを、おあたえくださいますように)
このとき、祖父は、エスさまに、トキへきかせる、いいお話しでも、思いつかせてくださいという心持ちでした。が、エスさまと、お話ししてるうちにあんなに、プレゼントを待っているトキに、なんとかして、プレゼントを手につかませたい、つかませてやれないという、こまり方から、少しずつエスさまにムズカリ、
(エスさま、あなたは、あなたに、さわれば目があくと信じて、めくらの目をあけ、歩けない人を立たせて歩かせたかたです。どうぞトキにも、トキにも、そのふしぎをどうぞ)
と、ねだっている自分に、驚いた祖父は
(ごめんなさい。エスさま、あなたは、ふしぎをしたことを、言われるのが、おきらいでした)
と、おわびしたうえで、こんどは、
(お心のままに、エスさま)
エスさまは、わるく、はからってくださるはずはない、たとえ、そのときは、わるくみえても、それは、やがて大きいよいことになるものしかくださるはずがないと、安心したら、祖父も、トキをだいたまま、ねむってしまいました。
夜半に、吹雪は、やみました。
朝、小屋の扉は、凍ってあきませんでした。テツビンにわかした湯をかけてとかし、少しずつ内がわにあけてみると、雪のカベが、屋根までとどきそうな高さです。
「ウァ、おじじ、まっ白ね」
ンウと、祖父は、戸口の雪に、トンネルをほりました。段々をつけて外へ出てみると
「おじじ、おじじ、おじじ」
トキは、あたり一面、一夜でコンモリとつもった雪に、おどろくばかりです。栗の木のこずえも、も少しでみえなくなるほどの雪です。雪の外に、この世には、なにもなくなったとみえるキリもない雪、雪でした。
(これでは村から一つのものも来そうもない)

聖書のさしえ (12)

辻　　成史

1. A・デューラー。「降誕」1504年，銅版画

いぶん手伝いました。
ふたりは、おジヤの昼ごはんを、白鳥や、ゴジラのならぶ、雪原にムシロを持出してたべました。
「おじじ、まっ白な雪に、まっ白な白鳥や、ゴジラが、あるのは、テンゴクみたいだね」
「見てきたよなことを言うなよ、トキンぼ」
ウフフと肩をすくめて笑ったトキは、
「ンだ」
と、村ことばでうなりました。
「ね、おじじ、ま白な紅茶茶わんつくろ」
それはトキが両親と、子供遊園地へ行って、のった、まわる紅茶茶わんのゴーランドなのでした。
「よしきた、こい」
おジヤの木ジャクシで、祖父は、紅茶茶わんの中をえぐりました。白い大きい紅茶茶わんが、お皿へのって雪の上へ、あらわれました。
トキは祖父を引っぱって、紅茶茶わんへはいり、
〝ンンンウ　ンンンンウ　ンンンン　ンンウ〟
両親と乗ったときやってた音楽をやりました。
「次は、なにをつくろう」
「おじじ、東京のおうち」
「ンや、あんなちっぽけなのは、つくりでがない。ローマの宮殿といこうや、トキ」
「あ、白い柱にぶどうの房のモヨウがついた」
トキは、絵でみた宮殿を雪にかきました。
祖父と、トキは、トキのセイタケに、にあう宮殿をつくりだしました。宮殿ともなれば、トキは、プールを、祖父は展望台(てんぼうだい)をと注文がどんどんふえるので、この日だけでは、とてもつくりあがりませんでした。
大はたらきしたトキと祖父は、雪が、うす紫になる夕方、雪地へこしをおろして、つくった白鳥から、ゴジラ、紅茶茶わんに、宮殿のできかけと、みまわし、
「月が出たら、みにこようね、おじじ」
「星夜だって、みごとだろうよ、トキ」
「ンウウ」
と、深ァく息をすったトキは、
「りっぱだね、おじじ」
「なァトキ、トキは今年、つくるというチエを、エスさまから、いただいたんだよ、なくするな」
「ンウ、わかった、たのしいね、おじじ」
「つくる材料(もと)は、なにもないみたいな所にも、きっとエスさまは、つくる材料を用意しておいてくださるンだ。みつけなきゃバカさ」
ツウと、冷やっこい雪風が、吹いて通ります。
「ンだね、おじじ、トキァみつける」
トキの目は、上みろ、下みろ、クルッとまわってネコの目を、していました。
「ン、トキ、この雪の像は、やがて消えてなくなるけどもな、トキが、今日、エスさまから、もらった、つくる材料を、みつけるチエはな、トキ」
「おじじ、太るよ、雪玉をころがしたみたいにね。太らすよ、トキ。やせさせちゃバカね」

4.

2. ブーシューの画家「訪問」, 1409年以前。時禱書挿絵ミニアチュール

3. 第1図部分

4. 「降誕」ヒッタの福音書写本。1020年頃

2.

中世末に始まったドイツ宗教版画の伝統は、ドイツ・ルネッサンスの巨匠、A・デューラーの出るに及んで最高点に達した。彼の手になる大小さまざまの木版・銅版の聖書画は、飽くことなき精密な自然観察に基づきつつ、しかも受難・黙示録などの物語をきわめて聖書本文に忠実に、正確に再現している。ここに見る作品も、一見しては、ごく素朴な農民生活の一断片としか思えぬであろう。ヨセフは井戸から水を汲み、小鳥の舞う空の下、はるかに木々や村の家が静まりかえっている。しかしひるがえってこの陋屋内に目を転じる時には、まことにつつましいようで、世の創られた時より今日までの歴史の中でも、最大の奇蹟—降誕の奇蹟の語られていることに気づくのだ。マリヤは両手を合わせて御子を拝し、その部屋の奥深い所から老いた羊飼、そしてあのろばと牛がそっと顔をのぞかせる。すべてが北欧の平静さと、素朴な図像の伝統に満たされている。いたずらな饒舌の多い降誕図にくらべて、なんという秩序と平静さであろう。

いっぽう、フランスやベルギーにおいても、中世末の聖書や祈禱書の豪華なミニアチュール —その多くは当時の王候・貴顕に捧げられたものであったが——は、続く北欧ルネッサンスの油絵芸術の形成の母胎として重要な役を演じた。ここではドイツ版画の豪毅・朴訥は見られない代わりに、繊細この上ない自然や世俗の生活の描写が、この世のものとは思えぬ明るい、はなやかな雰囲気をかもし出している。

3.

以上、12回にわたってわたしたちは、聖書の本文に直接関係した幾つかの挿絵を通覧してきた。限られた紙面で、ビザンチンやロマネスクの多くのすぐれたミニアチュールを鑑賞することができなかったのは残念であったが、しかし、これら挿絵芸術を偉大ならしめ、その根底に常に生命を与えているのは、偉大な作家の資質でも、すぐれた技倆でもなく、まことに、聖書に語られた精神そのものであるということは少数の例からも言えるであろう。そしてこれは、実に、全キリスト教芸術の本質である。

シュヴァイツァーとともに

——野村実博士とそのサナトリウム——

夢のサナトリウム

——あのゥ、白十字会というところはここをこう行けばいいんでしょうか……

途中、車のなかから二度ばかりそうたずねた。東京を離れた静かな郊外地で、やっと見つけた通行人に向かってである。

たずねた場所は、どこも、目的の都下北多摩郡東村山町野口一四五番地からずいぶん離れていたのだが、通行人は〝白十字会〟と聞いて大きくうなずき、親切に道順を教えてくれた。つまりはこれ、その〝白十字会〟がどれほど有名であるかを示しているわけだ。

白十字会——正確には白十字会村山サナトリウム、その白く美しい建物が折重なるように丘の中腹に並んだ風景を、東村山町郊外のいなかじみた田畑のなかを行くうち発見した記者は思わずほっとため息をもらした。東京から車を飛ばしてたっぷり一時間半、その一時間半の間に目の前に開かれた風景は、あまりに美しく夢のようであったからだ。

清澄な空気、音もなく降りしきっている晩秋の透きとおった光線、収獲を終えたたんぼの褐色の展望、山とも丘ともつかずに連なっている小高い大地の隆起、それをこんもりと覆った雑木林の紅葉、落葉の立てるひそやかな乾いた音、こおろぎのため息に似た鳴き声

若人は宗派をこえて

今年7月、京都で開かれた世界宗教者平和会議に参加した各宗の宗教青年がその後相互の連携を深め、〝平和〟をたんに〝こころ〟の問題にとどめず、〝軍備なき平和な世界実現〟のために努力しようと、去る10月5日、東京神田の日本YMCA同盟で「宗教青年平和協議会」の結成総会を挙行、キリスト教・仏教・大本教の青年が多数結集した。

読書の秋の光彩

本事業部ではプロテスタントの文学集団〝たねの会〟の協力を得て、10、11月にわたり大阪・京都・名古屋・仙台などで〝キリスト教文芸講演会〟を開催、要注意の健康状態にある椎名麟三氏も奮戦、盛況をよんだ。

写真は、11月6日、東京会場のYWCA講堂で熱弁をふるう佐古純一郎氏。

（どこへ行っても明るい団らんが……）

ちに、シュヴァイツァー博士の生涯を少しでもお伝えすることができたら、博士はどんなによろこぶかと思います。

と申しますのは、シュヴァイツァー博士は決して自分を偉いと思っているからではありません。博士がもっているような理想を、世界じゅうの人たちがみんなもってくれたら、と願っているからであります。ご承知のように、シュヴァイツァー博士は、いま世界じゅうに名まえを知られるようになり、ことにノーベル平和賞をもらってから有名になりました。新聞や雑誌に、大哲学者、大神学者、大音楽家、バッハの理解者、あるいは演奏家、アフリカ土人の医療伝道者、そのほかまだいろんな名まえをもって、ほめたたえられているのであります。とてもわたしたちのような小さな人間が、シュヴァイツァー博士の全部を理解するのはむずかしいことであります。ただわたしは、なんの幸いか博士のところへまいることができ、いっしょに生活をしてまいりましたので、いささかアフリカの現地のお話をすることができます。みなさんがシュヴァイツァー博士の勉強をなさる上のお助けになるかと思い、お話しするわけであります……」

淡々とした語り口調は、かえって聞く者の耳をとらえてしまう。そして、ことばはやさしいが、それのもつ意味の深さが、いつのまにかひとりひとりの心にしみとおるというわけだ。じじつ話が進むにつれなかばしかたなしに講堂に集められた生徒たちの目が、しだいに光をおびてくる。女生徒が、セーラー服のリボンをくしゃくしゃににぎりしめて身を乗り出す……若い顔、顔、顔、

そして輝いた目、目、目——

この語り手、それは言うまでもなく、わが国ではシュヴァイツァーといえば野村実、野村実といえばシュヴァイツァーと言われるほどによく知られたその野村実医学博士である。

じっさい、全二〇巻にわたる綿密ぼう大な『シュヴァイツァー著作集』が刊行され、彼の理解者が多い日本は、世界に例がないほどとシュヴァイツァー自身が驚くというその背後には、一日本人医師野村博士のたゆまぬ紹介の労があったのだ。シュヴァイツァーと野村博士との交通がはじまったのは昭和六年、以来三〇年にわたる交友のうち、とくに野村博士の戦後の動きは多忙だった。まだわが国が米軍占領下で、放送・出版に多くの制限が加えられていたころ、シュヴァイツァーの指定によって、日本における法定代理人として野村博士が邦訳出版と印税管理の事務をとるようになってからは、わが国におけるシュヴァイツァーに関するいっさいのことが野村博士の手を通ることになった。おまけに、シュヴァイツァーの活動の地、アフリカ・ランバレネにおもむき、みずから彼の医療奉仕に協力した最初の日本人として、昭和二九年のアフリカ行は博士自身にとっても決定的なものだったらしい。これを通しての、シュヴァイ

——そして、なによりも、そのような風景の中心に位するなだらかな丘のスロープに、輝くばかりに白く美しく並んだ白十字会村山サナトリウム……

ごめんください。あの、先日お願いしておいたんですが、院長先生にお会いするためにやってきましたかくかくしかじかと申す者ですが……

プールというか池というか、四角い、水を張った、魚も泳いでいる池の上を、渡された板の橋で越えてはいった玄関で、受付嬢にそう言った。数分のちには、そのおかたに会える、この受付嬢が案内してくれさえすれば、もうすぐに会えるのだ、あのかたを目の前にして、その声を聞いて……なぜか記者の胸は恋人に対するようにソワソワとおちつかなかった。

それというのも、このおかたにお会いすることをひそかに願っている人々が数多くいることを、記者は知っていたからだ。そして、それは、また記者自身の願いであったればこそ、このときをひそかに待っていたのではなかったか。ソワソワするのもムリはないのだ。未知の人に相対するとき、何をそのうちに秘めているかわからない一個の生きた人間に相対するとき、そこにはからずも一種の期待と緊張感とが生まれるものだ。それがなければどうしてひとりの人間が理解できよう。しかも、相手が巨大であればあるだけその感情は高まる。

そのかたが、巨大であるかどうか、それはわからない。巨大だなどと言ったら、笑われるかもしれない。会ってみたらばタダの人、ということになるかもしれない。いずれにせよ、あと数分、まちがいなく会えるのだ。

「院長先生はただいま患者さんと面接中ですが、もしよろしければここまでおいでくださいとのことで……ええ、いちばん奥の病棟です」

美しい受付嬢が、そう言って案内してくれる。丘のスロープに建てられているサナトリウムだから、いちばん奥と言えば、コンクリート道をゆるやかに登っていくというかっこうになる。その両側に、いろいろな病棟が並んでいるというわけだ。

あたりが静かだから、受付嬢——Sさんと言うのだが——の声も静かなのか、おだやかな説明が続いたあと、ふとそのSさんが前方左上の陽に照らされて明るい病棟を指して言った。

「あそこです、院長先生のいらっしゃるのは……」

胸深く燃えるもの

某私立学園の講堂である。中学生、高校生がぎっしりと場内を埋めている。しんと静まり返った一瞬の緊張にこたえるかのように、おちついた声が壇上から流れ出す。

「本日は、〇〇学園の若いみなさんに、シュヴァイツァー博士のお話をする機会を得たことを心からうれしく思います。なぜかと申しますと、シュヴァイツァー博士は特別に若い人を愛し、若い世代の礼讃者であるからであります。博士は、『ほんとうに世界じゅうの人が、一五才の少年の心を持ったなら、どんなに美しい世界になるだろうか』といいました。

若い時代に持っている理想の中に、人間はいちばんほんとうのことを考えるのであります。そして、おとなになって、世の中の荒海をわたるときに、船を軽くあやつるために、だんだん、小さいときに持っていた理想を海に落としていくのであります。船を軽くするために、若いときにもっていた理想を海の中に投げ捨て、そして最後には、船の中に水と糧食だけをのこして、実にみすぼらしい人生を終えるのであります。これを人間はおとなだといい、あるいは円熟だというのであります。若いときに持った理想の中に、一生涯生きつづけることが、人間のいちばんの理想であると、シュヴァイツァー博士はいっているのであります。ほんとうに、日本の若い人た

身体もろともの高揚をはかる——こう言ってしまえばわけはないみたいだが、どうしてどうして、このかんたんなことが一度もかえりみられなかった。ヨーロッパで行なわれているこうした行きかたに目をつけたのが野村博士だし、その効果を信じて積極的に実施したのも博士だ。これをよんで転換療法——なるほど、院内をまわってみると、これがどこまでも重要な治療の一手段なのであって、遊びごとや、退屈しのぎの慰みごとでないことがわかる。たとえば、広くはないが設備のととのった工芸部というのがある。刺しゅうや、木片を彫刻してのブローチ・工芸品の製作が行なわれているのだ。作業教室では、彫刻、人形製作、その他いっさいの技術指導がなされる。製作品は、院内の売店のほかに公開展示会なども都内で開かれて即売される。またほかの教室では、ちょうど珠算教授が行なわれている。ここで何人もの人が免状をとるそうだ。そして、その隣りでは若い男性が五、六人、熱心にロシア語を勉強している。

（製作してると病気も忘れる）

こうなると、療養生活につきものの憂うつや退屈などどこへやらだ。生産のよろこび—技術の習得—治癒—社会復帰、この作業療法が患者に及ぼす医学的・社会的・心理的効果はようやく厚生省その他も認めるところとなって、多くの療養所がこれを採用しているそうだ。が、ここほどのことはありません、と婦長さんは、いささか得意そう。

なるほど、このサナトリウムのまぶしいほどの明るさは、たんに澄んだ空気や、明るい太陽や、清潔な病棟や、美しい看護婦さんのせいなのではなく、なにかもっと根本的なところからくるのかもしれない。それが先ほどの「院長面接」の説明を聞いて、いっそうはっきりわかるような気がした。

つまり、医師と患者とは、治療をこえて人間としてつねに隙間なくひとつでなければならない——それが野村博士の強い信念らしい。だから、八名の担当医と患者とは、そうしたつながりのもとに療養生活をいとなんでいるのだが、月に二回は博士自身が面接して、治療のことだけでなく、いっさいの相談に応じる。それが「院長面接」だ。院内を歩くと、ウチの院長先生は何でも親身になって相談にのってくれる、院長面接でとても元気づけられたという声によく出会う。これだけの広さの療養所で、それぞれ担当医がいながら、ほかならぬ院長と患者がこんなに直接親しく結びつけられているのもめずらしい。

ちょうど、若い男の患者が相談中だ。

「ぼくは手術したくないんですが……」

「しかし、もう少し調べてみなければ……薬だけでなおるとは思えないからね」

「××先生は年内に退院してもいいって言ったんですがね……」

「しかし、あんたは釣りばっかりしとるから信用ないんで……」

ここで博士と患者とはじつにたのしそうに破顔大笑した。これが、ひそかにおそれさえ感じて、緊張しながら期待していた野村実博士なのだ。これがあの博士、院長、シュヴァイツァーの野村実……淡々としてあたたかく

ツァーの博士に対する厚い信任もさることながら、なにより、書物以上に、この目を通してこの身に感じ味わったアフリカでのシュヴァイツァー体験は、博士のその後の生きかたに大きく影響したようだ。たのまれれば昼夜をいとわず、シュヴァイツァーについての講演や執筆にはげんだ。あの〝体験〟を通ってからは、それらすべてにいっそう火がついたようだった。

シュヴァイツァーの生きかたは自分の生きかた……などと、そんな大きなことを博士は言わない。ただ、シュヴァイツァーのこころをこころとする、それが自分の生きるねがいと、ひとり心のうちでかみしめるだけなのだそうだ。だが、その淡々たる秘められた情熱が人々の心を静かにあたため、火を点じ、明るく燃え立たせる。記者がふれてみたいと思ったのも、じつはその情熱の根源なのだ。外から見ては、白衣をまとっただの医師にすぎないこの人のうちで、静かに燃え続けるものがある——この人は、なにをどう生きているのか。

チビっこいオジサン

「先生、先ほどのお客さまです」

Sさんが、病棟入口のわきにある小部屋をのぞいて、そう声をかけると、スリッパの音をさせて出てきた小柄な男、白衣を着て、白髪まじりの髪が豊かで、とりたててお愛想を言うわけでもなく、といって素っ気なく無愛想であるというのでなく、その顔が静かに微笑して、まさに淡々とかんたんなあいさつ、そして恐縮したように、

「じつは今患者と面接中で、いろいろ相談ごとがあるもので、すむまでしばらくお待ち願えませんか。むしろ、その間に院内を見物でもなすってください……」

そう言うのだ。おだやかなものだ。これが野村博士だ。白十字会村山サナトリウム院長野村実だ。小さなオジサン、医者というものは、ヒゲでもはやしていて、体も大きくて、せめてもうちょっと堂々としているものだ。これが博士だなんて、チビっこいオジサンじゃないの、院長先生とよべばよべなくはないけれど……記者の緊張感はとたんにとけて、思わずこちらも微笑して、だが淡々という風格は出しきれず、

——それでは、自由に見物させていただきます。婦長さんにご案内願います。では……

サナトリウムというのは清潔で明るいものだ。そこへ晩秋の明るい陽がいっぱいに照るのだから、なにもかもがまぶしいみたいだ。そんななかで、患者がじつにたのしそうにしている。それは、ひょっとしたら、ここにいつまでもいたいのかもしれないと思ってしまうほど満足そうなのだ。ある婦人患者は、一心に習字をしている。書道展に出品するのだそうだ。全国展に一度、三多摩地区の展覧会に二度入選したという三九才のその人は、ここでの生活一年半、「家庭にいたらゼッタイできそうもないことがここで教えられて、ほんとにありがたい」と言う。

——と言いますと、ここではなにを積極的に教えていらっしゃるんですか？

そこで婦長さんが、待ってましたとばかりにんまり笑って、じつはこれは院長先生がおはじめになったことですが……というわけである。つまり、なんの病気でもそうだが、ことに結核などは、ただ病菌とたたかうために体を養生するという受け身の療養ではダメ、療養生活そのものを創造的に生かして、精神

（病気の回復、書道の上達）

（院長小屋で宿直を終えた朝、きょうも人間への歩みだ）

「それはね、シュヴァイツァーから教えられることは、人間の尊さということなんです よ。それは医学の根本です。ところが、案外医学の内部では人間尊重でないんですね。近ごろようやく人間医学と言われるようになりましたが、今までは動物医学でした」

そこまで言って、博士は、感にたえたようにつぶやいたのだ。

「人間というものは神秘なものだ……」

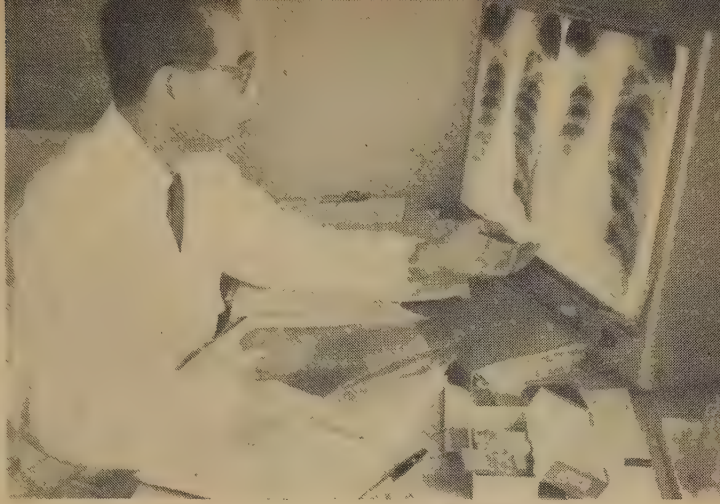
それには、はっとするほどの思いがけない深い感慨がこめられていた。まさしく、そこには、生きとし生けるすべてのものを、そのままで尊ぶあのシュヴァイツァーの〈生への畏敬〉の思想が、もはやたんなる思想としてでなく、実感として、生きかたとして、じじつそのものとして息づいていたのだ。

人間のひとりひとりがかけがえのない存在である——博士の人間に対する無限の感動は、そこにある。人は、他人に対し適当なレッテルをはり、勝手にこの人はこういうものと定めて、それぞれの整理ケースに納めてすましている。そして、だれもがおたがいを理解しない。だが「人間は神秘なもの」と博士は言うのだ。人間はかんたんにレッテルをはることのできない尊いものであり、割りきるにはあまりに複雑で奥深い。博士はかつて、シュヴァイツァー村についてこう書いた。〈ラムバレネはまさに動物の天下である。生命あるものすべてが、その生命だけのゆえに、同時にたいせつにされる世界である。〉と（『人間シュヴァイツェル』）。そして、そのような世界を、博士はまず自分のささやかな身のまわり、自分の接する人々との間に実現しようというのだ。

白十字会村山サナトリウム——博士はこれだけはうれしそうにはっきり言った。「ここでは、だれも自由に話しができます」と。そしてさらに、博士は多忙な自分の日常を苦笑しながらこう表現するのだ。それは「朝から晩まで、老いも若きもの世界」であると。

解きえぬ人間を愛して

看護婦さんたちが、「小屋」とよぶリビングキッチンのようなモルタル造りの小さな家が庭にある。博士はここによく泊るのだそうだ。ゆうべがそうだった。そして、きょうは午前中を面接で終り、食堂でシュヴァイツァー病院と同じように、医師や職員といっしょに同じ病院食をとると、博士はオースチン五



（院長面接―病気をこえて話がはずむ）

人を遠ざける妙な威厳もなく、小柄の、風采のあがらぬチッポケなオジサン……

ささやかな楽園

面接希望者がきょうは多かったのか、やっと何人かの面接相談が終って、ほっと一息つかれた博士と、記者ははじめて一対一で相対した。だが、もうオジサンなのだから、そう固くなることはない。

――あのゥ先生、作業療法の理念と言いますか、そんなところもうかがいたいんですが、まず、先生のシュヴァイツァーと出会うまでのこころの遍歴といったところを……

もともと、最初に面会を申し込んだとき、多忙を理由に記者は婉曲に断わられた。わたしなんかは語るほどのことは何もなしというのが博士の真意だ。それをやっと押しかけたのだから、そうヌケヌケとご自分のことを語っていただけるとは思えない。はたして、博士はいっそう淡々と、目を遠くへ投げながら語るのだ。

「大正七年ですから一八才ですかねえ。一高にはいって得意の絶頂にあったときですが、わたしはふしぎに失意の経験をしたんですね。そのころは、トルストイや、倉田百三の時代でして、そんなものや吉野作造のものなど読んでいろんなこと考えたんです。つまり人は何のために生きるかといった……。それで、わたしはけっきょく人生の無常感からキリスト教へいったんですねえ。そして最初に知ったのが内村鑑三なんです。大正八年の正月には、大手町の衛生会館で行なわれていた内村先生の集会にまいりました。それから、わたしは一高を出て、九州大学医学部へ行ったんですが、一高在学中に毎週出た内村先生の日曜集会でわたしは養われたんです。そして、大学卒業前、内村先生を通してシュヴァイツァーを知らされまして、また自分の医者としての方向決めをシュヴァイツァーに教わったというわけです。それは二四才のときでした。つまり、わたしは父が医者でしたから、自分もそうなるということは決めていたわけですね。しかし、親ゆずりであるだけに、なにをするかが自分には疑問だったんです。そのときに『水と原生林の間に』の原書を読んで感激したんです」

――それで、以後はもうもっぱらシュヴァイツァーを仰いで……

「ええ、わたし自身は道しるべ通りには歩かなかったけれども、道しるべとなってくれたわけです」

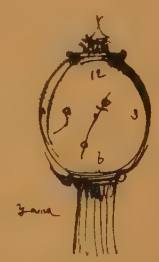
窓外の池の水面に反射する初冬近い陽をながめながら、六〇才の博士はつぶやくように言うのだ。

「緩慢ですがわかってきましたねえ、シュヴァイツァーの気持ちが……」

それは、どこまでも聞かせるというしかたでなく、博士の感慨にみちたつぶやきだったから、あえてたずねるのもはばかられるくらいだったが、そこがたいせつだった。

本を読みましょう

――クリスマスを中心に――



クリスマスが近づきました。街にはさわがしいジングルベルとともに、享楽的なムードがただよいます。しかし、わたしたちのたいせつな人生のひとこまを、一夜の歓楽に酔い流してしまうことなしに、せめてキリスト降誕の意味を味わい知り、過ぎて行く年と新しくやってくる年の心備えをしたいものです。

そこで、今月は、クリスマスを中心とした読みものをいくつか、編集部でえらんでみました。

まず、クリスマスの内容を知るためには、なんといっても新約聖書わけてもそのなかの福音書をお読みになるのがいちばんよいのですが、この記事にしたがって、キリスト降誕の意味を信仰的に深く説きあかした宗教改革者マルチン・ルターの小説教集があります。『クリスマス・ブック』（新教出版社、新書・一四〇円）がそうです。

アメリカのルター学者ベイントンが編集し、中村妙子がじつに平易な語り口調で訳しています。きれいなさし絵数枚とともに、素朴で美しい感動を盛りこんだ書物です。

クリスマス（降誕節）は、キリストの生涯のはじまりですが、これを機会に、じっくりとその生涯の全体にわたって理解することは一生一度の好機会です。

福音書を豊富に引用しながら、古今の美術作品にしたがって、それを見る面と読む面で理解させようとした岩波写真文庫の『キリスト―その生涯と弟子たち』（B6・一〇〇円）は、親切にできています。この写真文庫は、特殊なものを除き絶版にしていますから、在庫のある今のうちに一冊求めておくとよいでしょう。

同じ趣旨のもとに作られた『キリスト―美術にみる生涯』（柳宗玄著、現代教養文庫・一三〇円）は、文庫の特性を生かして、見開き右ページに福音書の引用個所とやさしい解説、左ページに図版を入れた見よく読みやすくわかりやすい一書です。

読みものとしてのイエス伝では感動あふれる古典的名著、ディケンズの『救主イエスさまの御一生』（新教出版社・B6・一〇〇円）は、じつによく売れる本です。これはキリスト教少年文庫の一冊ですが中学生だけでなく、おとなも読みたいものです。ディケンズの名作『クリスマスカロル』は、いまさら紹介するまでもないでしょう。種々の文庫にはいっています。

『イエス伝詩集』（新教出版社・新書・一二〇円）は、ブラウニング、テニスンはじめ、外国の詩人がうたい上げたイエスの生涯についての詩が三九篇、尾崎安の美しい訳調で収められています。

小学生へのプレゼント用として絶好の本が出ました。基督教児童文学家協会長上沢謙二氏が、創作をふくめて、ヨーロッパにつたわるクリスマス物語、アンデルセン童話など広く集めて、豊富で美しいさし絵とともに、函入りの美本にしたものです。『世界くりすます童話集』（富山房・B6・三六〇円）がそれです。

キリスト教中学生文庫の一冊、ヴァン・ダイクの『もう一人の博士』（新教出版社・B6・一二〇円）は、「アルタバン物語」として知られている感動的な名篇です。先のディケンズのものと同じく岡田尚訳のこれは、格調高く、小学上級から中学生に、清らかな感動をあたえるでしょう。

九年型の車に乗りこむ。週に二回、都内飯田橋駅近くにある白十字会診療所に通うのだ。六〇才とはとうてい見えない若さで、博士はいなか道をつっ走る。町の保健婦さんが道端でついと片手をあげる。すると、博士も手を上げてあいさつする。じつに気さくでこだわりがない。どこにこの人について想像されるようなもったいぶった威厳があるのだろう。

「シュヴァイツァーの前に出ると、こっちは子供でしょ？　八六才というだけでなく。そのおじいさんがいっしょうけんめいやってるのに、こっちは老人ぶれないです、老いぼれたこと言えないですね」

先生はじつにお若く見えると言ったら、笑いながらそう答えた。

車が高円寺あたりを走っているときだ。地下鉄工事で道路がひどくせまい。博士の車が都電停留所のところでつと軌道内にはいってしまった。むろんすぐ出たのだが、交通巡査が目ざとく見つけた。停車である。

「いかんな、車券は？」

若い警官は、退屈な午さがり、いいカモとばかり横柄に調べはじめる。どうやら長くなりそうだ。

「診療所へ急ぎますから、このへんでカンベンしてくれませんか」

ラチのあかない調べに、博士が淡々と言う。

東京までの二時間ばかりの間に、博士はもう一度しみじみと言った。

「人間は神秘なものです……」

——それは、どこまでもひとりひとりを全体として、コマギレにしないで、自分の力のおよびがたい存在として尊ぶということですか？

「そうです。たとえばシュヴァイツァーなどは、本や写真で知ってるより、受ける力、啓発される力がちがうんです。会ってみるとふつうの人間です。しかし、その人間というものが前面に出て、才能や美点などが背後に隠れているような知りかた、受けとりかたはだいじなんですね。奥深さはそばまで行ってもわからない。汲みつくせない奥深さを人間はもってる、そこをぼくは尊重したいんだ」

博士ははじめて熱っぽい言いかたをした。協力者の前では、どんなにとるに足りない者も、あるにかいなき者も、すべては汲みつくせない奥深さをもった尊い人間、一個の生命なのだ。解きえない神秘を、かけがえのない生命を、そのゆえにありのままで尊ぶ……「院長面接」も、あらゆる人との上下のない語らいも、すべては博士のこの〈生命の畏敬〉から生まれているものなのだ。そして、そこにまた、あのサナトリウムのふしぎな明るさがあったにちがいないのだ。

飯田橋のルーテルセンターのすぐ近くに、まわりの家並につぶされそうに小さく、白十字会診療所はあった。所長野村実。車を降りてせまい屋内にとびこむと、休むまなく診療と面接相談の開始。そして、ここでも、じつに思いがけなく、来る患者来る患者のだれもが、博士と特別の親しさと信頼で結ばれていることがわかる。

玄関には、博士の面接についてのお願いが出ている。午後二時より、三〇分ずつ、一日一〇人と面接相談をしますから、希望者は申しこんでください。診療は相談の合い間合い間に行ないます、と。親切なものだ。こちらから手を広げてだれでもいらっしゃいというわけだ。そして、それは博士のもとで美しくあたたかく成功しているのだ。

博士は、自分の信仰については語らない。それはシュヴァイツァーと同じだ。「かれは、おのれの信仰を語ることをきわめてまれである。けだし、信仰は論議の俎上にのぼらすべきではなく、最も貴重なものとしてその胸の深きところに秘めらるべき一面を有するからであろう」。（『医師シュヴァイツァー』）

だが、ここには、実効のない論議をやめて生けるキリストの愛ひとすじにうながされて生きる者の姿がある。あるにかいなき者を求め、愛しぬいて、この貧しい人生を尊く生かそうとする者のひたむきな姿が、アフリカと日本の距離をこえて、たがいに静かに燃え合っている。信ずることは生きること、貧しくささやかなりとも、そこに美しく花開いた人生がある。

きですね、そのおじいさんは別段理論的なことを話さない。ただ、ご自分の信じているそのままを話される。

神さまのご存在から、キリストは神のみ子であらせられる。そのみ子が人間の姿をとって地上に現われられた。非常に謙遜なご態度で、りっぱなご生涯を送られ、最後には罪もなく人から憎まれきらわれ、そして十字架につけられて、極度の恥辱と苦しみを受けて死なれた。そのことは、わたしなどの罪のあがないのためであって、神さまの愛から出たのである。それから、神さまがキリストをよみがえらせて、天に上げてあがめていらっしゃる。また時来たらばふたたび地上においでになる。そのときは信者は栄光のからだを与えられて、天にとり上げられて、そのあとでキリストさまが人々をお裁きになる。しかるのちに神聖な神のみ国が建設される。そして、キリストさまが、万国の王として万物をしろしめすという話なんですね。なにか夢のような話をしておられると思って、ほんとうにしなかったんです。それから一週間、いろんな質問をしました。わたしは非常に疑い深いほうでして、なかなか人さまのおっしゃることをそのまま受けいれない。あらん限りの抵抗をいたしまして、けっきょく、そのかたのおっしゃることがほんとうだということがはっきりとわかりました。それで決心して、洗礼を受けたんです。

その洗礼もおもしろいんです。そのかたといっしょに、夜、小樽の町を歩いているうちに、住吉座という芝居小屋があった。そこの前につるべ井戸の大きなものがありまして、そこでわたしは中島さんに、「聖書に書いてあるように、バプテスマを授けてください、お願いします」と言うと、「いや、わたしは牧師でないから、それはできない」とおっしゃる。「しかし、わたしはあなたからお話をきかしていただいて、キリストさまを信じたんだから、あなたにやっていただきたい」と言って、往来ですっぱだかになって、そして井戸の水をくんでもらって、八月でしたから暑いときでしたが、頭から水をかけてもらって、その商人のかたから洗礼を受けた。あのくらいの年ごろは、非常に感受性が強いんですが、うれしくて夜も寝られないくらいでした。わたしは、それまでにいろんな空想を持っておりました。北海道に行ったのもそれのひとつ……。

国賊なり、売国奴なり

編集部　事業欲ですか。

五十嵐　もっと大きな名誉。そこで全部の自分のいろんな計画を投げ捨ててしまって、そして、わたしはこの愛の深いキリストさまのご奉仕におむくいするために、生涯伝道したいと、こう思いました。そして、神学校にはいりたいと思って東京に帰ってきました。

わたしの父は少し漢学をやる人で、極端な国粋主義者だったんです。わたしは、新潟ですが、わたしがヤソ教になったというので、いなかから手紙をよこして「なんじは国賊なり、なんじは売国奴なり、親にあらず子にあらず、勘当す」。そこで神学校にはいるのはおじゃんになった。そこでさしあたり生活問題がありましょう。これも神さまの導きだと思いますが、あるかたのお世話で三越にはいったんです。その時分は三越といわないで三井呉服店といった。

編集部　それは何年ごろですか。

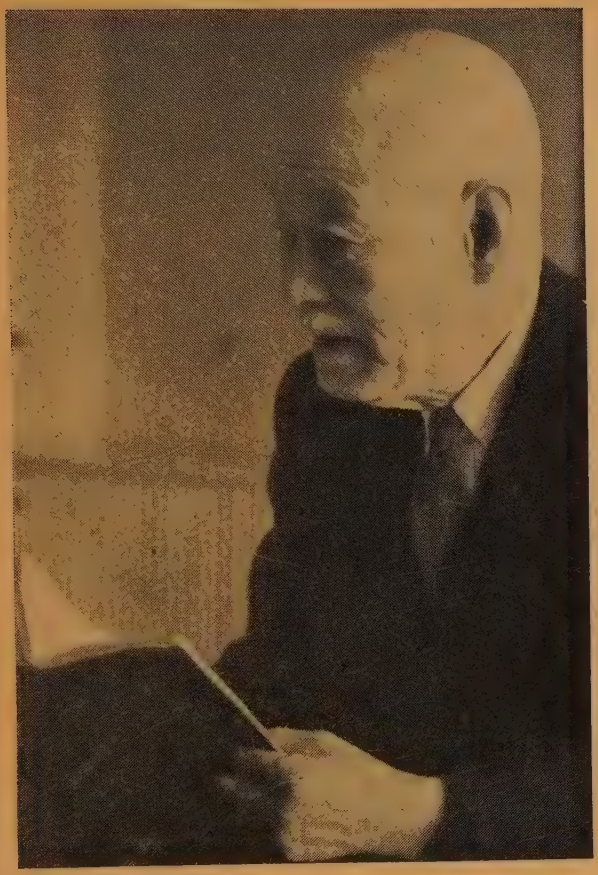
五十嵐　洗礼を受けたのが明治二八年、三越にはいったのは確か三〇年ぐらいでしたね。その時分の三越は、場所はいまのところですが、駿河町といっておりましてーいま室町といっておりますがー角店で黒塗りの土蔵造りの大きな店でした。そしてお客さまはきものを脱いで、うえに上がって買い物をしておられましたね。川柳にこういうのがありました。「駿河町畳のうえの人通り」。その川柳のように、とても広いお店でして、百畳か二百畳敷けるでしょうか、その時分にわたしは三越にはいったんです。

ところがその時分の三井呉服店は、ごく手固い旧式なお店でして、わたしのような放浪生活をした者には窮屈で、とてもおられなかったんですけれど、それは信仰にはいりましたので、ここのお店にはいったのも、神さま

〈わが信仰の生涯〉

伝道は信徒の力で

――クリーニングは生活の手段・目的は伝道――



（白洋舎創立者）五十嵐健治

すっぱだか、井戸水で受洗

編集部　先生の信仰にはいられたのは、青年時代ですか。

五十嵐　一九才ですから、ハイティーンですね。北海道の小樽のある宿屋で、中島佐一郎さんという商人のおじいさんに出会ったんです。そのかたが熱心なクリスチャンでございまして、そのかたからお話をきき、非常に感激いたしまして、一週間ぶっ続けでききました。わたしの家は仏教でして、仏壇と神棚の下で育ったものでたし。外国の宗教などということは非常にきらいでした。青年時代によく集まって演説会のまねなんかしますと、わたしの題は「ヤソ教を撲滅せよ」。それほどキリスト教ぎらいだった。それが聖霊の導

りましてね。

編集部　どうして洗濯屋を？

五十嵐　わたしは小樽で洗礼を受けて、帰り道に、函館で旅費かせぎに洗濯屋の水くみをやった。わたしとすれば、神さまの導きだと信じている。白洋舎というのは、ちょっとの間、洗濯屋の水くみをやったことが動機になった。

それからもう一つ、わたしの考えは、よそに勤めておれば自由はききませんが、自分で独立で営業するんですと、いったい福音を伝えるということとは、必ずしも教会に限らない。商店であろうと工場であろうと、とにかくそこに聖霊が臨んで、福音を伝えなさる場所は神聖な場所だ。だから、わたしは洗濯屋の工場で福音が伝えられ、主があがめられれば、そこが主のいますところだという信念をもってやりました。

編集部　最初のお店はどこでおはじめになりましたか。

五十嵐　最初は日本橋の呉服町で……。いいことには、三越の藤村さんが資本を出してくださってはじめたんです。その時分から三越も百貨店式になって、食堂もできたり、いろいろ洗濯物を三越で出してくださる。もう一つは、三越の方々がみなあと押ししてくださって、お得意は岩崎さん、三井さん、ああいうりっぱな一洗濯屋は貧弱な洗濯屋だったが、お得意はりっぱだった。それで白洋舎のすべり出しは非常によかった。

水を使わない洗濯法

白洋舎ができたのは明治三九年三月。その秋、確か十月ごろかと思いますが、文部大臣の官邸にわたしが車をひいてご用聞きにいった。そのときの文部大臣は牧野伸顕伯爵、オーストリー公使から文部大臣に就任なさってお帰りになった。その洗濯物を頂戴に出ました。その奥さんというのが、維新の功臣である大久保利通公のお嬢さんでしょう。それで牧野さんの奥さんから「ウインではいいものは水につけない洗濯をやっている。わたしは羽二重の白むくの綿のはいったものを洗いに出したら、新しいもののようにきれいにできましたが、日本ではできますか」と言われた。わたしはハッといたしました。水を使わないでー日本じゃ綿のはいったものを着たりしますから、和服などは水で洗えば台なしになる。そういう洗濯法があれが非常にいいなと思って、家に帰ってきて考えたが、どうもわからないでしょう。それから、その当時三越の笠原さんというのちに重役になられ、白洋舎の重役にもなられたかたが、蔵前の高工を出られたかたです。お伺いすると、「ぼくはわからんが、高等工業に行って、吉武さんにおききなさい。」それから吉武（栄之進・のちの工業大学学長）さんを訪ねました。それはドライクリーニングだと教えてくださって、「ぼくはよくわからんが、農商務省の山口（貴雄）技師が知っておられる」と言われた。それから名刺をいただいて、その足で農商務省ーその時分築地にありましたーをお訪ねして、いろいろ話をききました。

それから山口先生が、「実はぼくはドイツで、スピンドラというドライクリーニングの大きな工場を見てきた」ーのちにわたしも行きましたー日本に来ている西洋人、上流の奥さんがたが、たとえば皮の手袋とか、皮でできたボアとかは日本で洗濯ができないので、これをいちいちロンドンなり、ベルリンなりに出すんです。できてくると、きれいになっておりますから新品と見られて、税関で二重に税金をとられる。それは大きくいえば日本の恥だ。日本でそういうものの洗濯ができるようにと思って、調べてきたんだという話です。弟さんにやらせるつもりで念を入れて調べた。工場の青写真、カタログ、それからいろいろ見聞なさったことなど書き入れて、そういう書類がかなりたくさんあった。ところが、お帰りになって弟さんに話されると、「ぼくはそんな洗濯屋というのはいやだ。」しかたがないから、高島屋の倉庫に書類を預けてあった。そこへわたしが行った。「ちょうどいいところに来た。きみが研究するならやってくれんか、わたしの持ってきた参考書類を全部きみに渡すから」と言われて、お宅にあがっていただきました。

のご用をさせていただくためだと思いまして―当時従業員が三百人でしたが、そのうちで信者はわたしひとりです。いまと違いましてその当時はまだヤソ教といいますと、非常にけぎらいしました。けっきょく同じ年ごろの者が大ぜいいるんですけれども、仲間はずれ―変人だと思ったんでしょう、さびしいんです。

ところで、絹の反物のはいった絹倉というのがあった。その隣にもめん倉がある。絹倉というのはいちばん奥の大きな倉です。そこに妙な伝説があって、むかし番頭が小僧を責め殺した、おばけが出るというので、昼間も小僧さんは行きたがらない。行くときは友だちとふたりで行く。そんなことで人が来ないですから、夜、聖書を読むには最もいいところです。薄暗い電燈の下で、ひとりで本も読むし、聖書を読んだりしておりました。そういうような、いわくつきの場所にわたしがいるものですから、小僧さんたちが、みなおもしろ半分に集まってきます。そこでわたしがポツポツと聖書の話をしましてね、だんだんに人数が多くなりまして、狭い倉の前がいっぱいになった。

編集部　それは仕事が終ってから……。

五十嵐　夜。そうしていますと、ある晩、宿直長というのがありまして、係長以上の人が夜、監督するために宿直しています。そのありさまを見て怒りまして、なにしろヤソ教というのは、まるでかたきのように思っていますからね。その時分は、お店のことをおたなといっていまして、おたなの中でヤソの話をするなんてふとどきなやつだと言いまして胸ぐらをつかんで引きずっていって、打ったりけったりいたしました。けがはしませんでしたけれども。

そのときにわたしは、これはきっと明日になれば、暇を出されると思いました。しかし悪いことをしたんじゃない、将来のみなのためにやっている、これもやむをえないんだと思ったんです。いいあんばいに、店中の評判にはなったが、クビにはなりませんでした。のみならず、わたしから話をきいた人の中から、二、三の信者ができた。

編集部　先生は明治一〇年生まれでございますね。そのころはおいくつぐらい……

五十嵐　二二、三ぐらいだったでしょうね。不思議なことに、一三の年から三越にはいられて、三越の土台をこしらえられた藤村さんという当時の常務が、わたしのクリスチャンだということがおわかりになった。わたしが一〇年勤めて洗濯屋をするので暇をいただいたとき、あなたは資本ありますかとおっしゃっていただいて、わたしの今日の白洋舎というのは、その藤村さんのおかげを受けてできたんです。だからクリスチャンということがわかって、暇を出されるかと思ったら、反対にかえって信用された。

三越をやめ洗濯屋を開業

編集部　三越をおやめになったのは……。

五十嵐　明治三九年です。二九才か三〇才ですね。やめた理由は、あの時分三越の休みというのは月に二回で、日曜日はなかなか思うように休めない。わたしは幸い会社係をやっていて、会社は日曜は休みだから、係長の了解をえて、教会に行っておりました。

それからわたしは学歴というものがない。三越にいる一〇年間に独学で勉強しました。講義録のようなものとか、聖書の勉強をね。英国からブランドさんというかたがみえて、そのお話も伺いました。それから内村鑑三さんの「聖書研究」、あれもずっと読んでおりました。キリスト教に関するいろんな書物も勉強しました。自分が伝道したい、自分の生涯は伝道の生涯だと思っているんですから。三越はそういうわけで伝道の時間がない。遠慮しながら教会に行っているということで、独立で商売をすれば、時間も自由に使えますし、教会にも行けるというので思い切って……。

編集部　純粋に信仰的な理由でね。

五十嵐　それでやめたんです。やめるときにわたしは、藤村さんのところに辞職願を持ってまいりましたら、「あなたはここをやめてなにをやります。」わたしは「洗濯屋をやります」と言ったので、あっけにとられてお

の教会でもいいから、教会に行きなさいということを勧めました。

編集部　そのころ何人ぐらいいましたか。

五十嵐　はじめは、二〇人から三〇人、五〇人というふうに、だんだんふえていきました。それがなかなか教会にいかないですよ。教会をすっ通りして女買いに行ったり、酒飲みに行ってしまう。聖書を読みなさいといってもなかなか読まない。よくない本を読んだり、小説を読みふけったりというようなわけで、つまり根気比べですね。二、三〇年根気比べをやりました。

それからわたしは人数が多くなるようになってから渋谷に教会を建てました。自分の持っている貸家を改造しまして、なるべく従業員の人に行ってもらうようにしまして、日曜日には日曜学校もやりますし、ときどき牧師さんを頼んで話してもらう。いま多摩川に工場があるんですが、そこには三百座席の講堂を造りまして、そこでもしょっちゅう集会をしております。朝礼ということをやりまして、必ず聖書を読み、讃美歌をうたって、簡単な話をする。それから牧師さんは、その当時からしょっちゅうお願いして講演会を開きました。青山会館というのがあるでしょう、徳富さんの。あそこで、しょっちゅうやりました。救世軍の山室軍平さん、木村清松、沖野岩三郎さんもよく来てくださいました。とにかく信仰の教育を熱心にやりました。営業所は東京だけでも一〇何ヵ所かある。各営業所で集会をしまして、戦争前には社内の従業員が千五百人ぐらいいましたが、その時分牧師をやったかたが三人おられました。そのほかに外部から牧師さんが三人ぐらいしょっちゅう来られまして、やってもらいました。

ところが戦争になりまして、徴用されるでしょう。兵隊にとられるでしょう。中にうちの従業員は数が多いものですから、戦死者もずいぶんありました。それから軍部の圧迫で、大きな声で福音が伝えられないような時代がありましたね、そんなことで一時下火になりましたけれども、戦争後になりましてから、それが復興しました。戦争前はわたしたち幹部の者が先に立って指導したものです。ところが戦争後は反対で、従業員のほうが自発的にやっているんです。いま盛んですね。

編集部　いまは従業員は……。

五十嵐　二千人以上でしょう。いまは白洋舎産業ＹＭという運動がありますね。その人たちが自発的に講習会などを開いて、自分の尊敬している先生方をよんで、宿泊講習をやっているんです。この間も石島三郎先生にお願いして、二泊三日ぐらいでやりました。とにかく従業員に福音を徹底させるという方針で、いまの社長もわたしの志をついでやっております。

編集部　そうするとかつては先生のほうがいっしょうけんめいになんとか芽生えさせようと努力されたが、現在においては、半数以上の人たちがみずからいっしょうけんめい求めてやっておられるということですね。

五十嵐　ですから、うちには労働組合というのがないです。

編集部　うまくいっておりますか。

五十嵐　ある店によりまして、いままで労働組合の争議みたいなことも、まんざらないこともないですが、みな自発的に解消してしまって、いまはその必要はないですね。いま白洋舎の経営というのは、だいたい従業員が先に立っているようなもので、従業員などの意見を尊重してやっているようなもので、非常にぐあいよくやっているらしいですね。

信徒伝道の力強さ

それから、あなたがたはどういうご意見か知りませんが、わたしは平信徒が一般に伝道をお手伝いになったら、伝道というのは、非常に力強いものになるんじゃないかと思います。それというのは、わたしの体験から出た考えです。自分は教職でもなんでもないですけれども、しかし本も出させていただいておりますし、各地で招かれて話をしておりますし、平信徒の間にそういうなまなか神学生なんかに劣らない篤い信仰と聖書の知識を持っている人がかなりある。たとえば、矢一明雄さん、岡山ランドリー社長。大阪の柴垣さん。

ことしは、わたし、五月に新潟県に行きました。これは、わたしの郷里でして、郷里に伝道するということは、非常に主のみ旨にかなうことです。実際は、わたしのほうは、近ご

それからわたしは研究をはじめました。その年の三月に店を開いたが、そのほうはほったらかして、ドライクリーニングの研究に没頭した。そのために全身にやけどをしたり、従業員もやけどしたり、いろんなことがありました。やけどで半年顔がクチャクチャになってしまって世間に出られなかった。家の者もやめろといいますけれども、わたしはいろいろ経路を考えてみると、神さまの導きのように考えられるんです。洗濯屋もそうだし、ドライクリーニングもわたしが求めてやったのではないが、そういうぐあいになってしまった。神さまのみ旨だとすれば、たといやけどのために死ぬまでも続けなければならぬと思って、強引に研究をやりました。しかし、溶剤が日本にない。ベンジン・ソープという溶剤の中で使う石けんがない。そういうようなものを作るにも、非常に苦心しました。幸い高工に連絡がありましたから、吉武さんから高工の助教授をしておられたかたをよこしていただきまして、しょっちゅう協力して研究してくださいました。それから機械ができて、品川に工場ができたのが明治四〇年です。それがドライクリーニングのはじめですね。もっとも、神戸あたりで機械設備もなにもなくてやっているかたもあったらしいんですがね。工場らしい工場を持ってはじめたのは、わたしがはじめてです。そんなことが白洋舎のはじめですね。

編集部　それが白洋舎発展のもとになった……。

五十嵐　なかなか新しい仕事というものはうまくいかんもんでしてね。なにしろ世間ではご存じないでしょう。わたしはドライクリーニングした皮手袋なんか、いちいち実物を持って一軒一軒回って歩いた。りっぱなお屋敷ですがね。やはり信用なさらない。それを知らせるのが相当に苦労でした。そのうちに経済の方面で苦しいこともありましたし、家内なんかは小僧さんに正月着せるお仕着せの金がないので、お嫁にくるとき持ってきた着物を質屋に持っていって、いくらでもないですが、こしらえてきたようなこともあるんですし……。

まず家庭から伝道

編集部　ご結婚はいつごろでしたか。

五十嵐　わたしが二五のときですから、明治三四年か五年ですね。それからさっき申したように、わたしはクリーニングが目的でなく、クリーニングというのは生活の手段、目的は福音を伝えるという伝道にあった。それには福音を伝えるというのは、まず自分の家からはじめなければならぬ。わたしの父はそんなようなわけで、わたしを国賊扱いにしているでしょう。

編集部　勘当はとけない。

五十嵐　まだ。それが不思議なものでね。神さまの摂理で、わたしの家は地方の酒を造る家なんです。父は村長をしたり、県会議員をしたりしておった。それが政党の争いで、衆議院議員の選挙の候補に立ちましたときに父は自由党で相手は改進党です。いなかは党派の争いというのは激しい。反対党の壮士がうちの酒倉に夜、忍び込んで一酒を大樽に何本も造ってある一その酒樽の飲み口をみんな抜いていってしまった。だから造った酒はだめになった。それがつまずきで家運が傾いて父はすっかり名誉を失なった。それが二〇年ぐらい経ってからですね。わたしはその間父をキリスト教に導けない。しかしそんなことがあって、父もすっかり考えを直していたところに、東京にきて、うちに泊まっておりました。その間にわたしは救いました。これもやはり神さまの導きですね。父は涙を流して「健治、わたしのために祈ってください」と言いました。亡くなるときは、わたしをよんで、「わたしはおまえの神さまのところに行きますから安心しなさい」と言いました。

母もそうです。母も七十で東京で亡くなりましたが、亡くなる二、三年前から教会に行きまして、雨が降っても、雪が降っても、熱心に教会にまいりました。そんなようなわけで、父も母も救っていただいたということが、わたしは非常な喜びで感謝しております。

従業員と根気くらべ

それからこんどは従業員でしょう。世間の人に話すると同時に、うちの人に話さなくちゃならんものですから、従業員にはまずどこ

そういう話がだれでもできるんですよ。

聖書を舌で読む

それから、もう一つの伝道は、聖書を読むこと―聖書を読むことが伝道だということはちょっとおかしいように感じられるかもしれませんが、世の中の人というのは、聖書はむろんわからないし、読みもしないでしょう。聖書のありがたいことを知っているのは信者だけ。その信者がろくろく聖書も読まない。聖書を棚に上げておいて、ただ日曜日にほこりを払って出すぐらいのこと。そのようなことでは、世の中の人はますます聖書は読まない。信者が読まないものは、世間の人が読むわけはない。信者が聖書のおことばを尊んで、そして聖書を尊重しておれば、まわりの人もそれを見たりきいたりして、それじゃわたしたちもひとつ読んでみようかという気になる。信者が聖書を読まないということは、世の中の人につまずきを与えると同時に、読むことは間接ですが、よい伝道です。

わたしは信者になってから、聖書はずっと読んでおりましたが、読み方は、たいてい自分が好きそうなところを読んでいるにすぎなかった。ところが、昭和四年にこういうことがあった。わたしは銀座の聖書協会―その時分米国聖書協会といった―に行きまして、そこに大竹さんというかたがおりまして、そのかたと懇意だし、ときどき遊びに行く。そうすると聖書協会の店先に大きな写真が出ている。それは、ひとりの人が聖書を舌でなめている写真です。それで「なんですか」とききますと大竹さんは、「これはアメリカのマック・ファーソンという鉱夫だったが、あるとき、ダイナマイトが破裂して、両手両足をなくし、目も失明してしまった。そして、ただ胴体だけが残った。その人はとにかくかろうじて生命をとりとめたが、気がついてみると、自分は不具になってしまった。そのときに日曜学校で教えられたことを思い出した。そうすると、どうしてもこれは聖書を読みたいと思ったが、目がつぶれているし、普通の盲人ならば点字で読むこともできるが、手がないからそれもできない。それで、自分でくふうして点字を舌で読むことを研究した。熱心というものは恐ろしいもので、舌でもって聖書を読めるようになった」という話だった。

それをきいてわたしは胸を打たれたような気がした。わたしは手足も普通であるし、目も見える。聖書をなおざりにして読まないでいた。ほんとうに申しわけない。そのときはわたしは泣きましたよ。しかも聖書というものは、わたしたちにおつかわしになった神さまの手紙だ。しかも、それはただの手紙でなく、キリストの血をもって書かれた神さまの手紙だ。わたしはこういうものだということを信じなさいということをいって、手紙をくださった。親からもらった手紙を見向きもしなかったら、ずいぶん不孝な話だ。まして神さまがそれほどの犠牲を払って、その手紙をわたしたちにくださったのに、生涯の間読み通さないということは申しわけない。やがて神さまのみ前に出るときに、言いわけが立たないと思いました。わたしはそれから、いままで拾い読みをしていたのを読み方を変えて、とにかく創世記のはじめからヨハネの黙示録のしまいにいたるまで、ずっと一貫して読むということを自分で決心をしました。それから、その当時は一日に一二、三章ずつぐらい読みましたね。

そうして読んでいるというと、家族の者がみな読み出してきた。子供も読み出してきた。こんどは親戚のしょっちゅう行き来する者もみな読むようになった。そのときわたしは考えた。これは聖書を読むということは棒読みでは役に立たないが、とにかく読むということは非常に大事なことだと考えて、少なくも毎日一章以上読もうという、そういう同志のかたをお誘いすべきだと示されて、一章会というのをつくった。会員が全部で五百三十人になりました。昭和四年のことです。わたしの家内なんか朝、聖書を読まないうちは人に会わんということにしておりました。一昨年亡くなりましたが、亡くなるまでやっておりましたね。

そういう聖書を読むこと―聖書協会は非常に聖書の宣伝をしておられますが、読むほうの宣伝をしなくちゃならんと思っております。これも非常に大事な伝道の一つの方法じゃないかと思います。

ろクリーニング組合という組織ができています。こんどいきましたのは、高田と長岡と新潟。この三つの地方の組合の主催。だから同業者伝道というのはそういう便宜がある。高松に行きますのも、高松の組合長が主になってやってくれます。行きますと四国の高知あたりからも来られます。だから、同業者伝道というものは、少し一般のかたが考えてくださったらいいんじゃないかと思うんですがね。それから人を集めるにたいへん便利がある。お互いに名まえを知り合っていますしね。親しみがありますし、あまり固くならないできいてくれますしね、いいですよ。わたしは四国に行きますと、高松の米谷好正さんというかたなんかは、家中酒飲みで、しょっちゅうけんかしていたんです。それが大阪の講演会に来られてから、四国に帰られて酒をぴったりやめてしまった。そればかりでなく、いまは手紙がきていますが、家中が幸せになって洗礼も受けまして、事業にしましても非常に幸いな状態ですよ。わたしもこんどはそんなような点で喜んでまいるわけです。

編集部　そうすると、先生はいまクリーニング業にいっしょうけんめい没頭されるというよりは……。

五十嵐　わたしは昭和一六年に社長をやめまして、せがれに譲って、それからこっちは、こんな寂しいところ（神奈川県茅ヶ崎）にはいって、朝から晩まで勉強―勉強というのはだいたい聖書に関するものです。それから、この土地で各教会の奥さん方の集会がある。終戦の翌年からはじめていますからもう一〇年。金曜日にいきまして、聖書の話をずっと話しておりますが、このごろからだが疲れるものですから、日曜ごとに教会にいきませんが、できればなるべく教会に出たいと思っています。そんなような生活を昭和一六年から約二〇年ここでやっております。会社のことで重大なことがあれば相談にくるぐらいで関係しておりません。

編集部　先生が洗礼をお受けになった当時に持たれた伝道をなさろうということが、期せずしていまになって実現したわけですね。

五十嵐　わたしは伝道するような資格もないし、力もありませんが、とにかく信仰をあかしするということは―聖書の講義をしたり教義を説いたりすることは、相当の素養のあるかたでなければできませんが、それでも主から受けたお恵みのあかしをするということは、だれでもできることだと思うんです。ですから、平信徒ということばはわたしはきらいなんですが、神さまの前には平信徒も教職者もない、みんな平等なものである。けれども途中から、教会の歴史をみるとああいう特別の階級の型ができてしまっている。普通の人は教会で話ができないというようなこともある。それが、いろんな点で教会にもいいところがありますが、しかし、だれでも信仰のあかしをする責任がある。それが、もう少し一般の信者の人にそういう考えを与えるように、教会の教師のかたが、そういう考えをしてくださるほうがいいんじゃないかと思います。そうすれば教会のためにもなるし、また牧師さんのお手伝いにもなることですからね。

伝道の心がけ・謙遜

編集部　先生は伝道なさる場合、どういうことを心がけておられますか。

五十嵐　第一に自分が謙遜にならなければならぬということ、自分は罪人であって、もと罪人であった。現在も将来も主の前において罪人である。そういう自覚をもつことが伝道するうえに非常にたいせつであると自分で思っております。だから伝道に行きますときに、人を教えるような、そういう思い上がった考えを持っていてはいかん、仕えるという意味でいかなければならぬと思っているんですね。それから伝道といいますが、伝道にもいろんな方法があって、わたしはこういうことを話しするんですよ。一般のかたがキリスト教というものをごぞんじないでしょう。知らないで毛ぎらいしている。だから、それをキリストの福音というものはどういうものかということを、やさしくわかるように話して、そして近所に教会があるならば、お子さん方を日曜学校におやりなさい、ということを勧めることが、わたしはりっぱな伝道だと思いますね。いまの一般のかたは、それを勧めていらっしゃるかどうか知らんが、信者はみな

2　身代わりの資格

この場合になにがほんとうの身代わりになるのか。この点について考えてみますと、第一は日本の神道などの方法であります。

お人形を立てて、それに人間の罪を、はらいたまえ、きよめたまえと祈って、きせ替えをするわけです。たとえば東京芝の浜離宮ですが、あすこは毎年一度、国民の罪の身代わりのため、天皇の衣服を立てて、それに罪をふり替えて、浜離宮から品川の沖へ、さらに遠い遠い太平洋の彼方に流しやるところでした。

実は生きた天皇自身が、国民全体の罪をせ負って、毎年身代わりになって流されてはたいへんですから、衣服を人形にかけてそうするわけでした。

次に世界の各地にいまも行なわれているのは、動物を祭壇に上げて、これを殺して、いわゆるいけにえ（犠牲）にする方法があります。

これは人形とはちがって、われわれの罪のために、実際に生きた動物が殺されるのですし、殺されるときは泣き叫ぶし、血は飛び散るのですから、実に深い感動を与え、ほんとうに自分の罪のために殺されるのだとの、切実な思いを与えます。だから生命のない人形による身代とはたいへんなちがいがあります。

動物犠牲からさらにすすんで、人間が人間のために身代わりになること、これは昔の刑法などでもよくありました。身代わりになって、佐倉宗五郎が磔殺されたことなどを思い出しますが、こうなると長くその土地の人々が、神さまのように尊敬するのも、無理はないと思います。

しかし、ここでわたしは結論を急がねばなりませんので、以上の方法とくらべて、キリストの十字架の身代わりが、なぜ絶対に必要であって、これ以外にほんとうの身代わりはないことを、話したいと思います。

人間の身代わりとしては第一に、人形や動物よりも、人間でなければなりません。第二に人間ならだれでもよいかというと、そうではありません。罪人の身代わりですから、罪のない人間でなければなりません。この点になりますと、わたしの母がどんなにわたしを愛するからとて、わたしの身代わりになる資格はありません。刑法などの罪なら、昔から身代わりにもなった例はありますが、ことがらが神に対しての罪となりますと、人間という人間はみんな罪人であります。そのために他人の罪の身代わりになる人は、罪を犯さない無罪者でなければなりません。

そのゆえに、神より来たって人となったイエス・キリスト、この罪を犯さなかったイエス・キリスト以外に罪の身代わりになる資格をもっている人はないのです。（この点については第八回「神はここにいる」をご参照ください）

第三にたいせつなことは、どんなにイエスさまが身代わりの資格をもっているにしても、自発的に喜こんでわたしたちのために十字架にかかって、身代わりになってくださらないならば、真の犠牲とはなりません。

動物は殺されるとき人間と同じように血を流して、死んでしまいますが、犠牲になる心はもっていません。むしろ殺されるときは逃げようといたします。それからなぜ殺されるかという理由を知りません。それではほんとうの身代わりとはなれませんでしょう。

イエスさまは、無罪者でしたのですが、わたしたち罪人のために、すすんで喜こんで身代わりになり、その意味をよく知っておられました。

それですから十字架の上で、ご自分を殺すものに対しましても、「父よ彼らをゆるしてください」とお祈りしてその赦しを願っているのです。十字架上のイエスさまこそ、わたしども罪人にとっての唯一の救主です。

最後にわたしはいま一つお考え願いたいのは、わたしたちは罪を犯して悪いことをした、後悔もし、反省もし、さらにすすんでは神さまにおわびもするのです。しかし、わた

〈キリスト教のいろは〉〈第一二回〉

これまでの総まとめ

島村亀鶴

おわりに

キリスト教のいろはも、今回をもって終ることになりました。初めから読みなおしてみますと、たいせつなところが欠けていたり、脱線したところがあったりして、これがキリスト教であると思われると、こまります。

砂糖屋の門を通って、ちょっとその匂いをかいだようなもので、キリスト教はこれからだと思ってください。決してこれで卒業したと思わないでください。英語で卒業式をコンメンスメントといいます。これからはじめるぞ！という意味だそうです。読者の皆さんも、これからキリスト教をしらべてみよう、信じてみようというお考えになってくだされば幸いだと思います。

1 救いの道

キリスト教といえば、十字架をすぐ思いますが、その十字架について、もっとくわしく書いておくはずでしたが、それが足りなかったので最後にそのことを申したいと思います。

ちょうど一二月になりクリスマス季節になりますと、クリスマスセールやデパートのクリスマスがにぎやかになり、「教会でもクリスマスをしますか」というような笑い話が起こるほど、クリスマスは一般化しました。

「けんかした牧師にあいぬクリスマス」

「顔あげてみな歌う子やクリスマス」

「クリスマス妻のかなしみいつしかもち」

などという俳句が生まれるほどになりましたが、その内容がよくわかっている人は少ないと思います。ただイエスさまのご誕生日だというくらいで、「このイエスさまは自分を救うために生まれた。その救主イエスの誕生を祝うのがクリスマスだ」と知っている人は少ないでしょう。

ところで、救主として生まれてどういう救いを与え、それをどういう方法でやりとげたかということがわからないと、クリスマスのほんとうの意味をさとることはできません。

クリスマスは、ただ神の子イエスが誕生したことのお祝い日ではなくて、罪ある人間のために救い主としてのわざを成就してくださったから、その救主のお生まれになったことを感謝してお祝いする日です。

その救いの方法について、キリスト教は世界のすべての宗教のうちで、いちばん徹底したやりかたをしています。

どの宗教でも、罪のすくいを求めるためには、最後のところになりますと、「人間は自分では自分の罪を、つぐないえないもの、帳消しにする力をもっていないもの。難行苦行や、自力の罪ほろぼしでは、とてもまにあわないものだ」ということを知っています。

そこで自分以外のもので、自分の身代わりになるものによって、救いを求める、こういう深い願望が起こります。これは自分で罪ほろぼしができなければ、しかたがない、それまでではないかと、言ってしまえない、どうしても罪を自分と絶縁したい願望、また罪のための良心の深い責任を感ずるからであります。このことを、ほうっておいては自分の全存在が、安心して生きてゆけないものだとの実感から、こうなるのです。人がまじめになれば、必ずそうなるはずです。

わん。
我は聖霊を信ず。
聖なる公同の教会、聖徒の交はり、罪の赦し、身体のよみがえり、永遠の生命を信ず
アーメン。」
これとは別に毎日の生活をどうやってゆくかについて「生活綱領」というのを、わたしたちの日本基督教団でつくっていますので、これをごらん願います。
われわれは、神の恵みにより、父と子と聖霊との名において、バプテスマをうけ、主の体なる教会に入れられた者であるから、すべての不義と迷信とをしりぞけ、互に主にある兄弟姉妹の交わりを厚うし、常に神の栄光のあらわれるように祈り、つぎのことを相共につとめる。
一、教会の秩序を守り、その教えと訓練とに従い、聖日礼拝、祈禱会その他の集会を重んじ、聖餐にあずかり、伝道に励み、時と財と力とをささげて教会の維持発展につくすこと。
二、日々聖書に親しみ、常に祈り、敬虔、純潔・節制・勤務の生涯を全うすること。
三、家庭の礼拝を重んじ、家庭の和合を尊び、子女を信仰に導き、一家そろって神につかえること。
四、互に人格を重んじ、隣人を愛し、社会の福祉のために労し、キリストの正義と愛とがあまねく。世に行われるようにすること。
五、神のみ旨に従って、国家の道義を高め国際正義の実現をはかり、世界平和の達成を期すること。
願わくは神、われわれを憐み、この志を遂げさせたまわんことを。アーメン。
この「生活綱領」には、教会生活、家庭生活、対隣人生活、国家国際生活についての注意が出ていますが、まえに申しましたように、「キリストの心を心として」いっさいの生活をするのが、眼目になっています。それですから、「キリスト教のいろは」を終るにあたり、わたしは「キリスト教はキリストである」といいたいと思います。

4　生活の中心

みなさんが教会においでのときは、ぜひ自分の聖書をもっていってください。それから教会へ行きまして説教をきくときは、自分を説教者より高い地位において、これを批評しようとしないで、「今日、神さまの声をきかしてもらいたい」との要求をもっていってください。自分のもっている問題について、イエスさまは、どうせよというだろうか？　その説教をきいたあとで、自分はどうすればよいか？　と実際生活にあてはめて実行してください。
わからないときは、集会のあとで牧師や教会員のかたがたに、親しく話し合ってみてください。
なにはともあれ、教会はクリスチャンの生活の中心ですから、教会へ行くことからはじめてください。信仰生活のいろはは教会へ行くこと、その最後も教会へ行くことです。
それから教会のないところですと、おこまりでしょう。そのようなかたは、とくに聖書をお読みになり、わからぬところは、どこかの教会にお便りをしてください。喜こんでお答えもしご指導もしてくださると思います。
はじめてのかたでどうして祈ってよいか、おわかりにならぬかたがありましたら、「イエスさま、わたしに何々してください」「イエスさま、わたしは何々したいと思います、まちがわないようにお導きください」と、かんたんに心をこめてお祈りになるとよいと思います。いつでも、どこでも、なにごとでも、「イエスさま、わたしは……」といい初めるのがよいと思います。
祈りはわたしたちの生涯つづけねばならぬ神との会話です。年の終りですから河野進牧師の詩を書いてこの講話を終ります。
一日の終り　最大の悔は　祈の足らざることである　生涯の終り　最深の悔もまた祈の足らざりしことであらう

したちの反省や後悔やおわびは、ほんとうは浅いもので、とても神さまの満足のゆくような、おわびはできるものではありません。

ただ初めから神とともにいまして、そして人を救うために人として生まれて、この人間社会に生活されたイエスさまだけが、神の深いみ心をご承知なされておられるわけです。

ですからこのイエスさまにしてはじめて、神のみ心にかなったおわびをすることができるわけで、罪のためには、どうしても罪のない人間、すなわち神でありながら人になったイエスさま自身でなければ、ほんとの罪のおわびはだれもできないわけでした。

父なる神は、このひとり子イエス・キリストの身代わりのゆえに、わたしたち罪ある人間の罪を、すっかりゆるしてくだされるわけです。

くりかえして申しますが

(一)罪人の身代わりは人間でなければならぬ
(二)それは罪のない人間でなければならぬ
(三)それは喜こんで自発的に死んでくれるのでなければならぬ
(四)それは神さまの気にいる(満足を与える)

身代わりでなければならぬ

この根本的な条件をそなえた身代わりとしては、イエス・キリスト以外に、だれもありません。わたしたちキリスト信者はみなこのように信じているわけです。世界に昔から多くの宗教があり、現在日本でもたくさんの新興宗教があるわけですが、罪の救主としての条件を完全にそなえている者は、イエスさま以外にありません。キリスト教の絶対性を、わたしが主張いたしますのも、やはりここに土台があるからです。

3　親分と子分の生活

さてキリストを救主と信じている者を、クリスチャンといいますが、これは実は外部の人々がつけた名まえでした。「あつらは、キリスト、キリストと、なにかにつけていっているやつらである」「あいつらは、キリストのものであって、われわれの仲間ではない」「キリストにこりかたまっているヤツである」「あの連中はキリスト党で、その親分はキリストである」こういううわさがもとになって、クリスチャンという名まえが起こったのでした。(使徒行伝十一章二六節をごらんください)

親分はキリストで、その子分は信者である、といったほうが、まことに良くキリスト信者の立場を表わした言いかただと思います。

親分キリストのためには、その身命をすてることをも、いとわない。親分の名まえのはずかしめられるようなことは絶対にしない。食うにも飲むにも、親分キリストのためになるようにと努力する。

その親分の深い愛情をみんなの人に知らそう。この仲間をふやして、悪党でなしに善党を多く社会につくろうと思って伝道する。

自分勝手なことをしてまちがわないために親分の言いつけはなにか、今日はどういう命令がくだるか、それを知るために、み旨をうかがう、これが毎日毎夜の祈禱生活となるわけです。

みんなが集まって来て、互にはげまし合い、練成をする、苦楽をともにする。そういうことをキリストの前で行なう。これが教会の礼拝となり、集会となってくるわけです。

それゆえに生活の信条があり、共同の信仰告白をもっています。

昔から二千年の間、伝わっている信仰告白に使徒信条というのがあります。これに神をキリストを教会を、どう信じているか、その基本を書いてありますから、ご参考までに、お知らせいたします。

「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず
我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生れ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府にくだり、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に昇り、全能の父なる神の右に坐したまえり、かしこより来りて、生ける者と死ねる者とを審きたま

りません。警官に立ちあってもらって話をすすめますが、こういうとき、両方がコウフンしてますから、しずかに先方の話をよくきいて、話しあってくようにしないと。

石島　しかし、どうですかね、やはり自分の運転手のほうを……(笑)

平山　それが人情ですからね。(笑)しかし、こっちが話をうかがいましょう、と出れば相手も、気を静めて、話に乗ってきます。夫婦のあいだでも、そういうことがありますね。

家庭で

平山　わたしの家庭では、もう、何回となく失敗してるんですが、たとえ、正論をはいても、コウフンして言うと、むこうは受けいれてくれないですね。やはり、柔和なことばで……。

石島　正論を言ってるつもりで、じつは、感情をブチまけてる。(笑)

石井　ハラが立ったときに言うと、思ってもいなかったヨケイなことまで言ってしまいます。時をおいて、あとで説明すれば、わかるのに。親と子のあいだでも、そういうことありますから、まして他人がはいると……。

石島　石井さんとこは、おヨメさんある？

石井　ええ。来て七年になりますが、息子よりヨメのほうが言いやすいくらい。むすこに、おカネがないって言うと、計画性がないからだ、なんて言われますが、ヨメは、ヘソクリがあるからなんて、だしてくれます。(笑)わたし、自分で、シシュウの仕事もってますから、あさ目がさめると、仕事のことを考えるだけで……。それに、自分のほうがアラがあるんですから、ひとのアラさがすなんてことは……。

平山　ハラたてて、荒々しく言っちゃいけない。セガレもヨメも家にいますが、自分にいちばん近いものに、ちゃんとつとめなければ。そとでうまいだけじゃ。わたし、妻には、ありがとう、と言えなかったのですが、このごろになって、やっと、言えるようになりました。

石島　円熟してきた。(笑)ぼくなんか、若い人が、妻君に、ありがとう、なんて言ってんのきくと、なんてトロイやつだろう、なんて思うほうですね、まだ。(笑)

職場関係

長谷川　ぼくらは、仕事が仕事ですから、とてもことばが荒くて、知らない人がそとからはいってくると、ケンカでもしてるかと誤解するほどです。ぼくは、ここで〈悪いことばV〉というのは、表面的なことじゃなくて、その背後に、相手をきずつけるような、敵意をひめているような、そういうことばじゃないかと、思いますね。

平山　ひとにオベンチャラ言ったりすることは、つづきません。

石井　ほめるところはほめ、悪いところはハッキリ言う。

長谷川　組合の団交のときなど、どうかと思うんですが、はじめからケンカごしなんですね。組合では、相手を敵と考え、向こうでは、いいかげんにその場しのぎをやろうとする。ほんとの話しあいにならない。ぼくも、団交に行くと、はげしいことばをつかっちゃいますがね。

平山　アメリカでは、労資の言いぶんが対立すると、キリスト教の機関が出ていって、信仰的に調節するということですが、日本ではおくれているような気がしますね。

石島　中労委なんかがありますがね。

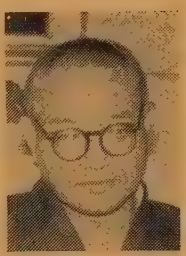
平山　こないだ、松川公判の前に、仙台に行ったんですが、労組の人たちが集まっていて、もし有罪の判決だったら実力行使だという気配がみなぎってましてね。いまはもうなんでも力で解決するという……。だから、長谷川さんのようなクリスチャンがいて、正論でいくことが大事ですね。

石島　力関係だからね。ときとしては、まと

《聖句をめぐる座談会 (12)》

悪いことばを語るな

(司会) 石島三郎



【出席者】

平山万吉(59) 菓子問屋
石井ミヨ(53) 主婦
小田純子(29) 学生
長谷川治一(24) 公務員

【聖句】

「悪いことばをいっさい、あなたがたの口から出してはいけない。必要があれば、人の徳を高めるのに役立つようなことばを語って、聞いている者の益になるようにしなさい」(エペソ人への手紙四章二九節)

年だから

平山 〈悪いことば〉とありますが、というのを、悪いというんでしょう?

石井 人をおとしいれたり、人に悪い結果をまねくような、そういうことばじゃないでしょうか。自分の経験ですが、近所に、ひとりぐらしの婦人がありまして、その人が病気したとき、お世話しました。ところがそのかたは、近所の奥さんに、わたしについて、悪口をおっしゃった。それも、ウチのものを盗んだ、とかなんとか、ずいぶんひどいことを……。自分では、つくしたつもりなので、つよい打撃をうけ、ひと晩ねむれないほどハラがたちましたが、年が年ですから、じっとガマンしました。こどもじゃないんですから……。

石島 よくあるんだな、中傷して、人と人とのあいだを裂こうとするような……。

長谷川 石井さんは、年だから、その人に言わなかったって言いましたが、それは、世間的にまずいからガマンしたことでしょうが、ぼくたちは、そういう解決のしかたしませんね。ハッキリ言ってしまう。そりゃぼくらだって、言ったってしょうがないと思うときは、だまっていますけど……。

石島 年だから、というような考えかたにもいいところがあると思うけどな。

小田 学校で、仲間の集まりがあって、自分たちとむかしの人たちとのちがいを話したとき、むかしの人は一応なんでもしたがってきたけど、いまの人は理論だててチャンとやる。これは、いいことと思います。だから、世間ていでだまっている、というのは、いけないと思うんですね。

平山 わたしも、年だから、と考えるほうですけど、やはり主張すべきことは言うのが必要ですね。

石島 でも、長谷川君だって、いまちょっと言ってたけど、だまっていることもある。

石井 それは、人によりますね。わかってくれる人なら、なに言ってもいい。

平山 性格がありますね。いちいちとりあげて言うに足りないこともありますし……。

石島 黙殺する。(笑)

はなしあう

平山 しゃくにさわって言うのは、効果ないですね。うちの自動車に、さいきん、事故がヒンパンにある。運転手には、かならず報告するように言ってあるんですが、ウチの運転手は、相手が悪いという。その話だけ一方的にきいて、おこって相手にたいすると、相手もおこっちゃって、話がまとま

…。そういうふうにキリスト教がひろまったのは問題だと思います。

平山　へたくましさ〉には、いろいろ意味があると思うが、よく働き、職場をよくし、地の塩となっていくようなたくましさがなければなりませんね。

長谷川　クリスチャンは、飲まず吸わず、悪いことばを語らず、人につかえ、というように世間の人にみられ、自分たちとちがうというふうに受けとられているんですが、クリスチャンは、みんなとおなじように生活していながら、最終的にはちゃんと神につながっている、そういう生きかた。

小田　積極的な……。

長谷川　ぼくらは、ふつうの人間です。ひとのカゲ口いうこともあるでしょうが、それで信仰がどうこういうのでなく、人間としてドロくさく生きる。そういうことすると神から離れるというんじゃなく、ちょうど子ネコが母ネコにくわえられてるみたいに、神にとらえられている。

石井　わたし、たくましくというのは、キリストを感じ、苦しみに負けず、一心に生きることだと思います。もう二〇年も前戦争のはじまるころでしたが、主人は職がなく、まずしくて食べるものもない。でも、明日のことをわずらうなと信じていましたが、そのとき、雨のなかを、仕事をたくさん持ってきてくれた人がいました。ふしぎだ、考えられないことがあるんだ、と思って、それからキリストを信じることは、ほんとに力づよいことだと思って……。

ことば

平山　カトリックの修道院では、尼さんたちあまりしゃべらない。話すと罪をおかすといって、ことばをつつしんで、神に従う。たとえば、修道院に入れてほしいとたのみに行くと、だまって、水を一ぱい入れたコップを出して、木の葉を一枚うかべ、もう一枚入れると水があふれる、これ以上入れるのはムリだ、ということをしめすそうです。語ることが聖別されるのもだいじですが、ことばをつつしむこともたいせつなんだと思いますね。

石島　どうも、それじゃ、消極的だけど、ことばがハンランしすぎてるからね。

小田　わるいことば、ということを、内容的に考えていくと、カンシャクを破烈させたりするほうが、いいと思います。爆発するのなんか、まだゆるせる。

石島　ここの〈悪いV〉というのは、〈くさったV〉という原意をもってる。人間らしいにおいの出ていないことばは、人間のことばとしては、くさってる、生きてない。いいことを言って、ひとの徳をたてる、そんなことばかり考えてるの、味気ないな。

小田　不自然だと、うまくいかない。

平山　やはり、ことばも、だんだん聖別されると言いますが、修練されて、このことを言っていいかどうか、言うにしてもどう言うか、それを考えるだけの、心のおちつきがだいじじゃないですかね。人間みな罪があるのですから、みたまによってみことばを示されなければダメだと思いますね。

石島　茶のみ話にでもなんでも、信仰のはなしが出るというの、うっとうしいな。(笑)

小田　ふつうの話ができないものかな。

石島　おもしろい、といっても、おどけるようなことじゃなく、人間としてのおもしろさ。りっぱな人にちがいないが、いっしょにお茶のんでても、さっぱり心からくつろげない、人間らしい魅力が感じられない、そんな人いやだな。聖書のことばどおりやる人間は、おもしろくないということになりそうだ。(笑)

平山　じょうだん言ったり、雑談をたのしんだりすることではなく、もっと根本的なこと、悪意をもって人に対するようなこと、それが、わるいことばなんでしょうね。

もに話ができないこともあるでしょう。

長谷川　個人的にはどう思っても、その場にでると、権力と権力がぶつかりあっているんで、そのなかにまきこまれてしまう。

石島　組合用語なんか、おなじ調子だけど、その場じゃ、それがいちばんピッタリするんだろうな。

「益になるように」

小田　試験のとき、ずるい人がいて、病気になったことにして休んで、追試験うけようとした。そのことを、こっそり親しい友だちにうちあけたら、その人、おこって、投書してバラすなんて……。信頼してるからそんなこと話したんですから、怒って投書するなんて考えないで、その人の益になるように、いけないことはいけないと、ハッキリ話してあげればいい、と思うんです。その場その場で、ひとのためになるようにするのがクリスチャンのつとめだから。

平山　ただしいことはキチンという。ただ言いかたはたいせつですが。ふつうは、利害関係で言わない。

小田　みんな、うまいことを考えるんです、悪いとも思わずに……。

石島　中学時代、ぼくのクラスぜんたいでカンニングした。悪いなんて思わずに……。

長谷川　カンニングやキセルなんか、おもしろ半分の軽い気持ちでやることも、あるんじゃないでしょうか。郵便局で、ぼくは、経理関係の仕事やってるんですが、一年に二〇日の有給休暇があって、病欠ということにすれば、有給休暇が浮くもんで、したしい仲間だと山へ行くことわかっていてもそれをとがめだてせずに、かるい気持ちで、病欠のあつかいにしてやります。ほんとはいけないことだけど……。

つきあい

長谷川　局の忘年会、日曜の夜に、料亭なんかでやってると、ウチの教会の路傍伝道でその料亭の前をとおるんです。路傍伝道は毎日曜で、忘年会は年一回ですから、つきあいの悪いヤツだと言われましたが、じつは、ひとりひとりが自分の生きかたをもとめてるんで、ぼくのそういう生きかたに反感はもたなかったようですね。このごろは教会で路傍伝道してないし、忘年会に出ますが、みんなどう思ってるか。とにかく、自分の信じるところをやるには、勇気がいりますね。

平山　わたしどもは、酒・タバコのんでても信者になるときは、ピタリとやめました。つきあいにくいと言われても、そのなかから、求めてくる人がぞくぞくありました。それが、われわれ青年の証しになった。軍人のときは、ひとりを守れましたが、いまは、自分の仕事してて、何十という小売店を、一年に一度は、酒をだして招待しなければならない。ふだんは、使用人にも酒をのまさないんですが。ひと晩たのしくすごしていただこう、と考えていますが、商売してると、むずかしいですね。

小田　酒もタバコも、味を知らないで、のまないんだといい気になっても、えらくもなんともないですね。だから、教会ではのむことをいけないなんて言うべきじゃない。

平山　そんなこと言う教会はないでしょう。

石島　そうでもないですよ。

小田　わたしが、そう思うのは、まだ信仰が足りないからかしら……。

たくましさ

長谷川　小さなことで、どうこういうのでなく、人間の生きることは多様ですし、もっと大きく・たくましく生きなければ……。キリスト者というと、なにか小さくちぢこまって……

のことをよく示しているといえましょう。すなわち、三五年の設備投資は年度当初の見通しを大巾に超過し、過去五年の平均拡張率の二九・四%に対して、実に四〇%の拡大テンポで増加したのですが、これは、池田内閣の高成長政策と無関係ではないでしょう。そして、このような設備投資のブームは、いっぽうで投資をよぶという形で、高成長を促進するとともに、生産と消費の間の不均等を拡大し、当面の需要に対する生産の過剰を現実化したのです。そして日本経済の危機は、具体的には設備投資の進みすぎによる輸入の超過のために、国際収支の赤字が、今年にはいって連続し、四月に二〇億ドルあった外貨保有は、一〇月に一五億ドルの大台をわるという形であらわれたのです。

そしてこのような日本経済の赤信号は、最初のうちは池田内閣の強気一本の政策によって無視され、そのため景気調整がおくれ、先にあげたような大衆投資家の悲劇を倍化したのです。この池田内閣の、日本経済への強気は、自由化という国際的試練を迎えるに当たり、日本経済を独占資本中心に、できるだけ強化しておくという長期政策からでてきたものですが、景気後退という現実は、そのような長期政策が、実は大きな困難に出会わざるをえないことを示したものといえましょう。そして危機の深刻化とともに、池田内閣も強気一本槍の政策を改め、金利、預金準備率、輸入担保率の引き上げなどの景気後退策をとるに至ったのです。

今後の見通し

さて今度の景気後退が今後の日本経済や国民生活にどのような影響を及ぼすでしょうか。第一に今度の景気後退が今まで以上に深刻な問題をはらんでいることです。最近池田首相も今度の不況からの回復には、かなりの時期がかかるとのべている。戦後の景気後退は、国家があらかじめ金融財政政策によって景気対策をたてるようになったために、戦前のような爆発的不況とはならないが、そのかわり、戦前の一〇年に対して四年という短かい周期で不況が訪ずれてきています。日本経済も昭和二四、二八、三二、三六年と、四年ごとに不況を迎えつつも、先にのべたような高度成長をとげてきたのです。ところが、不況が爆発的な形をとらないかわりに、経済の成長が本格的になればなるほど、高度成長のはらむ矛盾も大きくなり、不況も深刻なものとなっていくのです。

第二に今度の景気後退の深刻さは、国際経済との関係で、さらに倍加されています。すなわち資本主義国では、戦後の保護貿易的な経済から欧州共同市場のようなブロック化を背景とした自由貿易的経済が、一般の傾向となり、日本はその面でいちばんおくれているため、西欧や米国から自由化の促進を迫られているのです。しかも、自由化にふみきらざるをえない時期が来年とされているのですから、成長経済のかなり深刻な不況からまだ抜けだせぬうちに、激しい国際競争戦にまきこまれる可能性があるのです。このために池田内閣としては、米国との連けいを深めることによって、ブロック経済的なバックをつくる努力をするいっぽう、その背景の下に、東南アジア方面を主とする資本輸出を、積極的に実現しようとしています。ここに日米経済会議や、それに続く池田の東南アジア訪問のねらいがあるのです。

さて最後に池田内閣への高度成長政策は、景気後退と自由化という二つの困難に直面して、独占資本中心の政策という本質をむきだしにしてくるでしょう。事実すでに、公約の所得倍増政策は、むしろ物価倍増政策にとって代えられてしまっています。そして来年度の予算をみても、いっぽうで景気対策を考慮しつつも、他方では独占資本の国際競争力を強め、その安定的成長をはかることをねらっているが、これはまさに、彼らの意図する日本経済の高度成長なるものが、本質的には一般国民の犠牲に基づく一部独占資本の高度成長という性格をもっていることを示しています。さらに、これらの経済政策が、多くの困難の中で実現されていくことを思えば、最終的には憲法改悪に至る政治的反動化の方向が将来において、かなり急速に追求されることも必至となるでしょう。

（慶応大学経済学部助手）

社会を見る目

株価暴落の背景

寺尾誠

裏切られた期待

昨年から今年にかけてわが国の経済は、いわゆる池田内閣の成長ムードにひきずられてきたといえましょう。そして今年の下半期の景気後退は、成長ムードなるものが、いかに日本経済の実態とかけはなれた一面をもっていたかをはっきりと証明しました。そのよい例が、株式ブームの破綻です。すなわち成長ムードのかけ声のもとに、昨年から今年にかけての株式市場は異常な活気を呈し、今年七月一八日のダウ平均株価は一八二九円と戦後最高の水準を記録したのです。それから三ヵ月後には国際収支の赤字、金融の引締めとともに株価は一二九九円まで下ってしまいました。そして成長ムードに酔いしれて財産をつぎこんだ大衆投資家の大部分はこの暴落の前になすところなく莫大な損失をこうむったのです。

元来株式ブームとは、好景気がさらに続くことを期待して、株価が額面価格を大巾に上回るような仕方で株の取引が行なわれ、零細な大衆の資金が株式市場に殺到することをいうのですから、それは本質的に投機的な性格をもっています。そして資本主義経済のもとでは好景気への期待が、現実の経済によって裏切られる時が不況の形で必ずやってくるのですから、株式投資には慎重な計算とともに十分な経済情勢の認識が必要なのです。

池田政策失敗の本質

さて池田内閣が次のような経済政策を看板にして登場してきたことは記憶に新しいところです。すなわちその経済政策は第一に重化学工業中心の高度成長政策、第二にその高度成長の過程で生ずる産業間、企業間（農業、中小企業など）の格差の増加への対応策、第三に貿易自由化と、国際的競争力の増加の政策、第四に高度成長政策に伴って予想される社会的緊張をやわらげるための減税、社会的保障の拡充政策の四つの柱からなりたっていました。そして池田内閣はいっぽうで安保や三池の闘争によってひきおこされた階級対立をやわらげるために、減税や社会保障の拡充も含めた今後一〇年間における国民の所得の倍増を公約しながら、他方ではその公約の実現のためには、独占資本を中心とした経済の年九％の高度成長が絶対に必要なのだという形で、岸内閣退陣後の日本社会をきわめて巧みに成長ムードの中へまきこんだのです。

池田内閣のこのような政策が出されてきた背景には、日本資本主義が米、英などの先進国と比較して、きわめて高い率で経済成長をとげてきたという事実があります。そしてこの経済の高成長の基礎は戦後の日本の産業構造と技術水準の高度化にあります。とくに昭和三〇年以後の二度のブーム期の工業生産の急速な拡大によって日本は、鉱工業生産において戦前の三倍の実力をそなえ工業製品輸出では戦前の地位を回復し、今年四月には外貨保有高も二〇億ドルと戦後の最高を記録したのです。そして今年前半の異常な好景気は、このような高度成長経済の結果であり、昭和三四年にはじまったブーム期の最終局面でありました。と同時に池田内閣の成長政策がさらにこの高成長を刺激した面を見逃してはなりません。とくに三五―三六年の高成長の基本的原因が設備投資の拡大にあったことはこ

のですが、これは考えてみれば、不敬虔にも人の心の奥底を覗き込みたいという誘惑に敗けて、それを語らせようとした父親と、それに対してありったけの美辞麗句をもって応ずる不誠実な姉娘と、父と姉の不敬虔と不誠実に対して必要以上に沈黙した末娘という、どこにでも見ることのできる平凡な人間の罪の姿なのだと言えるでしょう。だが、やがて、誠実なコーデリヤを勘当にしたリヤ王は、期待をかけた姉娘たちから残酷無慈悲な取り扱いを受け、恐ろしい暴風雨の夜の荒野にさまよって、ついに発狂するにいたり、終りには父王を援けるために逆に殺されたコーデリヤの屍を抱いて、慟哭しつつ死にいたるという悲劇的な道をたどることによって、もしこのことがなかったら、いつまでも隠されていたであろうところの人生の実相に触れて、人間というものが苦悩と絶望においてさえ、いかに偉大なものであるかをわれわれの前に示すようになるのです。思うに、小さな人間は幸福と善意のさなかにあっても小さいのではないか。だが懊悩しつつ絶望しつつも魂の力量の偉大性をリヤはわれわれに示してくれるのです。

リヤ王はふたりの娘の恐ろしい忘恩を知ったとき、八十の齢を過ぎる今まで長らく使わなかった自制と忍耐を行なおうと、痛ましくも懸命になって努力する……。「ああ癪が胸に押し寄せてくる。さがれ、汝、わき上がる心の悩み、汝の居所は下じゃわい！」「おお、天の神々よ、われらに忍耐を賜りませ、われらに必要な忍耐を！」。忘恩の娘の所から、憤然として猛り狂う風雨の嚇く夜の荒野にさまよい出で、それによびさまされたようにリヤはこう叫びます。

吹けい、風よ、汝が頬を破れ！　……おお汝、天地を震動するいかづちよ、この円い、厚い地球をまったいらに打砕いてくれい！　あらゆる造化の鋳型を砕け、恩知らずを造るありとあらゆる物のたねを打潰してくれい！

われわれは、苦悩と絶望においてさえ、魂の迫力とでも言うべきものがあらわになるものだということを、この所のリヤから示されずにはおれないでしょう。『リヤ王』には、彼と全く同じように、わが子のために両の眼をえぐりとられるグロスター伯爵というのが登場してまいりますが、グロスターにはこのような、苦悩における魂の偉大性を示すようなことばはないのであります。それからまた、忠臣ケントを除いてリヤのたったひとりの随伴者となった道化者（フール）が、このときにきわめて虚無的に次のような歌をうたうのとくらべてみると、リヤ王の魂の深さ、激しさというものがさらにわかるでしょう。「ほんの小さな智恵しかない人は、ヘイ、ホウ、風が吹く、雨がふる。運を天にまかせにゃならぬ。雨がふろうが、相も変らず雨ふりとても」。リヤ王はまた苦難にあって、はじめて他人のことを思いやることのたいせつさを痛感いたします。忠臣ケントが彼に小屋にはいるようにすすめると、びしょぬれになりながら、そばにつきそってくれたフールのことを思って、「さあ、その石小屋とやらへ。やい、阿呆よ、おれは何だかおのしが不憫でならんわい」と言うのです。だが、いったんはいろうとしたその小屋に、ケントがいくらすすめても、彼ははいろうとはしなくなります。彼はこんな恐ろしい嵐の中に自分を平気で追い出した娘の忘恩を思うと、嵐が感じられなくなったからなのです。だが、それでもふたたびケントがすすめると、突然清められた愛の精神が、春の牧場を吹く風のように彼を訪ずれます。彼は優しくケントを振り返って言うのです……。

どうぞ、まあ、おのしはいって休んでくれ。この嵐がなかろうものなら、もっともっと胸苦しかろうに、この嵐が紛らかしてくれる。が、おれも入ろう……。（フールに）入れ。小僧、先きへ入れ……。ああ、住む家もない貧乏人ども……。（フールに）い

欲情と恋愛

高木幹太

1 魂の力量

自由の主体であるわれわれが、自己の持つ自由の深さにめまいを覚えることが不安というものであり、その不安が自己を、現在の自己を変化させてくれるように思える対象（異性）に向かって飛躍させるべく促す。そのときのエネルギーが情熱というものであって、恋愛はそのような人間の自由・不安・情熱と深く結びついているものである。——このように前回に申しました。思うに恋愛というものは、自己のうちなる不安が異性に向かってわれわれを情熱的に憧れさせるという側面と、異性がわれわれの前に現在してきたがゆえに、われわれのうちに不安と情熱がよびさまされるという側面と、この二つの側面の互いのからみあいの中で発生し、かつその情念を形成していくといったものであります。したがって恋愛は、異性とのかかわりにおける人間の自由と不安から由来する情熱として理解されるべきものです。そしてこのことは、人間の魂の偉大さ、——魂の偉大さということは自己のうちなる自由の深さにその人の存在がどれくらい動かされているかによって決まるものですが、——その偉大さに応じて、恋愛というものが深く激しいものとなる場合と、そうでない場合とに別れるものであることを暗示するものです。このことを思うごとにわたしは、人間における魂の力量という問題を深く考えざるをえません。

このことをはっきりさせるために話が横道にそれるようですが、シェークスピヤの『リヤ王』について触れてみましょう。周知のごとく、リヤ王は自分の国を譲るに当たって三人の娘に対して、どれだけ自分を愛しているかを言わせ、その愛のことばに応じて領土を分けようとしました。この短気な老王は、長女ゴネリルに「まず言ってみよ」と言い、次女リガンに「なんと言わるるかな」と問い、末娘コーデリヤに「言ってみよ」というふうに繰返し問うことに愉悦を感ずるのです。これに対してふたりの姉娘は悪い女であって、ことば巧みに応答して分け前を獲得するのですが、これを聞いていた誠実な、だが父に似て短気な末娘は、本来話すことのできぬ世界を話の種にしようとする父の不敬虔さと、それに平気で応ずる姉たちの不誠実さを見せつけられたために、素直であることができなくなってしまいます。彼女はかたくなに「心で愛して黙っていよう」(Love, and be silent)と決意をいたします。そして「言ってみよ」という父に対して「なにも言うことはございません」(Nothing)と答えます。しかも、それを聞いて驚きつつ反射的に「なんにも？」(Nothing ?)と言う父に対して、もう一度繰り返して彼女は「はい、なんにも」(Nothing)と答えるのです。以上が『リヤ王』の発端な

で勝手に作りあげるという結晶作用なのではなく、人格に本来伴っている注目作用というものが、オルテガのことばを借りて言えば〈ひとつの対象だけに凍りついてしまった〉場合なのであって、漠然と一般的に眺めていては決して知ることができなかった、もとから対象にそなわっていた価値を認めることにほかならないことになります。おそらく、「美しき誤解」とか「結晶作用」とかいうふうに恋愛を理解する場合は、自己の中に欠乏している価値を異性に見出し、それを得ることによって自己の充足と満足を願うという一種の欲情、――プラトンの『饗宴』の中で喜劇詩人のアリストパネスが、恋愛というものは、われわれが失った自分の半分を獲得せんとする心持から由来しているといった、あのアンドゥロギュノス神話(アンドゥロスは男、ギュネは女で、男女の意)を主張した場合のような、一種の欲情が恋愛であるという理解がそのうちに含まれているでしょう。だが、そのように考えるべきではなくて、オルテガによれば恋愛というものはあくまでも、自己が自己の外に抜け出て対象のもとに赴くことであり、対象の存在理由を深く確信することにおいて対象を凝視し続けることであったのです。この場合、アクセントが置かれるのは対象の存在それ自体であって、それを得ることによって自分が何かを獲得することができるかどうかというようなことは第二義的なことでなければなりません。したがって、恋愛を性本能と同一視したり、あるいは、本来対象に無い価値をデッチ上げる主観の結晶作用だと理解するところの、愛される対象よりも愛する主体の側に強調点を置く理解の仕方は、恋愛、――この動的体験に対して、ちょうど血の通っている温い生きた人間の身体をそのものとして理解しないで、冷い死骸の解剖によって押しはかる場合のように、見方によってはある程度まで真実を衝いてはいますが、たしかにどこか重大な誤りを犯したことになるのだと言わねばなりますまい。

3 欲情と恋愛

その意味で欲情と恋愛は互に異なったものです。恋愛は決して単なる欲情ではないのであります。なぜかと言えば、

Ⅰ、第一、欲情が、対象を、自己のために利用せんとして自分の方に向かって引き寄せることであるのに対して、逆に恋愛は、いつのまにか自己自身から抜け出してわれわれが対象の方に引き寄せられていくことでありますから。

Ⅱ、第二に欲情は、それを満足させてくれる対象の数を無制限に拡大しようとする傾向を持つのに反して、恋愛は〈排他性〉を固執するものでありますから。ここに、恋愛に深い運命感が伴うことの理由があります。たとえば夏目漱石の『それから』の主人公・代助のことを考えてみましょう。彼は若いころ、自分の友人の平岡に恋人の三千代をゆずってしまうのですが、あとになってどうしても三千代なしに生きられぬ自分を自覚します。代助は自分でもはっきり自覚しているような美的享楽主義者であって、どんな女も同じだということをよく知っているのだし、それに三千代は他人の奥さんですのに、彼はどうしても彼女でなければならぬと思うのです。そのため、当時では法律的に罪人になって社会から葬られることがわかっているのに、その思いを彼女に告白してしまいます。まことに恋愛は排他性を固執するものであったのです。

Ⅲ、第三に欲情が、異性を見るときに〈拡大鏡的〉に全体的・一般的な印象によって燃え上がるものであるに対して、恋愛はただひとりの対象を〈顕微鏡的〉に凝視することでありますから。

まことに、オルテガが言ったように「恋愛はわれわれの人格の奥深い層から湧き立ってくる津波のようなもの」であります。深い魂は深く激しい恋愛をするでしょう。

(次回は「続・欲情と恋愛」)

いや、おのし入れ。おれは祈禱をして、それからねよう。

だが彼の祈禱は自分のためのものではありませんでした。「世上の着る物もない哀れな貧乏人ども、今どこにいるにせい、……いかにしておのしらはこういう気候を凌ぐぞ?」。このリヤ王の祈りを記しながら、ブラッドレーは「これは、人をして、シェークスピヤの前に跪かせる章句の一つである」と言っています(『シェークスピヤの悲劇』)。祈りつつ、リヤ王はへつらいの欺瞞や、権力の残忍さに気づいて、階級や衣服の差別の下に共通の人間性を見透すことを知っていくのです。わたしは『リヤ王』を読むごとに、このような悲劇の中における彼の魂の偉大さに対して、(アリストテレスのことばを借りて言えば、)哀憐と恐怖を感じつつ、自分みずからの魂がカタルシスすなわち浄化されていくのを覚えざるをえません。

はじめに述べたように、恋愛もまた、この『リヤ王』によって示されたような魂の力量の問題と結びついているものです。力量のある深い魂は、恋愛の場合にも深く激しい恋をするはずなのであります。

2 スタンダール批判

このように、もし恋愛というものが人間の持つ自由の深さと関連する魂の力量の問題と解することが許されるならば、たとえば「恋愛とは、美しき誤解であり、誤解であって差支えありませぬ。そして結婚生活とは恋愛が美しき誤解であったということへの、惨憺たる理解であります」というような、亀井勝一郎氏の有名な恋愛の定義づけなど(『愛の無常について』)は、東洋の隠者のようないかにも氏らしいおもしろい言い回しであったとしても、何か納得のゆかぬ思いにわたしを駆らせます。恋愛とは美しき誤解であるというこういう考え方は、おそらくスタンダールの恋愛論の、あの「結晶作用」の理論にほかならないでしょう。ザルツブルクの塩坑へ行って、廃坑の奥深くへ冬枯れで葉を落とした木の枝を投げ込み、二、三ヵ月して取り出して見ると、それは美しい塩の結晶に覆われています。小雀の足ほどもない、いちばん細い枝も、無数のきらきら動く美しいダイヤモンドで覆われたようになって、もう初めの枯枝を見ることもできません。そのように、人はひとたび恋にとりつかれると、「結晶作用」によって本来枯枝のように価値のない異性を、想像によって完全なものとして飾るようになるのだ、とスタンダールは言うのです。だが、恋愛ははたして「美しき誤解」とか「結晶作用」というふうに理解されることが正当でしょうか。わたしは、恋愛が恋する者の主観的な結晶作用などというものではなく、正常な人にあらわれる注意作用が異常化することだと言って、スタンダールの恋愛論を反駁した、スペインの哲学者ホセ・オルテガの考え方を、思い出します。

オルテガの恋愛論で注目に値するのは、恋愛と神秘主義とが非常に深い所で共通性を持っているということを論じているところです。彼によれば、恋愛も神秘主義も、ともに、自己というものが、世界や自分の外に抜け出て在るという陶酔(エクスタシー)にほかなりませんでした。ギリシャ語のエクスタシスということばは、新約聖書では使徒行伝一〇・一〇や一一・一七に「夢心地」、「夢うつつ」と訳されていますが、これは、「外へ」という意味のエクと、ヒスタマイ(立つ)ということばと関係のあるスタシス(起立、あるいは持続)との結合によってできたことばとして、もともと自分が自分の立っている場所の外に抜け出して、何かある対象のもとに赴くという意味でありました。そしてその対象のもとに赴くということが意味することは、よく考えれば、愛する対象を彼が異常なまでに激しく注目しているということにほかならないでしょう。そうすると恋愛というものは、単に主観的に、対象に本来なかった価値をこちら

った。しかしその沈黙のなかに、私たちはおたがいに通ずる何かを感じ合っていたようだった。むろん彼は、帰りしなに、おざなりの早くなおって帰ってくるんだな、という言葉しかかけてくれなかったとしても、とにもかくにも彼にも身の上の相談ぐらいは気易くできるのだ。たとえ何の役にも立たなくてもである。しかし他の教会ではどうかは知らないが、私の教会に関するかぎり、教会員同志の間にはこんな同志感のようなものはない。同志感という言葉が悪ければ、みんなめいめい何かの鎧を着ていて、裸のつきあいなんかないし、そうしないことがむしろ立派なことと考えているのではないかと思われるふうなのだ。

といってもむろん私は、教会の者が誰一人見舞いに来てくれないということに憤慨しているのではないのだ。私は、自分の入院のことを教会へ知らせていないのだから、来ないのが当然だからである。ただ順子へは入院を知らせておいた。順子へ直接ではなく、順子の病室の係である看護婦へである。民生委員の証明書を貰えば、医療保護の手続きはもっと早くやれることを聞いたのは、その看護婦からなのだ。私は、折り返し速達を順子へ出し、数日前たずねた福祉事務所の人にもらった略図をそえてそのことも知らせておいたのであった。

私は、毎日のように腕の静脈から血をとられて、いろいろ調べ上げられている。尿は、毎朝その前一日の量を調べられている。私にはわからなかったのだが、足にむくみがあったらしいのだ。レントゲンで心臓の大きさも調べられた。心電図は、入院のその翌日にとられていた。そして私はたしかにもう病人くさくなりはじめていることは事実だ。このうす汚れた白い壁は、たしかに私をそのように変えてしまう魔力をもっている。もしこの壁が牢獄の壁であるなら法律的には無実であっても、きっとこのような私は少くとも何かの犯罪者くさい男になってしまうにちがいないと思われる。

空ベットを一つへだてた私と反対の壁際には、一昨日個室から移されて来た患者が寝ている。きっと長い入院で、個室の高い費用に耐えられなくなったのだろう。洋服の雑貨を扱っている商人ということだが、最初この部屋へ移って来たときは、私は自分も助からない病人ではないのかという気がしたほどであった。というのは、四十すぎの彼は病みおとろえていただけでなく、その顔色は泥炭色で、明らかに何かの癌にちがいないと思われたからである。だから私は、この部屋は、たすかる見込みのない患者を集めておく部屋ではないのかという気がしたのだ。むろんそんなことのあるはずはなかった。それにもかかわらず私は遠まわしに看護婦にたずねるということをしていたのであった。

彼が自分の病気の真実を知っているのかどうかは、私は知らない。今日で三日になるが付添婦はついているが、見舞客はむろん家族らしい人もあらわれない。彼は、いつもだまったまま、人生にでも背を向けているように壁へ向かって横向きになり、誰からも見られたくないといったように、うすいねずみ色の毛布のなかへ頭を突っ込み、足をちぢめてえびのように小さくなっているのである。その私の方に向けられている丸められた背は、うすい毛布越しにむき出しになっているように見える。しかしかつては大きく頑丈だったにちがいないその背は、子供のそれのように小さくなっていた。だ

夜警番の日記（終回）

椎名麟三

12 白い壁のなかで

いま、私をとりかこんでいるのは、白い壁だ。しかも秋になれば改築するといわれているが、しかしいささか古びすぎている病院なのである。だからその折角の白い壁も、戦後まもない建築の粗雑さのためか、茶褐色のしみが大きくしみ出していて、何としてもうらぶれた感じがするのだ。しかもベットも錆びついていて、少し動いてもバネがぎしぎし大げさな錆びた音を軋らせる始末なのである。

診療所の医者から入院するようにすすめられてこの病院へ入ってからもう一週間近くになる。その間に一人が肝臓で呆気なく死んで、三つのベットのうちの真中のベットは、いまだに空だ。しかし病院の空のベットというものは、夜中にふと眼をさましたときは、実にわびしい感じがする。むき出しになった貧乏くさく汚れたマットから、死を思わせる空虚が感じられて来るのだ。むしろ死体でもいい、そこに横になっていてくれた方が、かえって落着いた気持になれるのではないかと思われるくらいなのだ。

会社のストライキは、長びいているようだった。しかし倉庫係の社員が、倉庫係を代表して見舞いに来てくれた。彼は、倉庫係では一番の年輩者で、見舞いに来ていながら、定年後の話ばかりして帰って行った。ストライキや賃上げよりも七年先の定年が彼にとって心配だったのだろう。しかも彼は、晩婚で一番上の長男は、まだ中学生だという有様なのだ。私は、自分にはその子供もないだけでなく妻もなく、まったくの一人ぼっちだといったら彼はだまってしま

なかったからであり、また、私は、それ以上のことをその名にのぞんだことはなかったからだ。もし彼が、私の死においても、ともに生きていて下さるとすれば、彼の私への好意は、少しばかり身にあまりすぎるだろう。そのとき私は、イエス・キリストへ卑屈なほどペコペコ頭を下げながらきっとこういうにちがいないのである。

『イエス・キリスト様。私は、生きているうちにもうあなたのお恵みを十分すぎるほど受けて来ました。これ以上、あなたのお恵みが受けられるなんて、私の分にすぎています。あなたが少し気の毒すぎるんです。だからどうか私を天国への最後列のビリッカスにおいて下さい。私は、それでも喜んで待っていますから』

といってもたしかに私には、死への不安と恐怖は存在する。たとえそれが教会の人々から不信仰の印として糾弾されようと、このような自分に対してやさしくしてやりたいと思っている。何故ならイエス・キリストだけは、この私に対してやさしくしていて下さるからだ。私は、イエス・キリストを愛する。この言葉は、何度繰り返しても飽きることがない。その名は、私にとっての命の泉であることはたしかなのだ。

向こうの壁際の患者の付添婦があやしむような眼を部屋の入口へ向けているのに気付いた。私は、何となく首をねじ向けて入口の方を見た。夕方の暗い廊下を背景に、妖婆めいた姿の立ちはだかっているのが見えた。だが、次の瞬間、それが順子だということがわかった。その姿が部屋へ入って来たからだった。外には、雨でも降って来たのか、彼女は黒いビニールの雨合羽を着ていた。しかし彼女は、私の顔をたしかめると、大儀そうにそれを脱いだ。そして汗でもかいているのか、縞模様のワンピースからむき出しになっている両腕全体を交る交る紫色のハンカチでふきはじめたのである。その腕は、しなびている感じで、心なしか黄疸の黄色さがまだ残っているように見えた。やがて彼女は私の傍の空ベットへ仕方なさそうに腰を下したのである。そのときどこにいたのか、彼女の二人の幼女が入って来た。あの吉子という幼い方の子を先頭にだ。だが、入って来るなり、自分の母親の隣りへすました顔で腰を下し、つづいて上の方の幼女がその傍へ仕方なさそうに腰を下したのであった。私は、ちょこなんとならんで私を見ているその三人に妙な感じがした。大げさにいうならば、この世ならぬ出来事という感じがしたのだ。親子三人そろって来るなんて、私には理解できなかったからだ。しかもその三人は、誰かの葬式にでも来たようにそろって押しだまっているのだ。私に、ねずみの子を踏み殺させたあの三つの吉子さえもである。私は、どうしてかどぎまぎしながら介解するように順子へいっていたのだった。

「やはり無理に退院していたんですね。電話であの病院の看護婦さんに頼んでおいたんだけど」

だが、順子は使い古した買物袋から二つに折った千円札の札束をつまみ出して来ると、起き上っていた私の膝の傍へ投げ出すようにおいた。

「二万円あるわよ」と彼女はいった。

私は、解しかねて彼女を眺めた。彼女は、その私をあわれむように見ながらふと皮肉めいた笑いをうかべた。

が、とにもかくにもそれは生きている人間の背だった。彼がいま、どんな絶望や苦痛や不安のなかに投げ込まれていようとも、彼がいま死んでいるのではなくて生きているのだということは、私にとってはたとえ痛ましいものであっても、その小さな背へある安心な感じもするのである。そのとき看護婦が入って来て私へいった。

「用意はできていますか?」

私は、何かぎょっとした思いで問いかえしていた。

「え?」

すると看護婦は切口上に答えた。

「院長さんの回診です」

私は、あわてて浴衣の下に着ていた丸首のシャツを脱いだ。しかしもう院長を先頭にして内科の医員と婦長がつづいて入って来ていた。院長は医員と、ドイツ語らしい外国語で、二言三言言葉を交した。そしていかにも形式的な感じで聴診器を私の胸に二、三度あててみた。しかしそれだけであった。院長は、もう、もう一方の壁際の男の方へ歩いて行っていた。今度は院長は、聴診器もあてずに男へ、

「どうですか?」

と声をかけたきりだった。男は、小さな声でぼそぼそ何かを訴えたようだった。しかし院長は、言葉をにごした感じで、まだ検査中だからと答えていたようである。そしてそのまま、一行の三人は、もう部屋を出て行っていたのであった。事務的といえば事務的な回診だった。しかし私には、ある余韻のような感じの残っているのを感じていた。それは看護婦のいった言葉だった。それは身体のなかのどこかで、空虚な音を立てて鳴っているように繰り返されていたのである。

『用意はできていますか? 死ぬ用意は……』

私は、寝がえりを打った。そんな用意なんかできているはずはなかったからである。私がイエス・キリストによって生きて来られたこと、そしていま、その名によって生きていること、それが私のすべてなのだ。この私が死んで、ある日復活するのか、それともあの永遠の無のなかへ消え去ってしまうのか、この私にはわからない。全くそもそもにおいてあの世があるかないのかさえ、私にはわからないのだ。ただ、私の信じられることは、私の生きて来られたのは、イエス・キリストの十字架と復活によってだということだけである。そして私にとってはそれだけで十分なはずなのである。全くその余のことは私の知ったことではないのだ。もし私が、イエス・キリストにだまされていたのだとしても、とにかく私は、彼の名によって生きて来られたということの事実だけは、この私から誰も奪い去ることはできないのだ。明日イエス・キリストの存在なんか虚妄であり、それは人間のつくり出したあわれな夢であるということが科学的に立証されたとしても、この私からは、その名が私を生かしてくれたという事実を消し去ることはできないのだ。たとえ世界中の人間が、この私のイエス・キリストに寄せている限りない信頼を、愚鈍な男の頭にやどった情ない誤解として嘲笑しようとも、私は、愛想よくその嘲笑を受取りはするが、やはりイエス・キリストを心から愛せずにはいられないのである。私が自分の恥しさや罪においてさえ、ともに生きていてくれたものは、イエス・キリストしかい

根は、ぬれて昼近い光をにぶく反射させていた。しかし、そのとき私は、ある痛々しさを感じて胸をつかれた思いがしたのだ。社宅に沿った道を、黒いビニールの雨合羽の女と両脇へぴったり身を寄せた小さな二人の幼女の後姿を見付けたからである。しかもその二人の幼女は、傘も雨合羽もないのか、母親の黒い雨合羽とは対照的な真白なビニールの風呂敷らしいものをめいめい頭からかぶっているのだ。しかし私がその三人の後姿に気付いた次の瞬間には、もう都電の通りの方へ曲って見えなくなっていたのであった。

私はベットへ帰ってハガキを書いた。

『わたしは、結局あなたを傷けて来ただけでした。いまとなってはあなたたちのために神様へ祈るよりほかに仕方がありません。あなただけでなく、世のなかの人もこのわたしの祈りを笑うでしょう。無力な何の役にも立たない祈りとして、でも祈るより仕方のない場合もあるということがこの白い壁のなかでは今の私には身にしみて感じられて来るのです。あなたは、わたしなんかとちがった生きる力をもっています。どうか神様がそのあなたの力を支えて下さるように心から祈らずにはいられません。もしも、わたしが退院できれば……』

医者と看護婦が入って来た。医者は、代謝機能をしらべるのだといって、私の左腕の静脈へ注射器の太い針を入れた。するどい痛みが起った。私は、思わずうなった。

「痛かったですか」と医者はいった。

医者は、針を抜いて別のところの静脈へ注射しなおした。どうやら注射しそこなって静脈の外で液をこぼしたらしく、医者が去ってからも最初の注射部位がひどく痛んだ。むろんどんなに痛もうと死ぬ痛みではない。私は、寝ころんで書きかけていたはがきのつづきを書きつづけようとした。そのときふと気が付くと、枕元においてあった聖書がないのだ。私は、あたりをさがし廻り、それからベットから降りてその下もさがして見た。しかしそれがふいになくなってしまっていることは確実だった。

次の瞬間、私はベットへ身を倒して笑い出していた。心臓にショックをあたえてはならない気がして、大笑いになりそうになるのを押えようとしながらも、どうしても笑いをとめることができなかった。あの吉子という三つの幼女が、母親へ何かの意地悪をしたらしい男への小さな反抗から、それをぬすんで行ったにちがいないことに思いあたったからである。それでなくてもその聖書は、幼女の好奇心ぐらいはひくことはできた。何故なら私は、順子を最初にたずねたとき順子のために焼かれてしまった聖書のかわりに、新しいポケット版の聖書を買っていたからだ。たしかに黒表紙の紙の縁に朱をしみ込ませた小さな本は、玩具の足しにはなるかも知れなかったのである。

それにもかかわらず私の笑いはとまらなかった。あの幼女は、彼女には結局は何の役にも立たないあの本をどうするかと思っては笑い、順子がもしそのことを知ったとき、どんな顔をするかとを想像しては笑い、しなびてはいるが、ひどく大人びている上の幼女がそれを見たときどうするかを思っては笑い出していたからだった。その私は、折角書きかけていた順子あてのはがきを破りすてていた。その笑いのなかに私は、順子親子に対する新しい父らしい愛情さえ

「あんたなんかに頼んでも仕様がないから、自分で横川のところへ行ったのよ。横川の妾のいるアパートの方へね。いまごろあの横川のおかあさんと旦那との間に大騒動を起しているよ」

「でも、どうしてこんな金を?」

だが彼女は、それに答えずにふたたびあわれむような眼を向けただけだった。しかし頭のにぶい私にも、彼女が何か恐喝めいた手段でもつかって手に入れて来た金にちがいないことは察せられた。しかしそれがどんな金であるにしても、この順子から金をもらういわれは私になかった。私は、その金を彼女の方へ差し出しながらいった。

「わたしの方は、保険があるから大丈夫なんですよ」

彼女は、ちょっとまごついたようだったが、腹を立ててでもしたようにその札束を私の手からむしりとると、買物袋のなかへ投げ込んだ。

「いらなきゃいいのよ」と彼女はいった。

「御厚意は感謝するけど……」

だが、彼女はその私の言葉を遮るようにして小さく叫んだ。

「何をいっているのよ、トンチキ!」

順子は、ベットから立上っていた。私は、その彼女の言葉に強い怒りのこもっているのを感じて、一瞬とまどった。私は彼女を恥しめたことを感じた。たしかに私は彼女の何かのふかい心をひどく傷けたことは疑う余地はなかった。私は吃りながらいった。

「手紙を出したんですけど。民生委員のことは……」

私は、だまった。彼女にそんな質問に答える意志のないことは彼女の顔色からわかったからだ。しかもその彼女は、軽蔑したように私の枕元にある聖書へちらっと眼を走らせていたのである。だが彼女は、そのまま挨拶もせずに部屋を出て行ったのだった。すると幼い二人もあわててベットから降りて母親の後を追って行くと、ドアの向うに消えて行ってしまったのである。

ある後めたさだけが、私の心に残っていた。それは私が死んでもそれだけは残って行くだろうというやり切れなさをともなってだ。全くたとえその金が、どんな不正な手段で手に入れて来たものであっても、私はそれを受取ってやるべきであったのだ。私にはその彼女を恥かしめることはむろんことわる権利さえあるはずはなかったからだ。私が、貧しい夜警番であるというからではない。彼女一人さえ救うことのできなかった上に、病気にさえなってしまったあわれな存在であったからだ。しかもあの金は、彼女のいままでに私のためにしてくれようとしたはじめての心であり、しかもあるいはそれを受取ることによって彼女の何かの救われる唯一つの機会であったかも知れないではないか。『一切が終りだ』と私は呟いた、『もうとりかえしがつかないんだ』

彼女の、あの金をわざと無駄につかいすてている姿が思いうかんで来た。全く彼女ならやりそうなことだったからだ。私は、みじめな気持だった。私は、仕方なく横になった。もちろんそうしてもどうしようもなかったのだ。結局私は落着なく起き上ってベットから降り、窓へ近寄った。外は小雨がけむっていて、むしあつさが見わたされる街並みに感じられるようだった。その私の二階の病室の真下は、ずらりとどこかの会社の社宅がならんでいて、そのトタン屋

読者の声

★ご投稿を歓迎します。
★薄謝を呈上します。
★住所、氏名、職業、年令をご明記ください。

ギプスをはめた子供たちへ

現在わたしは国立療養所に結核で入所中の者ですが、わたしの向かいの療棟は、カリエス病棟とよばれている。ここはおとなたちにまじってかわいい患者さんが、一〇人ばかりギプスをはめて、来る日も来る日も病床に横たわっています。この一〇人ばかりの少年少女たちは義務教育も満足にうけられずに、何年も何年も寝ていなければならない子どもたちです。手術をして、やっと歩けるようになった子どもたちは足を引ずりあるいは背なかをまげて、わたしたちの病室におじさんとよびかけて、遊びに来るようになるには、なかなかのしんぼうがいる。六人部屋に十才前後の少年少女が両親の面会を、どんなに飛び立つ思いで待ちこがれていることでしょう。もしそのうちのひとりに、両親の面会があったり、兄弟の面会があるという日がわかれば、一日も二日も前から首を長くして待っている。でもいそがしいのか、両親の面会がしばらくとぎれたり、便りが来ない日がつづくとしょんぼりさんだ。

漫画の本を見て、でも一心に次のよき日があることをじっとしんぼうして待っている。なかには家が貧しくって、面会に来られない両親だってあるし、親のない子だってある。小学校へは入学式の日、たった一日しか行かなくって、ずっと病気だったという子もいる。このカリエスで満足に義務教育もうけられず、遠足や運動会の楽しみも知らずに、一年二年と、病室でくらす子には、健康だったという思い出もない。でもみんな人なつこいかわいい顔をして、神妙な患者さんです。どうかこの子らのために、やさしいお便りがいただけないでしょうか。読み古したご本でもいただけないでしょうか。まくらもとで読んでやります。子どもには何よりも明るい微笑が浮かんでいるときが、いちばん美しいし、見ていて気持ちがいい。どうかこの子らに明るい微笑をなげかけてください。

（兵庫県・三田市・大原・国立兵庫療養所内六・西堀尚恒・40才）

現代のカルテから

『月刊キリスト』に毎月載せられている「現代のカルテ」は、いろいろな面での現代というものに対し、ユーモアと興味をもって批判されていて、どの月も一つとしてむだがない。その中でもわたしのひかれているのが音楽方面。九月号ハモダン・ジャズVはおもしろく、うなずいて読んだ。

Aわたしがジャズに興味をひかれるようになったのは、クラシック音楽だけでは、わたしの内側にある要求を満足させてくれなかったからであるVと記されているように、現代はクラシック的ではない。現代人は息が短かいというのもそこだろう。たしかに現代人は本を読むにしても、音楽を聞くにしても、すべてスリルとスピードにはしりすぎのところがある。

だがジャズは長い。いい作品はすべて長い。そして、小さくはそぼそと聞いてはおもしろくないものである。だが現代人にはこれがまんのできないことで、息の短かさのくせがつい出てしまう。したがって現代のよさをもつジャズをしらないでいる人が多いのだというわけである。

わたしはとくに黒人霊歌を歌っては最高のベラホンや、アドリブ最高のジャクソン（ミルト）、モンクなど大好きで、プレーヤーもステレオももたないが、ラジオだけはおもいっきりたのしんでいる。

これは文学好きのわたしがたのしむジャズだ。書きながら聞くのだ。文学とジャズとはずいぶんはなれているようだが、わたしは文学にジャズの熱風を生かしてゆくつもりできたせいもあって、関係なしと思っていない。

だがクリスチャンにはかたぶつが多い。

かみ牧師のことばではないがAフルシチョフさんのようにモダン・アートを解さないおかたは、ジャズも、現代音楽もおわかりになりますまいVというわけだ。現代のクリスチャンはクリスチャンらしく、モダン・ジャズでも聞いてもっと息を長くし、じっくり聖書と取り組み、キリストの一生を学んでもいいだろう。ジャズは決して軽いものではないのだ。

（山口県・都濃郡・国兼浩子22才）

肺

結核患者に福音！
誇大宣伝ではない
肺結核によく効く

岩井式油脂吸入機

皮膚病、外傷に膏薬を塗布すれば直ぐ治るのと同様、肺結核治療薬ゴマカプリン酸を一耗の一万分の一の極微粒子として肺の最深部・肺胞内に吸入し到達させ直接治療を促進いたします。

肺結核治療と予防、気管支炎、感冒にもよく効きますから一家庭に予防と治療にぜひ一台を！

文献の要る方は郵券一〇円入れて御申込み下さい。至急御送りします。

横浜市神奈川区斉藤分町一五八
電話（0449）一五二四
岩井式油脂吸入機株式会社
横浜市神奈川区旭ケ丘六〇ノ十二
電話（0449）三四・・

岩井式油脂吸入機療法研究所
所長医学博士 田沼息正
発明者 岩井良平
道順‖東横線反町下車松本消防署坂上、横浜駅西口よりバス31にて栗田谷下車

感じていた。その私にとっては、もはやそのハガキは不用な気がしたからだ。

『しかし一番困ってるのは、あの聖書さんだろうなあ』と私は微笑しながら心に呟いた。

たとえ、幼女の手から人知れずどぶのなかにすてられようとも、聖書がどぶのなかにも流れているということが、何故か私には素晴らしいもののように思われてならなかったからであった。笑いつかれて私は、ベットへ横になった。そして気がつくと、先刻から向こうの患者の付添婦が、気ちがいでも見ているようなうろんな眼で私を眺めているのである。私は、仕方なく彼女へ弁解するようにたずねた。

「いま、何時ですか?」

すると彼女は、急に興ざめた顔になって答えた。

「もうおひるですよ」

そして彼女は、用があるとは思えないのにそのまま部屋を出て行ったのであった。だが私は、部屋の白い壁を眺めていた。それがいまや愛すべきものにかわっているのに気付いたからであった。

(終)

プレゼントに
美しい色の
聖画入り

月刊 キリスト
カレンダー

1962年度
(聖句入り)
藤城清治画

70円(〒10円)
発売 教文館・聖文舎
月刊 キリスト発行所

クリスマス・プレゼントには

キリスト者らしい贈りもの

月刊 **キリスト**を！

◇ 2冊以上プレゼントなさるかたには

美しい月刊キリスト・カレンダーを

さしあげます。

1年 700円（〒共）
半年 360円（〒共）　どちらでも かまいません。

◇ プレゼント先へは、クリスマス・カードを

さしあげます。

◇ 教会で学校で10冊以上まとめて、とってくださる

お世話をしてくださっているかたにも

月刊キリスト・カレンダーをさしあげます。

この取りあつかいは**12月末日**まで

月刊キリスト発行所
教文館
大阪キリスト教書店
日曜世界社
聖文舎

ほかキリスト教書店でいたしております。

編集後記

◇クリスマスが近ずいてきました。教会で、学校で、クリスマスを迎える準備をなさっていることと思います。まず、心の準備、そして歌の、劇の、プレゼントの……。

本誌では、今年、「家庭でクリスマスを！」という、おすすめをしたいと思います。教会や、学校や、デパートや、巷のクリスマスだけでなく、家族だけで静かに祝うクリスマス礼拝、そして、だんらんのひととき、ぜひ、みなさんの家庭で守っていただけたらと思います。クリスマスストリーはなくても、ごちそうがなくても、プレゼントがなくても、イエス・キリストをプレゼントしてくださった神さまへの感謝と喜びとはあらわすことができると思います。

◇一年間、お忙しいなかにも、小説を書いてくださった椎名さん、「キリスト教のいろは」を書いてくださった島村先生とは、一時、お別れです。近いうちに、再登場していただけることと期待しています。

◇来年の企画が、やっとできあがりました。下の欄とともに、次の色べージをごらんください。今年に、まさるとも劣らない内容にして、読者の皆さんに喜んでいただきたいと思い、編集部一同、はりきっています。この雑誌が、皆さんの信仰生活の良き伴侶となり、伝道のお役にたつ、ということにならなかったら、たいへんです。今年にひきつづき、ご愛読くださいますようお願いいたします。

◇それにしても、いまだに、「はじめて、この雑誌のあることを知った」というお手紙をいただくのに、おどろいています。こちらでも、だいぶ宣伝し、（一二月号と一月号とは「朝日新聞」全国版に広告します）読んでいただきたいと思っているのに、まだまだごぞんじないかたが多いようです。愛読者の皆さまがた、どうか、この雑誌を、教会で、学校で、また、お友だちに、ご親類にすすめてくださるようお願いします。

◇死の灰の降りつづくきょうこのごろ、日韓軍事協定のうわさがとんでいます。日米安保条約のような軍事条約を結ぶのはやめて、軍備を全廃し、原子力を平和利用できるように、このわたしたちの世界を、一日も早く、したいものです。

1月号予告

〈特別寄稿〉
聖霊は今ここにいます　パウル・ティリッヒ

〈三回連続特別講話〉（東京神学大学教授）熊野義孝
聖書とは何か
日本人の精神構造における
罪と赦し

（対談）亀井勝一郎　佐古純一郎

〈インタビュー〉
ソヴィエト・アフリカを訪ねて　北村徳太郎

〈新連載〉
私の人生論　北森嘉蔵
キリスト教入門　菊池吉弥
戦後文学論　佐古純一郎
グラビア　生活のなかのキリスト者（司会）

〈連載〉
聖句をめぐる座談会　石島三郎
恋愛論　高木幹太

〈巻頭随想〉
都留仙次、秋保孝次、山崎孝子

〈伝道説教〉
由木康

〈私の愛誦聖句〉　宮内彰、小林宏

〈教会員紹介〉
福島県会津高田
死をこえて愛は生きる　遠藤栄
——ある牧師夫人の手記——

〈口絵〉　**見てきたキリスト教美術**　田中忠雄

月刊キリスト

昭和三六年十一月二五日　印刷
昭和三六年十二月一日　発行

編集人　高戸要
発行人　浜崎次郎
発行所　日本基督教協議会
文書事業部
東京都中央区銀座四ノ二
振替　口座・東京一一六七九
電話（561）六一三一・八四四六

発売所　教文館
東京都中央区銀座四ノ二
毎日新聞販売店
東京都中央区有楽町一ノ二
印刷所　恒陽社印刷所
株式会社

直接、ご購読になりたいかたは、発行所まで、お申しこみください。

一部　六〇円（〒六円）
半年　三六〇円（〒共）
一年　七〇〇円（〒共）
三弗（海外）

クリスマス聖想の友……　★新教新書★

クリスマス・ブック
ルター著　中村妙子訳
ルターのクリスマスにちなんだ七篇の小説教にデューラー等の名画を配した美しい本。青少年に好適
¥140　〒30

イエス伝詩集
尾崎　安訳
ブレイク、テニスン等泰西古今の名詩のなかから救主をたたえるうたをあつめた、詩によるイエス伝
¥120　〒20

我は初めなり終りなり
リュティ著　井上良雄訳
受肉、降誕、復活……教会暦による七二篇の小説教。慰めと励ましにみちた最もクリスマス向きの本
¥170　〒30

我山に向いて眼をあぐ
バルト　トゥルナイゼン著　井上良雄訳
待降、降誕、受難を主題とした珠玉のごとき小説教集。神の子の受肉に秘められた福音の真理の解明
¥160　〒30

バルト自伝
バルト著　佐藤敏夫訳
「最近10年の私の変化」というテーマで，1938，48，58年の3回にわたって書かれたバルトの自伝
¥120円・〒20

わが幼少年時代
シュヴァイツェル著　波木居斉二訳
死の陰の谷に坐す黒人への愛の奉仕に一生を捧げる聖者シュヴァイツェル博士の，少年時代の回想
¥120円・〒20

四つの愛
C・S・ルイス著　蛭沼寿雄訳
「愛すること」とは何か？　愛情、友情、恋愛、聖愛という四つの愛について鋭く分析し、深く観察し、これらの愛の相互の関係を聖書にてらしつつ克明に解明した名著
B6・上製・四〇〇円・〒70

キリスト教少年文庫

救主イエスの一生
ディケンズ著　一〇〇円・〒20
英国の大文豪が少年達のために心をこめて書いたイエス伝

もう一人の博士
V・ダイク著　一二〇円・〒20
ベツレヘムの馬小屋に遅れて到着したもう一人の博士の話

ベツレヘムの星
水野良平著　一五〇円・〒20
四季の星座と大宇宙の話を通じて、創造者のみわざを語る

クリスマス特価案内・図書目録進呈
東京新宿新小川町3・振替（東京）9991　新教出版社

一九六二年 月刊 キリスト予告

〈新連載〉

私の人生論　北森嘉蔵

恋愛、結婚、死、友情、生など、さまざまの人生の問題を明快に解明してくれる

キリスト教入門　菊池吉弥

『新生―わが出エジプト』の著者、上野の下谷教会牧師の説く生活に根ざした入門

戦後文学論　佐古純一郎

井上靖、松本清張、丹羽文雄ら戦後に活躍した作家の見た現代人の生き方、考え

グラビア 生活のなかのキリスト者

「信仰に生きる」につづき無名のキリストが社会のなかでいかに生きるかのルポ

〈1月号特別記事〉

聖霊は今ここにいます　パウル・ティリッヒ

アメリカ最高の神学者からの特別寄稿、新しい聖霊論

聖書とは何か　熊野義孝

神学者であり牧会者である氏のわかりやすい聖書入門

死をこえて愛は生きる

―ある牧師夫人の手記―

牧師と結婚するまでの愛の手紙、子供を残しての死

日本人の精神構造における罪と赦し

（対談）亀井勝一郎　佐古純一郎

二人の文芸評論家にする日本人の罪意識、救済観研究

〈4月号より〉

誌上聖書研究会

青年会、婦人会での聖書研究のためのテキスト、講解と信徒による質問、研究

募集

〈手記〉

信じるようになるまで

どのようにしてキリストを信じさせられたか、具体的な生活の記録

毎月二〇日締切り、枚数を問わず

〈写真〉

十字架のある風景

教会の内外、家庭のなかなど十字架のある風景写真、組写真も可、短い解説付き、毎月二〇日締切り

〈レポート〉

わたしたちの聖書研究

どのようにして聖書研究をしているか、その方法、その時の発言、四月号からの誌上聖書研究会へのご意見も可、一月二〇日まで

いずれも誌上掲載の分には薄謝をさしあげます。住所、年令、職業の記入をお忘れなく。

KIRISUTO The Christian Home Journal.
Vol. 13. No. 12 December 1961
Japan Commission on Christian Literature Tokyo

世界
に
おくる ことば

インドネシヤにおくる
10000冊聖書のため、ご献金ください。
(11月1日改訂新カタログご入用の方に、お申込次第進呈します)
財団法人 日本聖書協会
東京都中央区銀座4－2
大阪市北区堂島上3－29

IBM 2879

製版・印刷・恒陽社